

## **第Ⅱ部 2018-2019年度における各研究室等の活動**



# 01 言語学

## 1. 研究室活動の概要

### (1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2019年度現在の教員数は、教授1名、准教授2名、専任講師1名、助教1名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室をはじめ、本学の日本語教育センター、および情報理工学系研究科（音響音声学）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近では20名前後で、大学院修士課程へは最近では7名前後で、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程はそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。博士課程大学院生の間では博士論文を書く態勢が定着してきている。

教養学部前期課程には、毎年総合科目を出講することにより協力している。

### (3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979年以降『東京大学言語学論集』を毎年刊行している。同誌は東京大学学術機関リポジトリにより全文がワールド・ワイド・ウェブ上で公開されている。最も関係の深い学会は日本語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会等の委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会などで発表することもある。

また、1998年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎年1人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批評を受けるというものである。近年は、東京大学総合文化研究科・言語情報科学専攻とも交流演習を実施している。

当研究室では、1998年以來、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。そのURLは次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp>

### (4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、韓国、中国、ポーランド、グアテマラなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011年5月22日に“Sign Language Research in Asia”を開催し、150名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012年に大学院生1名が1学期間香港中文大学に留学した。2013年にも、夏期講座に大学院生1名が参加している。さらに、現在、イギリス・カーディフ大学とも交流協定の締結を進めており、2020年度から提携予定である。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

西村 義樹（教授）	： 認知言語学	2004年4月～現在
小林 正人（准教授）	： 歴史言語学	2010年4月～現在
長屋 尚典（准教授）	： オーストロネシア諸語	2019年4月～現在

## (2) 講師の活動

梅谷 博之

在職期間 2016 年度～

研究領域 モンゴル語

主要業績

(論文) Hiroyuki UMETANI, 「Demarcation between converbs and what are not converbs in Mongolian: Focusing on combinations of a verbal-nominal suffix and a case suffix」、『Asian and African Languages and Linguistics (アジア・アフリカの言語と言語学)』、13、113-129 頁、2019.3

(解説) Tooru HAYASI and Hiroyuki UMETANI. 2019. Languages of East Asia. In Jack S. Damico and Martin J. Ball (eds.) *The SAGE encyclopedia of human communication sciences and disorders*, Vol. 2, 1030-1035. Los Angeles / London / New Delhi / Singapore / Washington D.C. / Melbourne: SAGE Publications.

(学会発表) 国内、梅谷博之、「モンゴル語ハルハ方言における諸否疑問助詞 *uu* を用いた疑問詞疑問文」、2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、2019.3.27

(啓蒙) 梅谷博之、「モンゴル語の「アルタイ的」な特徴」、『FIELDPLUS (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)』、21(2019.01)、6 頁、2019.1

(共同研究) プラシヤント・パルデシ、国立国語研究所、「名詞修飾表現 (「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクトのサブプロジェクト)」、2016～

山越康裕、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」、2018～

児倉徳和、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2)」、2019～

## (3) 助教の活動

鍛冶 広真

在職期間 2016 年度～2018 年度

研究領域 エウエン語 (ツングース諸語)

主要業績

(著書) 共著、吉田睦・永山ゆかり編、『吉田睦・永山ゆかり編『アジアとしてのシベリア』「エウエン語のフォールドワークとサハ共和国の多言語使用」』、2018.12

(学会発表) 国内、鍛冶広真、「ツングース語のテンスとアスペクト」、時間生成学 第2 回領域会議、2019.2.2  
国内、鍛冶広真、「エウエン語における同化」、2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学 ユーラシア文化研究センター (羽田記念館)、2019.3.27

(学会) 国内、日本言語学会、一般会員、2018.12～

石塚 政行

在職期間 2019 年度～

研究領域 バスク語

主要業績

(論文) Ishizuka, Masayuki, 「Detransitivization of productive causative verbs in Basque」、『日本エドワード・サピア協会研究年報』、2018

(学会発表) 国内、石塚政行、「日本語移動表現の直示情報と主体性：話し手自身の移動と第三者の移動の対照」、日本言語学会第 156 回大会、2018.6

国際、Ishizuka, Masayuki, 「Motion Event Descriptions in Basque (Navarro-Labourdin Dialect)」、Motion Event Descriptions Across Languages、2018.12

(予稿・会議録) 国内会議、石塚政行、「日本語移動表現の直示情報と主体性：話し手自身の移動と第三者の移動の対照」、2018.6

(学会) 国内、日本言語学会、一般会員、2019.4～

国内、日本エドワード・サピア協会、一般会員、2019.4～

#### (4) 外国人研究員・内地研究員

	2018年度	2019年度
内地研究員	0名	0名
外国人研究員	1名	0名
大学院人文社会系研究科研究員	2名	2名

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- 「東京は神田の生まれ」「東京も神田の生まれ」の意味論的特徴
- 「重言表現「[V+N]をVする」の許容度の違いに関する研究
- 「日本語を起点とした英語・中国語における「形容詞＋名詞」の組み合わせの共通度—Wikipediaを利用して—
- 「石川県鳳珠郡穴水町岩車のアクセント分布」
- 「ウェールズ語正書法成立の系譜」
- 「格融合の要因の分析」
- 「日本手話の使役構文—認知文法の観点から—」
- 「フィンランド語古期文語における所有人称接尾辞の実現形に関する検証と考察」
- 「English-Japanese Code-Switching Amongst the Foreign Student Community in Japan 外国人留学生コミュニティにおける英語—日本語のコードスイッチング—」

2019年度

- 「韓国語の罵倒語における「イヌ」の用法とその変化について」
- 「Twitterにおける「走る」の他動詞的用法について」
- 「フランス語のトートロジー構文：通常形と左方転位形との意味の差異を中心に」
- 「補助動詞「テモラウ」の働きかけ性に関する分析」
- 「神戸方言の強調形オノマトペに関する包括的分析」
- 「名詞「はなし」の送り仮名の表記揺れの調査」
- 「感謝表現から見る言語意識の地域的特徴—東北地方・関東地方・和歌山県の比較を中心に—」
- 「口語的記述における「誤り」分析—「-ンイン」語と「-イイン」語に着目して—」
- 「熊本方言における直示要素を持たない指示詞」
- 「デンマーク語における語順の通時的研究」
- 「日本語の慣用的受身文の意味分析：「追われる」を中心に」
- 「北杜夫の作品を通して見る、双極性障がいとうつ状態における使用語彙について」
- 「中国語における「yi lian X」構文の構文文法的分析」
- 「琉球方言の新方言語彙における年齢別の使用状況調査」
- 「スペイン語の観光ガイド文献に見られるドイツ語の借用語の文法性について」
- 「他者の一人称使用に対する印象における性差の反映」
- 「原因を表す英語の前置詞 for の用法について」
- 「北海道方言における「するか？」の形で表される意志の疑問表現」
- 「ハンガリー語の名詞派生接辞 -vAuy,-mAny について」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

- 白井優花 「日本語の自他の選択に関わる要因と意図的でない他動詞文」(指導教員) 菊地康人
- 大山祐亮 「印欧語族スラヴ語派における鼻音を含む屈折語尾の通時的変化の研究」(指導教員) 小林正人
- 松本悠哉 「限定形容詞を求めて—日本語形容詞の限定用法と叙述用法—」(指導教員) 西村義樹
- 諸隈夕子 「ケチュア語アヤクーチョ方言の名詞化節内における示差的格標示—「対比性」の観点から—」(指導教員) 西村義樹
- 周与皎 「第二言語から母語への逆転移について—中国人日本語学習者を対象に—」(指導教員) 林徹

2019年度

- 斎藤将史 「日英語の総称文に関する諸問題」(指導教員) 西村義樹

佐藤らな 「Nすぎる構文の考察—認知文法の観点から—」〈指導教員〉西村義樹  
高城隆一 「鹿児島県大隅半島内之浦方言の音韻論」〈指導教員〉小林正人  
塚越柚季 「語境界における祖語の喉音が『リグ・ヴェーダ』の韻律に及ぼす影響と『リグ・ヴェーダ』の詩人方言」〈指導教員〉小林正人  
ZHANG Qianqian「サンスクリット語における非従属節化」〈指導教員〉小林正人

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

大槻知世 「青森県津軽方言の情報の表示をめぐる」  
〈主査〉小林正人 〈副査〉西村義樹・梅谷博之・林徹・木部暢子  
王海波 「満洲・シベ語現代方言音韻論」  
〈主査〉林徹 〈副査〉小林正人・梅谷博之・久保智之・早田輝洋  
熊切拓 「アラビア語チュニス方言の否定とモダリティ」  
〈主査〉西村義樹 〈副査〉小林正人・熊本裕・榮谷温子・ハッサンエバ  
松倉昂平 「福井県嶺北方言のアクセント研究」  
〈主査〉小林正人 〈副査〉西村義樹・梅谷博之・上野善道・新田哲夫

(乙)

なし

2019年度

(甲)

石塚政行 「バスク語文法の諸相認知文法的アプローチ」  
〈主査〉西村義樹 〈副査〉小林正人・梅谷博之・林徹・古賀裕章

(乙)

なし

## 02 考古学

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

東大考古学研究室では、伝統的に「東アジアのなかの日本」という視点を重視してきた。研究科内の北海文化研究常呂実習施設、あるいは学内の総合研究博物館、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、北アジア、西アジア等の考古学分野や年代測定学等の関連分野の教員と協力し、幅広く教育研究活動を展開している。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

北海道における調査活動は60年以上に及ぶ。北海文化研究常呂実習施設と共同で、09年度より大島2遺跡の調査をおこなっている。

佐藤を代表として15年度から18年度まで、現生人類のアジア拡散南周りルートの研究（科学研究費基盤B）を実施し、インドや東南アジア・台湾等での現地調査をおこなった。続けて19年度から現生人類のアジア早期拡散に関する研究（科学研究費基盤B）を開始し、東南アジア・南アジア等の現地調査を実施している。また18年度から中央アジアにおける後期旧石器時代の成立過程に関する国際共同研究（国際共同研究加速基金、基盤研究B〔研究分担者〕）を開始した。

設楽を代表として16年度から前年度までの継承的な研究として東日本における食糧生産の開始と展開に対してレプリカ法を中心とする研究（科学研究費基盤研究A）をスタートさせ、18年度まで実施した。また19年度からは縄文時代の土製耳飾りから当時の社会にせまる研究（科学研究費基盤研究C）を開始した。

福田を代表として日露国際学術交流を継承、推進した。18年度からは、温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（科学研究費基盤研究B）プロジェクトを開始し、ロシア国内ではサハリン国立大学およびハバロフスク地方郷土誌博物館、日本国内では稚内市教育委員会および北海文化研究常呂実習施設と連携し、日露両国における先史遺跡群の発掘調査を実施した。

#### (3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

『東京大学考古学研究室紀要』は、18年度に32号、19年度は33号と順調に刊行された。すべて下記の考古学研究室HP上にて公開している。

考古学研究室のホームページのURLは<https://www.lu-tokyo.ac.jp/archaeology/>

#### (4) 国際交流の状況

考古学研究室とハバロフスク地方郷土誌博物館、ハバロフスク地方歴史文化遺産保護センター、サハリン国立大学考古学教育博物館と交わっている研究交流に関する覚書にもとづき、日露国際学術交流を進めた。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

佐藤宏之 旧石器考古学・民族考古学（現在に至る）

設楽博己 縄文・弥生時代考古学（現在に至る）

福田正宏 東北アジア考古学（現在に至る）

#### (2) 助教の活動

石川岳彦

在職期間 2016年度～現在

研究領域 東アジア考古学

主要業績

（著書）共著、設楽博己（編）、石川岳彦、「中国遼寧地域における新石器時代から青銅器時代の土器の器種組成の変化」、『農耕文化複合の考古学（下）—農耕がもたらしたもの—』、27-40頁、雄山閣、2019.10

（論文）石川岳彦、「春秋戦国時代の燕国と東北アジアの変容」、『季刊考古学』、第144号、97-104頁、2018.8

石川岳彦、「（シンポジウム 2017年度大会特集テーマ 史料と資料の相克）「史料と資料の相克」の概要」、『中国考古学』、第18号、5-8頁、2018.12

石川岳彦・杉山章子・大山晋吾、「柴田常恵遺稿「雑録（Ⅱ）」「雑録（Ⅰ）」—解題と翻刻—」、『國學院大學博物館研究報告』、第35輯、59-82頁、2019.2

- 石川岳彦、「中国」、『季刊考古学』、第150号、134-137頁、2020.2
- 石川岳彦・杉山章子・大山晋吾、「柴田常恵遺稿「讀書餘考 卷」「讀書餘考 貳」—解題と翻刻—」、『國學院大學博物館研究報告』、第36輯、118-158頁、2020.2
- (解説) 石川岳彦、「2017年の歴史学界—回顧と展望—「東アジア 中国 殷・周・春秋」」、『史学雑誌』、第127編第5号、196-202頁、2018.5
- (学会発表) 国内、石川岳彦、「中国遼寧地域の漢代墳墓研究の現状と課題」、東北亜細亜考古学研究会例会、2019.7.19
- 国内、石川岳彦、「中国遼寧地域の漢代墳墓をめぐる諸問題—最新資料と20世紀前半期発掘資料をもとに—」(ポスターセッション)、日本中国考古学会2019年度総会・大会、2019.11.30・12.1
- (研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、石川岳彦、研究代表者、若手研究「中国遼寧地域の漢代墳墓研究—新出土資料と20世紀前半期発掘資料をもとに—」、2018～現在
- (他機関での講義等) 客員研究員、東京国立博物館、2019.4～現在
- 共同研究員、國學院大學研究開発推進機構、2018.4～現在
- 特別講演、石川岳彦、「考古学からみた春秋戦国時代の燕国とその東方への拡大」、明治大学博物館友の会 東北アジアと日本研究会、2019.8.5
- 特別講演、石川岳彦、「考古学からみた春秋戦国時代の燕国—その東方への拡大と弥生文化への影響—」、東アジアの古代文化を考える会、2019.12.22

### (3) 外国人研究員・内地研究員

2018年度

外国人研究員 Kyaw Khaing (Department of Archaeology and National Museums, Myanmar)

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- 「後期旧石器時代前半期における神津島産黒曜石の広がりとその利用—原産地推定結果の広域的再集成から—」
- 「長崎貿易における輸出陶磁の行き先の考古学的分析」
- 「中部・関東地域の荒屋系細石刃石器群—技術的組織から人びとの行動を考える—」
- 「縄文・弥生時代の弓について—完形出土品を中心とした分析と考察—」
- 「弥生時代における袋状口縁壺の研究」
- 「古墳の墳丘規模の規格性とその評価—墳丘企画論に基づく前期公墳の墳丘規模の検討」
- 「浅間山災害遺跡・東宮遺跡の出土物から当時の物流状況をよむ」

2019年度

- 「縄文晩期愛媛東予の生活環境について」
- 「力士埴輪の研究」
- 「西関東におけるヒスイ製大珠」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

- 原田功至 「縄文時代中期後葉～後期前葉の東京湾東岸地域における遺跡群について」(指導教員) 設楽博己
- 増子義彬 「大型石棒祭祀の研究—頭部の有無を基準として—」(指導教員) 設楽博己
- 笠見智慧 「墳丘墓からみる弥生時代後期の山陰地方—器台形石器の地域性を中心として—」(指導教員) 設楽博己
- 宮澤菜穂 「東京大学本郷構内遺跡出土の貿易陶磁器の再検討—御殿下記念館地点・山上会館地点出土資料を中心—」(指導教員) 堀内秀樹

2019年度

- 池山史華 「南コーカサス地方新石器時代における石器素材生産技術の検討—ギョイテペ遺跡出土の黒曜石製石器の分析を中心に—」(指導教員) 佐藤宏之
- 木之内忍 「近畿地方における弥生時代の堰と水利」(指導教員) 設楽博己
- 雨宮健祥 「三角縁神獣鏡の表現型式再考とその系譜」(指導教員) 設楽博己
- 田邊えり 「関東地方における縄文時代晩期前半期の地域間関係—姥山式土器の検討を中心に—」(指導教員) 設楽博己



**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018 年度

(甲)

金恩瑩 「沿東海地域新石器時代文化研究」

〈主査〉設楽博己 〈副査〉福田正宏・大貫静夫・後藤直・宮本一夫

(乙)

なし

2019 年度

(甲) (乙)

なし

## 03 美術史学

### 1. 研究室活動の概要

1910年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917年、「美学美術史」と改められた。1963年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5年後に、第二類（史学）へと移る。1994年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

2019年度までの教員は、教授2名、准教授1名である（2008年3月までは助教1名が在職）。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言いがたい。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員4名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センターの協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠ほぼ一杯に近い。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多いものの、ここ数年合格者が定員枠に満たない。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、この期間も教授2名、准教授1名が美術史学会の常任委員を務め、学会活動を主導した。2019年3月、2020年3月には美術史学会東支部例会を担当した。2018年5月からは佐藤教授が、2019年5月からは秋山教授が事務局長を務めている。このほか1985年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年1冊発行し、既に36号（2020年）に至っている。特色ある教育活動としては、毎年実施される古美術見学旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

国際交流にも励んでいる。2018年4月には、ゲアハルト・ヴォルフ教授（在フィレンツェ、マックス＝プランク研究財団美術史研究所長）を迎え、和歌山県新宮市および本郷キャンパスにおいて、2019年6月にはダリオ・ガンボニーニ教授（ジュネーブ大学）を迎え、やはり新宮市および本郷キャンパスにおいて講演会を開催した。2018年3月の時点で外国人留学生の博士課程在籍者2名おり、4名が欧州に留学していたが、うち一名が海外で学位を取得した。2019年3月10日、11日には、東京国立博物館において国際美術史学会（CIHA）東京コロキウム2019を開催、高岸准教授が共同座長を務めた。9月1日～6日には、フィレンツェにおいて国際美術史学会（CIHA）第35回大会（前半部）が開催され、9月2日開催の第一セッションでは国内委員会事務局長を務めている秋山教授が共同座長を務めた。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

佐藤康宏教授（日本美術史）  
秋山聰教授（西洋美術史）  
高岸輝准教授（日本美術史）

#### (2) 外国人研究員・内地研究員

チェルシー・フォックスウェル（外国人研究員、シカゴ大学准教授）

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「アルブレヒト・デューラーの作品における透視図法の解析」  
「セザンヌの「サント＝ヴィクトワール山」の表現の変遷」  
「百鬼夜行絵巻について」

「ラ・トゥール『懺悔するマグダラのマリア』研究 ～17 世紀ローヌ地方における宗教画の受容について～」  
「正花寺菩薩立像について」  
「半分開いた唇—ベルニーニの身振りに関する一考察—」  
「浜松図屏風（東京国立博物館蔵）にみる写実性と誇張性」  
「シャルル・ガルニエ「オペラ座」—ガルニエ宮における折衷主義について—」

#### 2019 年度

「J.W.ウォーターハウスの絵画 1888 年作《シャロットの姫》を中心に」  
「池大雅について」  
「小磯良平「斉唱」について」  
「狩野芳崖『悲母観音』」  
「下村観山筆「闇維」についての一考察」  
「幻想と理性の狭間で—マッテオ・ジョヴァンニ《聖母被昇天》を巡る考察—」  
「肥後定慶菩薩像の様式的分析」  
「エドワード・ホッパー《ニューヨーク・オフィス》に見るアメリカ」  
「ウォーホル作品の聖性について ～ゴールド・マリリンにおけるアイコン性から～」  
「17 世紀オランダ絵画研究 教会内部図を中心に」  
「19 世紀末におけるオフィーリア図像の変容—ヘンリエッタ・レイの《オフィーリア》を中心に—」  
「サファヴィー朝白地藍彩陶器の作画について 模倣における翻訳と独自性の検証」  
「《マカーマート》パリ国立図書館本における見開き構図の考察」  
「与謝蕪村筆「峨嵋露頂図」について」  
「本阿弥光悦の茶碗—作品とそのイメージ」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

#### 2018 年度

筒井彩 「ポローニャのサン・ペトロニオ教会ボロニーニ礼拝堂壁画研究 —他地域美術との影響関係—」（指導教員）秋山聰  
久保聡子 「ターキ・ブスターン大洞の狩猟図浮彫再興」（指導教員）高岸輝  
中島瑞枝 「ピエルマッテオ・ダメーリア作《ガードナーの受胎告知》—画家のフィレンツェ滞在と「受胎告知」における透視図法—」（指導教員）秋山聰  
氷見野夏子「ポンペイ庭園画に対する考察—黄金の腕輪の家と果樹園の家を例に—」（指導教員）秋山聰  
渡邊実希 「荒城季夫の評論に見る昭和戦前期美術と大衆社会 批評の良心と芸術の自由」（指導教員）高岸輝

#### 2019 年度

飛田優樹 「董其昌の着色山水画と古画鑑蔵—「秋興八景図冊」を中心に—」（指導教員）板倉聖哲  
竹村香子 「ジョットの絵画技法に関する研究—7 枚の板絵断片を中心に—」（指導教員）秋山聰  
野中愛理 「「当麻曼荼羅縁起絵巻」（光明寺蔵）の様式と図像」（指導教員）高岸輝  
前原晏梨 「1890 年代後半の「ミュシャ様式」—同時代ポスターとの比較を通じて」（指導教員）秋山聰

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

#### 2018 年度

(甲)

朴晟希 「18・19 世紀における日韓絵画交流史の研究—朝鮮通信使と東萊倭館の絵画活動を中心に—」  
〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉六反田豊・板倉聖哲・高岸輝・塚本麿充

(乙)

なし

#### 2019 年度

(甲)

なし

(乙)

奥健夫 「仏教彫像の制作と受容に関する研究—平安時代を中心に—」  
〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉秋山聰・高岸輝・根立研介・山本勉

## 04 哲学

### 1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木巖翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年から2015年までは、思想文化学科中の、さらに現在では人文学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的研究および個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2020年3月現在の所属教員は、教授3名、准教授1名、助教1名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカバーするべく、非常勤講師も含め、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフを構成している（なお、外国人専任講師1名が2016年度前期まで在職）。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリマウント・コレッジのRoger Robins教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに2011年10月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から3名程度の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年20名程度である。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心もたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあって重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている『哲学雑誌』の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披瀝と研鑽の場として機能している。2017年4月からは、伝統ある「哲学会」の歴史と近代日本哲学の形成に果たした役割を検証するために、『哲学雑誌』のバックナンバーのアーカイブ化をもとにした研究プロジェクトを研究室を中心に立ち上げ、2018年4月以降は科学研究費補助金の支援を受け実質的な研究を進めている。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学応用倫理センターとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書も刊行してきた。その他、「Hongo Metaphysics Club」や「Tokyo Forum for Analytic Philosophy」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の哲学関係部門で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2020年3月末までに、計11回の BESETO 哲学会議が開催された。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

榊原哲也	(教授、現象学・ドイツ現代哲学)
納富信留	(教授、西洋古代哲学、西洋古典学)
鈴木泉	(教授、近世形而上学・現代フランス哲学)
乘立雄輝	(准教授、近現代の英語圏の哲学)

### (2) 助教の活動

富山豊

在職期間 2016年度～2018年度

研究領域 フッサール現象学

主要業績

(著書) 富山豊(共著), 『ワードマップ現代現象学』, 新曜社, 2017年

(論文) 富山豊, 「現象学は外在主義から何を学べるか」, 『哲学』, 68号, 2017年, pp. 155-168

富山豊, 「フッセリアーナ資料集第1巻『論理学』講義(1896)を読む」, 『フッサール研究』, 第15号 2018年, pp. 124-135

富山豊, 「現象学の二つのノルマ」, 『フッサール研究』, 16号, 2019年, pp. 135-151

富山豊, 「『論理学研究』におけるふたつの反心理主義——植村玄輝『真理・存在・意識: フッサール『論理学研究』を読む』を読む」, 『フッサール研究』(電子ジャーナル/URL: <https://sites.google.com/site/husserlstudiesjpn/journal>), フッサール研究会, 16, 2019年, pp. 217-227

(学会発表) 国内, 富山豊, 「『論理学研究』解釈とその評価についてのふたつの疑問」, 植村玄輝著『真理・存在・意識 フッサール『論理学研究』を読む』合評会, 東京大学本郷キャンパス, 2017年

国際, Yutaka TOMIYAMA, “How can Husserl accept the externalist insight?”, Consciousness and the World: International Conference on Phenomenology, Tongji University (Shanghai), 2016

国際, Yutaka TOMIYAMA, “Husserl's theory of meaning and language acquisition: in contrast with Dummett's manifestation argument”, Phenomenology in Cross-Cultural Perspective: from Affection to Ethics, National Tsing Hua University (Taiwan), 2018

平岡紘

在職期間 2018年度～

研究領域 レヴィナスを中心とする現代フランス哲学

主要業績

(論文) 平岡紘, 「引き裂かれた現在——レヴィナスのフッサール『内的時間意識』の解釈をめぐる——」, 『現象学年報』, 第34号, 161-168頁, 2018.11

平岡紘, 「〈自己への現前〉から〈自己のもとでの現前〉へ——レヴィナスにおける自己性の問いをめぐる——」, 『レヴィナス研究』, 第1号, 54-64頁, 2019.9

(学会発表) 国際, Hiroshi HIRAOKA, 「«Le son et le signe : une réflexion sur la pensée raisonnable chez Levinas»」, Colloque international. Le singulier et l'universel : Levinas et la pensée de l'Extrême-Orient, 早稲田大学戸山キャンパス, 2019.11.16

(啓蒙) 平岡紘, 「自由と自分らしさ」, 『奈良健康倶楽部』, vol.6, 6頁, 2018.10

平岡紘, 「心はどこにあるのか」, 『奈良健康倶楽部』, vol.7, 6頁, 2019.4

平岡紘, 「他者の視線」, 『奈良健康倶楽部』, vol.8, 6頁, 2019.10

(研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金, 研究活動スタート支援, 平岡紘, 研究代表者, 「フランス現象学を背景とした後期レヴィナスの人間観の歴史的・体系的な研究」, 2018～2019

(他機関での講義等) 非常勤講師, 成城大学, 「ヨーロッパの思想演習Ⅱ(仏)」, 2018.4～2020.3

(学会) 国内, 哲学会, 委員, 2018.4～

国内, レヴィナス協会, 運営委員(会計), 2018.9～

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- 「Berkeleyの哲学の哲学に於ける notion を巡る諸問題」
- 「幸福をめぐる現代英米哲学の検討」
- 『ポリテイア』第一巻におけるテクネー・アナロジー」
- 「行為論・自由論における「欲望」の役割の検討」
- 「デカルトにおける神概念について」
- 「ケアの営みの基盤としての「関係について」」
- 「死の共有」を目指して—終末期の人間が生きる死とはどのようなものか—」
- 「ヒューム因果論をめぐる哲学的議論の諸相」
- 「メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』における知覚の構造」
- 「ヒューム道徳哲学の倫理とその批判的検討」
- 「ハイデガー『存在と時間』における世界概念」
- 「時間的存在としての生命の誕生に関する考察」
- 「アリストテレス『分析論後書』の原理論と原因論」
- 「言葉なき他者との関係について」
- 『国家』における「正義」と「負債」について」
- 「量カテゴリーの客観的妥当性—『純粹理性批判』第二版演繹論の一側面」
- 「現存在の本来的実存について—ハイデガー『存在と時間』を手がかりに—」
- 「ウィルフリド・セラーズの「経験論と心の哲学」における知識の分析について」

2019年度

- 「西田哲学における絶対無の論理について」
- 「E.フッサール『デカルト的省察』における他我構成論について」
- 「プラトン『メノン』における生と哲学への姿勢について」
- 「ホップズの『リヴァイアサン』に於ける人格の自律と国家」
- 「ヘーゲル『概念論』における具体的普遍についての考察」
- 「アーレントの労働概念をめぐる」
- 『論理哲学論考』において独我論は「語りえぬもの」であるか」
- 「アリストテレス『自然学』の場所論における場所的概念と運動の記述について」
- 「ニーチェの時間概念に関する考察」
- 「ガダマー『真理と方法』に関する研究—理解における「先入見」の発見と選択—」
- 「ソクラテスの死生観—『パイドン』を中心に—」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

- 森井博一 「後期フッサール現象学における他性の問題」〈指導教員〉榊原哲也
- 飯塚舜 「ヒュームの観念説再考—方法論の再検討から虚構主義による統一的解釈に向けて—」〈指導教員〉鈴木泉
- 片田京介 「プラトン『パイドン』の「最終証明」に関する研究」〈指導教員〉納富信留
- 片山光弥 「批判期カントにおける自然科学の基礎づけの問題」〈指導教員〉榊原哲也
- 西岡千尋 「アリストテレス『メタフィジカ』M巻の「離在」批判——「離れたもの」を問うことの意味——」〈指導教員〉納富信留
- 藤木友 「『純粹理性批判』における客観概念の研究」〈指導教員〉榊原哲也
- 黒田諭 「メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』における反省と意識」〈指導教員〉鈴木泉

2019年度

- 佐藤靖子 「アンスコム『インテンション』と実践的知識」〈指導教員〉乗立雄輝
- 富樫駿太郎「デカルト『省察』における自己知の問題」〈指導教員〉鈴木泉
- 筒井一穂 「デカルトにおける真理と創造：所謂〈永遠真理創造説〉再考」〈指導教員〉鈴木泉

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

なし

(乙)

加地大介 「もの ——現代的実体主義の存在論——」

〈主査〉納富信留 〈副査〉鈴木泉・三浦俊彦・一ノ瀬正樹・伊佐敷隆弘

2019年度

(甲)

岩井拓朗 「判断と経験—カント『純粹理性批判』「経験の類推」に基づく経験の理論について—」

〈主査〉榊原哲也 〈副査〉鈴木泉・乗立雄輝・高山守・滝沢正之

田村未希 「存在と知—前期ハイデガーの解釈学的現象学—」

〈主査〉榊原哲也 〈副査〉鈴木泉・納富信留・古荘真敬・池田喬

葛谷潤 「志向性の基礎：『論理学研究』におけるフッサールの基礎意味論」

〈主査〉榊原哲也 〈副査〉鈴木泉・納富信留・金子洋之・秋葉剛史

(乙)

なし

## 05 倫理学

### 1. 研究室活動の概要

人間存在、価値、道德意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授2名、准教授1名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度4名程度）の協力のもとに、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年増加傾向にある（2018年度8名、2019年度8名）。研究室全体としてみれば、学生、院生あわせて30名ほどだが、学生、院生の研究テーマは、古代ギリシア哲学からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年1回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、在籍中の大学院生やオーバドクターの研究成果を発表する場ともなっている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－現在

教授 頼住 光子

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－現在

准教授 古田 徹也

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2019年4月－現在

助教 池松 辰男

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2017年4月－2020年3月

#### (2) 助教の活動

池松 辰男

在職期間 2017年4月－2020年3月

研究領域 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

主要業績

(著書)

単著、池松辰男、『ヘーゲル「主観的精神の哲学」精神における主体の生成とその条件』、晃洋書房、2019.3

(論文)

池松辰男、「ヘーゲル「精神哲学」における「実践的精神」の構造 「ハイデルベルク・エンツュクロペディ」を読み直す意味をめぐって」、『ヘーゲル哲学研究』、24、108-120頁、2018.12

池松辰男、「ヘーゲルにおける「幸福」の取り扱い 「実践的精神」から「客観的精神」への移行をめぐって」、『倫理学紀要』、26、173-197頁、2019.3

(学会発表)

国内、加藤紫苑、池松辰男、下田和宣、シンポジウム「ドイツ観念論と現代実在論 理性と意識の背後をめぐって」、日本ヘーゲル学会第29回研究大会、日本福祉大学（東海キャンパス）、2019.6.29



(受賞)

国内、池松辰男、和辻賞（論文部門）、「市民社会における欲求と世界史における情熱 ―ヘーゲル「客観的精神の哲学」の動態をめぐって」（『倫理学年報』第67集,149-162頁,2018.3）、日本倫理学会、2018.10.6

(翻訳)

共訳、Georg Wilhelm Friedrich Hegel (ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル)、「Gesammelte Werke Bd. 13: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften (1817)」、山口誠一（責任編集）、池松辰男他11名（訳）、『ヘーゲル全集 第11巻 ハイデルベルク・エンツェクロペディー』、知泉書館、2019.6

### (3) 外国人研究員・内地研究員

Etienne A. F. Stachelin, 2017.10.1-2018.3.31（研究事項：「詮慧『正法眼蔵御聞書』における「時間」）

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「古事記におけるホムチワケ考」  
「本居宣長と日本人の死生観」  
「太宰治『お伽草子』論―因果性を断ち切る「言葉」の諸問題―」  
「桜川」との対比に見る謡曲「隅田川」の主題」  
『『歎異抄』における悪人正機の倫理的考察』  
『『発心集』と発心・遁世のあり方』  
「聖徳太子信仰の描写法とあり方、変化について」

2019年度

「宮本武蔵著『五輪書』における武士道に見る近代以降の武士精神の源流」  
『『悪魔と神』における政治の倫理―一個人と集団の弁証法を超えて』  
『『五輪書』の思想―宮本武蔵の武士観』  
「井原西鶴『武家義理物語』における武士の倫理」  
「儒学の観点から見る荻生徂徠の経済政策」  
『『発心集』に見る数寄・風流の仏教的な意味』  
「欲望と生命―『精神現象学』「自己意識」章冒頭における実践哲学的問題―」  
「カントの「観念論論駁」について」  
「上田秋成の命禄論」  
『『選択本願念仏集』の思想について』  
『『都鄙問答』における梅岩の思想』

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

なし

2019年度

川出龍一 「伊藤仁斎の学問論における「自合於天道」」（指導教員）頼住光子  
増田誠志 「『作品』の宇宙―ヘーゲル『精神現象学』におけるアリストテレス受容の一断面」（指導教員）熊野純彦

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

橋爪大輝 「複数性の哲学―アーレント哲学の体系的解釈」  
〈主査〉熊野純彦 〈副査〉頼住光子・柳原哲也・岩崎稔・森一郎

(乙)

なし

2019年度

(甲)

加藤喜市 「アリストテレスの倫理思想における快樂と苦痛——「二つの快樂論」から〈共生の完全化〉へ——」

〈主査〉 頼住光子 〈副査〉 熊野純彦・古田徹也・納富信留・関根清三・三嶋輝夫

高井寛 「ハイデガーの実存哲学『存在と時間』の統一的解釈の試み」

〈主査〉 熊野純彦 〈副査〉 頼住光子・榊原哲也・古田徹也・池田喬

菅原令子 「近松門左衛門の浄瑠璃作品における秩序と情念——敵役のゆくえ——」

〈主査〉 頼住光子 〈副査〉 熊野純彦・古田徹也・菅野覚明・栗原剛

(乙)

なし

## 06 宗教学宗教学史学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程（宗教学宗教学史学研究室）における研究は宗教の経験科学的研究である。2018～19年度の研究活動は、教授3名、准教授2名、助教1名の計6名の教員を中心として行われた。この間、教授が1名定年により退職し、准教授1名（2020年度からはさらに専任講師1名）が新たに加わり、教員の構成が大きく若返った。これまでの教員による特色ある研究を継承するとともに、最近の研究状況、社会情勢を踏まえ、新たな可能性をも模索している。研究分野としては、宗教理論・宗教学史、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史（中近世および近現代ヨーロッパ、古代イスラエル・オリエント、古代中国、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、慰霊と追悼、グローバル化・ポスト世俗化時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）、発掘調査（イスラエル）、などをカバーしている。方法論は、宗教哲学・思想研究、比較宗教学、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教学史学などである（詳しくは本書第Ⅲ部を参照のこと）。宗教学は対象とする宗教・地域も方法論も極めて多様であるため、毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、その多様性を可能な限り反映するカリキュラムを実現している。また、近年は宗教学の社会的役割を意識し、死生学・応用倫理センターとの活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

2018～19年度の本専修課程の全教員を中心メンバーとする共同研究としては、まず、JSPS 科研費基盤研究B「ポスト・セキュラー状況における宗教研究」（鶴岡賀雄代表、2014～2017年度）の成果として、論文集「いま宗教に向きあう」シリーズ（全4巻、岩波書店）を2018年に刊行したことが挙げられる。教員のうち3名がそれぞれ2～4巻の編集・執筆に携わった。2018年度からはJSPS 科研費基盤研究B「日本宗教学研究の新展開—ローカリティーへのグローバルなアプローチ」（西村明代表）に取り組み、成果を2020年の国際宗教学宗教学史学会（IAHR）世界大会で発表することを直近の目標として共同研究を進めた。また、2019年度から刊行が始まったちくま新書「世界哲学史」シリーズにも、本専修課程の教員・同窓生が大きく関わっている。さらに、各教員は異なる学際的・国際的共同研究にも従事しており、ネットワークを広げている。院生の研究交流についても、かつては固定的な研究会（宗教思想研究会、宗教学史研究会など）の会員になり、その定例会に参加するという形式が中心だったが、近年は科研費等の競争的研究資金による中・短期的プロジェクトに直結する研究会にアドホックに参加する、あるいは自ら小規模の研究会を組織するといったことが増えている。この傾向は現在のところ研究の活性化に繋がっているが、研究者コミュニティのあり方への長期的影響についても注視していく必要がある。

本専修課程では研究成果を発信するために教員と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには教員、院生、同窓生などの研究論文・研究動向サーヴェイ論文・研究ノート等が掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会誌的な性格をもち、同窓生や留学生の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業論文題目一覧などが常時載せられる。他に研究室と同窓生の交流の場としては、定期・不定期の研究会・集会を開催している。

本専修課程の過去10年余の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと（15名前後）が挙げられる。研究室の伝統の一つに、学部生・院生・教員全員が参加する春の研究室旅行があるが、この行事は、増加する学部生や、他大学からの大学院新入生が研究室に馴染むための、かつ教員が各学生の人柄や興味関心を把握するための場として、一層意義を増している。また、この旅行では東京近隣の宗教施設を複数見学するが、その企画は博士課程1年次の院生全員が担当する。このため文献研究を専門とする院生にもフィールドワークの現地経験のよい機会となっている。

国際研究交流としては、下記の個別の交流の他、教員の一人が2017年7月からIAHRの事務局長を代行しているため、IAHRの事務局が研究室に置かれる形になっている。IAHRは1950年に創立された宗教学分野最大の国際的学術組織であり、その潤滑な運営に大きく貢献している。

研究室として招聘し、講演を実施した主な外国人研究者は以下の通りである。

2018年6月	ディーノ・アバヰツチ	サラエゴ大学教授
2018年7月	シュムエル・ファイナー	バルイラン大学教授
2018年7月	ミヒャ・ゴットリーブ	ニューヨーク大学准教授
2018年7月	ジャックリーン・ストーン（「新・日本学」特別講義として）	プリンストン大学教授
2019年1月	ジャックリーン・ストーン	プリンストン大学教授
2019年9月	イェルク・リュプケ	エルフルト大学教授
2019年10月	F・W・グラーフ	ミュンヘン大学名誉教授
2019年10月	ロイ・ツオーハー	テルアビブ大学准教授

学生の短期留学や夏季休暇を利用しての発掘調査への参加も毎年行われている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

- 市川 裕 : 一神教の世界宗教史、ユダヤ教、比較法思想史、ヘブライ語 (1991年4月～2019年3月)  
池澤 優 : 中国宗教研究、祖先崇拝、生命倫理 (1995年4月～)  
藤原 聖子 : 宗教学 (理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教 (2011年4月～)  
西村 明 : 宗教史学、宗教人類学・民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化 (2013年4月～)  
渡辺 優 : 西洋近世神秘主義、神秘主義概念の系譜学的研究、現代宗教思想・宗教哲学 (2019年4月～)

### (2) 助教の活動

江川 純一

在職期間 2016年4月～2019年3月

研究領域 イタリア宗教史学、宗教学学問史

主要業績

(著書)

共編著、江川純一・佐々木雄大『Nûξ = ニュクス 聖なるもの 革命』5巻、堀之内出版、2018  
(学会発表)

国内、江川純一、「ペッタッツォーニ宗教史学とヴィーコの学」、日本宗教学会学術大会、2018.9

### (3) 外国人研究員・内地研究員

アレクサンダー・ジャニア

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- 「合気道分派のカリスマ的考察—教祖論・家元制度の視点から—」  
「新新宗教「幸福の科学」の特徴と教団継承の方向性—他宗教との比較を通して—」  
「日本近代文学史が追究した芸術概念の宗教性—その成立期を対象に—」  
「ラビ・アマタルの思想 ～宗教シオニズムのもう一つの側面～」  
「古代中国における王朝祭祀—先祖崇拝と神霊信仰の関係から—」  
「宗教法人の公益性」という呪縛と責務 ～宗教法人とは何かを考える～  
「奇術文化を通じて、江戸時代の宗教的世界観を捉え直す」  
「真如苑向上接心修行の記述と理解—修行研究の観点から—」  
「判例から見る国家と宗教 ～山口自衛官合祀拒否裁判を中心に～」  
「ドイツ語圏における死の表像 ～ベックリン「死の島」を題材に～」  
「ミュージカルにおける宗教表現」  
「島原半島における四面信仰の展開」  
「オウム真理教の暴走にその組織構造が寄与していた可能性について」  
「平成における天皇の「祈り」」

2019年度

- 「ポスト世俗化時代におけるメキシコの祭りと言語の変容」  
「樹木葬とスピリチュアリティの邂逅—自然葬の現在—」  
「宗教多元主義を再考する—カブ、ヒック、立正佼成会を中心に—」  
「後継者はいかにして新教主像を形成するか—崇教真光を例に—」  
「カント構想力の批判」  
「現代における生まれ変わり思想とサブカルチャーにおけるその反映」  
「日本の若者と「宗教的な心」」  
「震災報道から見る宗教の社会貢献の可能性」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

中村祐希 「現代日本におけるキリスト教用品の日本化—マテリアルカルチャー研究の視点から—」〈指導教員〉

藤原聖子

野川祈 「E.トレルチに見る世紀転換期の神学と宗教学」〈指導教員〉藤原聖子

木村智 「19世紀末米国キリスト教の自己意識の変容と「ホワイトネス」—比較神学と万国宗教会議を事例として—」〈指導教員〉藤原聖子

塩野谷恭輔「文学的サムエル記—文学批評と歴史—」〈指導教員〉市川裕

2019年度

河底佑佳 「17世紀を中心とするイギリスにおけるイスラームに関する言説—他宗教・他教派批判に着目して—」〈指導教員〉藤原聖子

稲村めぐみ「芸術療法における宗教性と芸術の機能」〈指導教員〉池澤優

高橋堯則 「イギリス人宣教師によるヒンドゥーイズム表象—子供向け定期刊行物を史料に—」〈指導教員〉藤原聖子

出野幸智香「日本民俗学における「アニミズム」言説の展開—昭和20年代の折口信夫を中心に—」〈指導教員〉西村明

YANG Dawoon「戦争の語り方—フロイトからドゥルーズ=ガタリへ—」〈指導教員〉西村明

袁浩春 「ユダヤ教の聖書解釈におけるモーセ像—ギリシア・キリスト教的なモーセ研究から「モシエ、ラベヌ」への視座—」〈指導教員〉市川裕

木村悠之介「近代における神道青年運動と神道研究の形成—初期の神風会までを対象に—」〈指導教員〉西村明

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

加藤久美子「文脈の中のアフォリズム—ヘブライ語聖書箴言10章1節-22章16節の研究—」

〈主査〉市川裕 〈副査〉 勝村弘也・上村静・魯恩碩・高井啓介

谷内悠 「現代における宗教・科学・フィクションが重なり合う領域の事例と理論的分析」

〈主査〉池澤優 〈副査〉 鶴岡賀雄・藤原聖子・佐倉統・深澤英隆

金律里 「現代韓国における初期生命に対する観念—人工妊娠中絶をめぐる議論を中心に—」

〈主査〉池澤優 〈副査〉 会田薫子・堀江宗正・西村明・島藺進

櫻井丈 「Inventing Imagined Descent- Theorizing Rabbinic Conversion as the Ethnic Construction of Jewish Identity - (「虚構の出自」としてのユダヤ・アイデンティティ：—血縁を再创出するラビ・ユダヤ教改宗法規再考—)」

〈主査〉市川裕 〈副査〉 池澤優・高橋英海・上村静・勝又悦子

山本栄美子「和辻哲郎の仏教哲学における信念構造」

〈主査〉池澤優 〈副査〉 藤原聖子・堀江宗正・西村明・島藺進

(乙)

なし

2019年度

(甲)

朴炳道 「近世日本における災害の宗教学的的研究—呪術・終末・慰霊・象徴—」

〈主査〉西村明 〈副査〉 池澤優・島藺進・池上良正・木村敏明

(乙)

なし

## 07 美学芸術学

### 1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方での日本の学界における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、外国人研究生をコンスタントに受け入れている。

本研究室では現在 JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics) と題された欧文の紀要 (1976 年創刊) と『美学芸術学研究』(1982 年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995 年改題) と題された和文の紀要の 2 つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。また、美学会東部会等との共催で、リーズ・アンドリエス (パリ第 4 大学名誉教授、国際 18 世紀学会会長)、ローレ・ヒューン (フライブルク大学教授、国際シェリング協会会長)、ショーン・ミグラー (カナダ・メモリアル大学教授、北米シェリング協会カナダ支部代表)、カルステン・ローデ (中国・中山大学教授)、李海完 (ソウル大学教授、ただしコロナウイルス感染拡大のため中止) といった著名研究者を迎え講演会を開催するなど、海外との学術交流に努めている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

渡辺裕教授 (在籍は 1996 年～2019 年。聴覚文化論、音楽社会史)、小田部胤久教授 (在籍は 1996 年～。近代美学、感性文化論)、2015 年 4 月、三浦俊彦教授 (在籍は 2015 年～。分析哲学、分析美学) で運営してきたが、2019 年 3 月の渡辺裕教授の定年退職ともない後任として同年 4 月より吉田寛准教授 (ゲーム研究、感性論) が着任し、3 名の体制によって、少しでもバランスのとれた教育活動を展開できるよう心がけている。

#### (2) 助教の活動

柳澤 史明

在職期間 2017 年 4 月 1 日～

研究領域 芸術学

主要業績

(著書)

編著、柳沢史明、吉澤英樹、江島泰子、『混沌の共和国——「文明化の使命」の時代における渡世のディスクール』、ナカニシヤ出版、2019.2

(書評)

島本流、『日仏「美術全集」史』、『美学』、254 号、112-116 頁、2019.6

(受賞)

国内、柳沢史明、第 16 回木村重信民族芸術学会賞、民族芸術学会、2019.4.20

### (3) 外国人研究員・内地研究員

神保夏子（日本学術振興会特別研究員 PD、2016年4月～2019年12月）

ヴァインツェンツォ・ジュゼッペ・イドーネ・カッソーネ（日本学術振興会外国人特別研究員（欧米短期）、2019年5月～2019年8月）

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- 「夏目漱石における登場人物の「道化」的あり方—坊ちゃんを中心に—
- 「過去に関する感性の研究—ノスタルジーの概念の再検討を中心に—」
- 「クラブカルチャー：異なるダンスとその要因」
- 「おしゃれ概念の変遷—1950・60年代における意味の広がり、周辺概念との関係—」
- 「トマス・アキナスにおける美—霊的美と時間的美—」
- 「記憶芸術についての—試論—アスマンの記憶論からみた「Don't Follow the Wind」展の研究」
- 「レメシアナのニケタス「聖歌の有用性について De utilitate hymnorum」—訳と注解」
- 「日本のポピュラー音楽における「都会的」という感性」
- 「デイヴィッド・ホックニー再評価—経験としての鑑賞において—」
- 「ロロ「いつ高シリーズ」における「不在」と「まなざし」について」
- 「日本人の電柱・電線をみる感性」
- 「衣装から読み解く「アンジュルム」」
- 「「トポス・シンセンス」と「解釈的フィクション」～レム・コールハースの住宅建築における創造プロセス～」
- 「映画『アデル・ブルーは熱い色』の多角的研究 レズビアン表象とメディア比較を中心に」
- 「怪獣映画における日本表象の変化—ゴジラとキングコングを手がかりに—」
- 「『ひまわり』に見る中原淳一の少女像とメディア創造」
- 「観光客が捉える金沢市景観の変遷—明治以降の兼六園周辺を中心に—」
- 「「地域型芸術祭」の批評の可能性について—「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」を事例として—」

2019年度

- 「『球體感學』における形式的特徴とその俳句史的位置付け」
- 「ゲーム空間と現実空間のかかわりについて ～AR技術の進展に即して～」
- 「「ファンシーキャラクター」消費の現在—シナモンロールを例に—」
- 「横浜トリエンナーレと地域社会 ～関係性とその変遷に即して～」
- 「装幀がテキスト体験に与える影響 ～受容美学から出発して」
- 「ヨーゼフ・ボイスの芸術思想における人間観」
- 「太宰治『人間失格』の「笑い」の特異性」
- 「アーサー・ダントーの芸術哲学における〈鏡〉—『ありふれたものの変容』を中心に—」
- 「日本人女性の美意識の変容—二重瞼を中心とした目元に着目して—」
- 「芸術家の創作意識変遷—三膳見考察」
- 「明治期における美術の制度化の諸相—仏像の美術品化を焦点として—」
- 「蛇儀化における記憶術とイメージについて」
- 「日本のプロ・オーケストラによるコンサートプログラミングの実際 ～東京交響楽団・兵庫芸術文化センター管弦楽団・読売日本交響楽団を例に～」
- 「舞台照明の芸術的性質—舞台と客席の関係性の観点から—」
- 「溝口健二の言葉と声」
- 「女子学校制服の果たす美的役割と、日本のポップカルチャーとの関わり」
- 「チームラボがもたらすアート・ワールドの変化—作品受容の社会学的分析から」
- 「視覚芸術鑑賞における物語世界への没入について」
- 「ポップ化されるクラシック音楽—ベートーヴェンの『悲愴』とビリー・ジョエルの『This Night』を例に—」
- 「J・S・バッハ《クラヴィーア練習曲集第3巻》における教会旋法—調性との対立と調性による克服—」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018 年度

住本賢一 「認知派理論による 70 年代映画理論の批判と継承—デイヴィッド・ボードウェル『フィクション映画の語り』を事例に」〈指導教員〉渡辺裕

河珠彦 「芸術におけるサイト・スペシフィック概念の再考 —リチャード・セラ『傾いた弧』の移設不可能性の検討を中心に—」〈指導教員〉小田部胤久

小林未佳 「『芸術世界』誌におけるアレクサンドル・ブノワの美術批評と 19 世紀末ロシア芸術観」〈指導教員〉小田部胤久

杉野駿 「デイドロの「理想的モデル」論：その形成と理論的射程」〈指導教員〉小田部胤久

丁乙 「銭鍾書の『詩における『虚色』表現』の検討 —『ラオコーン』を読む』を踏まえて—」〈指導教員〉小田部胤久

LIN Jean Yuanjing「文化的性質を含む作品の鑑賞パターンの分類」〈指導教員〉三浦俊彦

坂井剛史 「C.グリーンバーグにおける絵画・彫刻・建築の交差」〈指導教員〉三浦俊彦

2019 年度

岩切啓人 「社会的対象としての芸術作品：記述主義の擁護」〈指導教員〉三浦俊彦

富士盛健雄「ジョルジョ・アガンベン『身体の使用』における〈生の形式〉について」〈指導教員〉小田部胤久

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018 年度

(甲)

李裁仁 「土方巽の暗黒舞踏における「なる」技法の意義—身体表現の方法と思想の変遷に即して—」  
〈主査〉小田部胤久 〈副査〉渡辺裕・三浦俊彦・西村清和・尼ヶ崎彬

玉村恭 「成就の詩学—世阿弥能楽論の芸術論的特質—」  
〈主査〉渡辺裕 〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・松岡心平・尼ヶ崎彬

柴田康太郎「戦前の東京における映画館の音楽文化」  
〈主査〉渡辺裕 〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・長木誠司・小松弘

(乙)

なし

2019 年度

(甲) (乙)

なし



## 08 心理学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授3名、准教授1名、助教2名、日本学術振興会のPD・研究員・大学院生・学部生ら約70名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・運動制御・社会認知などの心理現象を心理物理学的手法・脳科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。毎年、教養学部文科3類や他の科類の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトを対象とした実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果をまとめている。

大学院教育に関しては、指導体制の充実を図り、数名の課程博士（博士（心理学））が毎年誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本視覚学会・日本認知科学会・日本神経回路学会・日本認知心理学会・認知神経科学会・日本神経科学学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官1名が兼任し助手1名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第になくなっていった。さらに1960年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は1992年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言えよう。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

横澤 一彦

専門分野 統合的認知の心理学

在職期間 1998年10月～ 大学院人文社会系研究科 助教授

2006年4月～現在 同 教授

今水 寛

専門分野 運動の学習と制御、認知機能を支える脳のネットワーク解析

在職期間 2015年9月～現在 大学院人文社会系研究科 教授

村上 郁也

専門分野 知覚心理学、認知神経科学

在職期間 2005年4月～ 大学院総合文化研究科 助教授

2013年4月～ 大学院人文社会系研究科 准教授

2018年4月～現在 同 教授

鈴木 敦命

専門分野 実験心理学、認知心理学

在職期間 2017年9月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

## (2) 助教の活動

中島 亮一

専門分野 実験心理学

在職期間 2016年4月～現在

主要業績

(論文)

Ryoichi Nakashima & Takatsune Kumada, 「Peripersonal versus extrapersonal visual scene information for egocentric direction and position perception」, 『The Quarterly Journal of Experimental Psychology』、Vol. 71, No.5、1090-1099 頁、2018.5

Qi Li, Ryoichi Nakashima, & Kazuhiko Yokosawa, 「Task-irrelevant spatial dividers facilitate counting and numerosity estimation」, 『Scientific Reports』、8:15620、2018.10

中島亮一・横澤一彦, 「視覚的注意の時空間的維持による変化検出の促進」, 『心理学研究』、89(5)、527-532 頁、2018.12

Ryoichi Nakashima, 「Spatial attentional distribution is modulated by head direction during eccentric gaze」, 『Journal of Cognitive Psychology』、31(2)、215-224 頁、2019.3

Ryoichi Nakashima, 「Beyond one's body parts: Remote object movement with sense of agency involuntarily biases spatial attention」, 『Psychonomic Bulletin & Review』、26(2)、576-582 頁、2019.5

(学会発表)

国際、Konishi, K, Nakashima, R., & Yokosawa, K., 「Does a salient auditory stimulus always impair visual memory?」, The 18th annual meeting of The Vision Science Society, St. Pete Beach、2018.5.22

国内、中島亮一・熊田孝恒, 「手動開始行動が自動制御物体の停止操作に対する主体感に与える影響」, 日本認知心理学会第16回大会、大阪、2018.9.2

国内、中島亮一・横澤一彦, 「視覚的注意の時空間的維持が変化検出を促進する」, 日本心理学会第82回大会、仙台、2018.9.25

国内、小西慶治・中島亮一・横澤一彦, 「聴覚への構えが聴覚刺激による視覚処理の妨害を緩和する」, 日本基礎心理学会第37回大会、東京、2018.12.1

国内、中島亮一・横澤一彦, 「前景オブジェクトと不整合な背景の符号化は抑制される—オブジェクト認知におけるシーン整合性効果の要因—」, 日本基礎心理学会第37回大会、東京、2018.12.2

国内、中島亮一, 「有効視野計測による横目観察における視覚処理の変容の検討」, 「注意と認知」第17回合宿研究会、名古屋、2019.3.5

国内、中島亮一, 「オブジェクト操作の主体感に基づく視覚処理変容の時系列変化」, 日本認知心理学会第17回大会、京都、2019.5.25

国際、Ryoichi Nakashima, Takatsune Kumada, 「Task difficulty at fixation location modulates attentional bias caused by head direction」, The 15th Asia-Pacific Conference on Vision, Osaka、2019.7.31

国内、中島亮一・熊田孝恒, 「頭部・眼球の協調関係に基づく視覚的注意の偏りに対する意図的制御の影響」, 日本心理学会第83回大会、大阪、2019.9.11

国内、田中大・中島亮一・弘光健太郎・今水寛, 「短時間の集中瞑想と洞察瞑想が注意機能に与える効果の個人差」, 日本心理学会第83回大会、大阪、2019.9.11

国内、中島亮一・横山武昌, 「Oppel-Kundt 錯視により遠くだと知覚された刺激の検出は遅延するか?」, 日本基礎心理学会第38回大会、神戸、2019.11.30

国内、中島亮一・熊田孝恒, 「注視点への注意の構えが横目観察における注意の空間的偏りを変容させる」, 第11回多感覚研究会、東京、2019.12.14

国内、宇野究人・中島亮一, 「手に握った物体形状の触覚情報は視覚的注意を誘導するか」, 第11回多感覚研究会、東京、2019.12.14

国内、田中大・中島亮一・弘光健太郎・今水寛, 「短時間の集中瞑想と洞察瞑想が注意機能に与える効果と個人のマインドフルネス傾向の関連性の検討」, 第11回多感覚研究会、東京、2019.12.14

(他機関での講義等)

明治学院大学 非常勤講師、2018.4～2018.9、2019.4～2019.9

東京藝術大学 非常勤講師、2018.4～2020.3

立教大学 兼任講師、2018.9～2019.3、2019.9～2020.3

東京電機大学 非常勤講師、2019.4～2020.3

李 琦

専門分野 認知心理学

在職期間 2016年4月～2020年3月

主要業績

(論文)

Qi Li, Ryoichi Nakashima, Kazuhiko Yokosawa, 「Task-irrelevant spatial dividers facilitate counting and numerosity estimation」、『Scientific Reports』、2018.10

(学会発表)

国際、Qi Li, 「Suppression of spatial and non-spatial features during visual working memory maintenance」、3rd International Meeting of the Psychonomic Society、2018.5.12

国際、Kazuhiko Yokosawa, Qi Li, 「The capacity of visual working memory for scenes」、18<sup>th</sup> Annual Meeting of the Vision Science Society、Florida, USA.、2018.5.23

国際、Qi Li, 「Selective filtering of task-irrelevant information in visual working memory」、7th International Conference on Spatial Cognition、Rome, Italy、2018.9.12

国際、Qi Li, 「The structure of visual working memory representations」、Invited talk at the Department of Psychology and Behavioral Sciences, Zhejiang University、Zhejiang, China、2019.3.20

国際、Qi Li, Kazuhiko Yokosawa, 「Highly memorable images compete for attention with serial search」、European Conference on Visual Perception 2019、Leuven, Belgium、2019.8.28

国際、Kikuno Yuichiro, Qi Li, 「The critical development period of the anterior prefrontal cortex by pleasant tactile stimulation: A NIRS study」、Cognitive Psychology Section & Developmental Psychology Section Joint Conference 2019. Staffordshire, England、2019.9.6

(他機関での講義等)

専修大学 非常勤講師 2018.4～2019.3、2019.4～2020.3

聖心女子大学 非常勤講師 2018.4～2019.9

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「運動主体感の再現性の検討」

「表情が社会的推論に与える影響」

「注意を向けにくい周辺視野におけるシーン整合性効果の検討」

「表情模倣の妨害が両眼視野闘争における感情顔の意識的知覚に与える影響」

「視聴覚連合の感覚間協応形成に影響する知覚学習に関する一般性の検討」

「色字共感覚が色記憶に与える影響—色の空間的位置に注目して—」

「視覚的ワーキングメモリ内の情報更新について ～複数記憶画面を呈示した場合のレトロキューの効果～」

「運動による位置ずれ錯視が図形残効に及ぼす影響」

「説明責任と認知バイアスに関する知識と信頼性判断における顔の影響に与える効果」

「リズム知覚における視覚と聴覚の再生の比較」

「自己肯定化によるセルフ・ハンディキャッピングの抑制と特性自尊感情の関係について」

「顔情報が法的意思決定に及ぼす影響と認知バイアス教示の効果の検討」

「聴覚的修飾刺激は視覚的妨害刺激の記憶を促進するか」

「マスクが視標と異なる眼に呈示される場合の逆向マスクング」

「音名が曖昧な音に対する色聴共感覚者の色の励起についての検討」

「運動定義の運動が時間過大視に与える影響」

「注意制御課題の結果における個人差の影響—グローバルローカル傾向に着目して—」

「クラウドニング効果がオッドボール効果に与える影響」

「バーチャル空間における身体表象に関する研究」

「文章の配列が黙読時の読書速度に与える影響」

「盲点における充填とアモーダル補充の正確性の比較」  
「上下方向の視覚運動が回転する仮現運動に与える影響」

2019 年度

「深層学習における錯視生成とその認知科学的妥当性の検証」  
「統計的に抽出された自己に関する検討」  
「音と色の感覚間協応が物体の記憶と嗜好度に及ぼす影響についての検討」  
「操作性の増加と減少に対する検出感度の検討」  
「発話時に受け取る音声フィードバックが運動主体感に与える影響」  
「魅力度の類似した顔のグループに対するチアリーダー効果：嗜好の個人差を考慮した検討」  
「評価プライミング課題を用いたシャーデンフロイデの潜在的測定法の研究」  
「人物の信頼性に関する評判の学習が目の細さの知覚に与える影響」  
「オブジェクトの属性がその色嗜好に与える影響」  
「意志決定は後続の数値情報の統合に影響するか」  
「連続的な運動における運動主体感の推移」  
「盲点近傍領域における flash-drag 効果」  
「運動主体感及び感覚運動処理のカテゴリ化知覚に対する検討」  
「注意に基づく運動追跡にリズム音による同調が与える効果」  
「無意識下の情景文脈がオブジェクトの認識に与える影響」  
「経路選択における初期注意地点の影響」  
「 Craik-O'Brien-Cornsweet Effect の運動知覚における時間的特性」  
「色弁別の個人差と心内の色表象の安定性の個人差の関係性」  
「VR 空間における手の表象による身体所有感と位置知覚への影響」  
「視聴覚リズム知覚学習に関する検討」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018 年度

宇野究人 「色字共感覚の励起感覚に関する認知心理学的検討」(指導教員) 横澤一彦  
齋藤真里菜「盲点内への光刺激が盲点外の刺激の明るさ知覚に及ぼす影響の検討」(指導教員) 村上郁也  
田中大 「運動主体感と運動制御をつなぐメカニズム」(指導教員) 今水寛  
鳥羽山莉沙「色聴共感覚における内発的なラベリングの効果」(指導教員) 横澤一彦  
仲田穂子 「運動方向の切替が視覚探索の探索効率に及ぼす影響」(指導教員) 村上郁也  
林明日美 「統計的連合の知覚学習による感覚間協応形成に関する研究」(指導教員) 横澤一彦  
横山了 「回答運動の不随意的な変化によって自信判断は妨害されるか」(指導教員) 今水寛  
LAVRENTEVA Sofia 「エビングハウス錯視の非対称性から見た、形の処理における輝度、コントラストと方位の相互作用」(指導教員) 村上郁也

2019 年度

若林実奈 「関節角度が踊りの美しさに与える影響」(指導教員) 今水寛

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018 年度

(甲) (乙)

なし

2019 年度

(甲) (乙)

なし

## 09a 日本語日本文学（国語学）

### 1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続けてきたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほか、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げるようになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐって、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の場として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、2018年度は、大学院生として4名の外国人留学生在籍し、また、海外の日本語研究者が3名、2名は外国人研究員として、1名は外国人研究生として研究室に在籍し、研究に従事している（2019年1月1日現在）。2019年度は、大学院生として2名の外国人留学生在籍し、また、海外より4名、2名は外国人研究員、1名は交換留学生、1名は外国人研究生として本研究室に在籍し、研究に従事している（2020年1月1日現在）。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

月本 雅幸	教授	日本語史	1992年4月～2020年3月
井島 正博	教授	日本語文法論	1998年4月～現在
肥爪 周二	教授	日本語史	2003年4月～現在

#### (2) 助教の活動

田中 草大

在職期間 2016年4月～2018年9月

研究領域 日本語史

主要業績

(解説)

田中草大、「変体漢文、どう読むか・なぜ読むか」、『いづみ通信』44、pp.11-12、2018.6

(学会発表)

国内、田中草大、「《漢文》はいかにして日本語の表記法から消えたのか？—倒置記法から熟字訓へ—」、近代語学会研究発表会、2018.6.16

国際、Sota Tanaka、「The Concept and Development of Kanbun (漢文) in the History of Japanese Language」、RUB Japan Science Days 2018 (RJSD2018)、2018.7.6

国際、「日本에서의『漢文』의 概念과 變種」、口訣學會第55回여름共同學術大會、2018.8.16

鴻野 知暁

在職期間 2019年4月—現在

研究領域 日本語史

主要業績

(論文)

鴻野知暁、「接頭辞「御」の係る範囲について」、『むらさき』、56、pp.90-94、2019.12

(学会発表)

国内、鴻野知暁、「逆接句の意味分類」、令和元年度東京大学国語研究室会、2019.7.13

### (3) 外国人研究員・内地研究員

2018年度

- ・グエン・ティ・オワイン (ベトナム・ベトナム社会科学アカデミー)
- ・李 建植 (韓国・檀国大学校)

2019年度

- ・占 才成 (中国・華中師範大学)
- ・郭 木蘭 (中国・華僑大学)

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「言いつくし文に見られる会話の含意」

『源氏物語』と『狭衣物語』における「もの」形容詞—大野晋説の検討—

「読み分け条件を有する「漢字音の一元化」現象」

「上代の副詞句の研究—〈xモyニ〉について—」

「東大闘争のビラにおける異体字等の用字の様相」

「「どうせ」、「しょせん」、「どっちみち」の差異の考察」

「難易文を作る形容詞的接尾辞と可能表現の共起の条件と歴史的変遷」

「時点の副詞句における助詞「こ」について」

他、特別演習を履修し、卒業した者、6名。

2019年度

「格助詞「で」の領域用法について」

「動詞の漢字表記の選択要件に関する研究—同訓異字を中心へ—」

『言海』にみられる近世辞書との関連性の追加検証」

「依頼表現に用いられる副詞について」

「「てしまう」の意味」

他、特別演習を履修し、卒業した者、2名。

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

権鄭鈺 「程度を表す形式名詞「ほど」「くらい」の通時的研究」(指導教員) 井島正博

康凱欣 「和漢聯句に関する日中韻書の研究」(指導教員) 肥爪周二

付園園 「名詞由来の逆接接続辞の研究」(指導教員) 井島正博

2019年度

橋本光平 「逆接確定の接続助詞の意味・用法研究」(指導教員) 井島正博

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018 年度

(甲)

北崎勇帆 「日本語命令形式の通時的研究」

〈主査〉肥爪周二 〈副査〉月本雅幸・井島正博・小柳智一・岡部嘉幸

近藤明日子「明治・大正期の日本語書き言葉における一人称代名詞の研究—近代雑誌コーパスを資料とした計量的分析—」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・肥爪周二・田中牧郎・橋本行洋

(乙)

なし

2019 年度

(甲) (乙)

なし

## 09b 日本語日本文学（国文学）

### 1. 研究室活動の概要

国文学研究室は、学部の言語文化学科・日本語日本文学専修課程と大学院の日本文化研究専攻・日本語日本文学専門分野の国文学の教育研究を担当している。本研究室は、1877年（明治10）の東京大学発足時の和漢文学科に起源する。当時の小中村清矩、芳賀矢一らの先学により、近世国学の遺産を継承しつつ、近代的な学問としての国文学の基礎が築かれたのである。

戦後の新制大学発足後、1963年（昭和38）に国語国文学専修課程となり、1975年（昭和50）には国語学専修課程と国文学専修課程とに分かれたが、1994年（平成6）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。近代的学問の専門分化により、国語学と国文学の教育研究活動は、当然のことながらそれぞれ独自に行われている面もあるが、明治期以来、国語学と国文学が密接に交流してきた伝統は、いまでも保たれている。

現在、本研究室は教授4名・准教授2名・助教1名の教員を擁し、古代から近現代までの日本文学の全時代をカバーできる体制を取っているが、さらにさまざまな領域の専門家をも非常勤講師として招聘し、開講科目の充実をはかっている。また2019年4月現在で、国文学研究室には大学院学生39名（内、外国人留学生9名）・学部学生47名が在籍し、その他、大学院外国人研究生3名を受け入れている。

本研究室は、長らく国文学研究の後継者養成に多大な貢献をしてきたが、中等教育の教員をも数多く世に送り出してきた。2012年度以来、本専修課程では「総合日本文学」の研究・教育という新たな試みを通して、中等教育の現場の教員たちとの交流を深め、また教員志望の学生達のための講義・演習を開講している。もとより本研究室は、研究者や中高教員のみならず、さまざまな分野に人材を送り出しており、また、数多くの海外からの留学生を、それぞれ母国の日本文学研究において指導的な役割を果たせるよう、指導を行ってきた。特に国際交流には力を入れており、多くの外国人研究員を受け入れると共に、教員が海外の学会の招待講演を引き受けている。

「総合日本文学」は、留学生、あるいは一般社会に出てゆく卒業・修了者の存在に配慮した試みでもある。2013年度より、集中講義、あるいはA2タームを利用した「総合日本文学」を開講し、スタッフ全員の輪講で年度毎に統一テーマにそった講義を行っている。2016年度からはこれを全学教養教育科目とし、18年度は「韻文と散文」、19年度は「性愛」をテーマに、最終回に教員相互でシンポジウムを行った。

上記のような研究教育活動のほか、年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の実地調査に努めている。卒業生を中心とする活動としては、東京大学国語国文学会があり、国語研究室と共同で、毎年、評議員会と大会（研究発表とシンポジウム）の開催、会報の発行を行っているほか、1924年（大正13）の創刊以来つねに国語国文学界をリードし続けてきた月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を行なっている。また国文学研究室独自の研究誌として「東京大学国文学論集」をも毎年刊行し、その内容はUTリポジトリで公開している。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

長島 弘明	教授	日本近世文学
渡部 泰明	教授	日本中世文学・和歌文学
安藤 宏	教授	日本近代文学
鉄野 昌弘	教授	日本古代文学
高木 和子	教授	平安朝文学
佐藤 至子	准教授	日本近世文学
木下 華子	准教授	日本中世文学

#### (2) 助教の活動

高木 周

在職期間 2016年4月～2020年3月

研究領域 日本中世文学

主要業績

(著書)

単著、高木周、『中世日記文学の表現方法』、2019.10



(論文)

高木周、「西行の「命なりけり」の歌と鎌倉期の日記の表現」、『国語と国文学』、2018.11

林 悠子

在職期間 2016年4月～2018年4月

研究領域 中古文学

主要業績

(非常勤講師)

実践女子大学、「日本の文学 a」2018.4～9、「古典文学基礎講読 a」2018.4～9、「国文学概論 a」2018.4～9

### (3) 内地研修員・外国人研究員

内地研修員

2018年度

兼岡理恵 (受入教員：鉄野昌弘)

生井知子 (受入教員：安藤宏)

長瀬由美 (受入教員：高木和子)

2019年度

なし

外国人研究員

2018年度

鄭滢 (受入教員：長島弘明) 韓国 檀国大学校

2019年度

なし

日本学術振興会特別研究員

2018年度

中野顕正 (DC2、受入教員：渡部泰明)

山口一樹 (DC2、受入教員：高木和子)

北原圭一郎 (DC2、受入教員：高木和子)

2019年度

山口一樹 (DC2、受入教員：高木和子)

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「太宰治「斜陽」論—直治に注目して—」

「『草枕』論—画工の求めた「美」と那美—」

「「通」の考察」

「源氏物語「まめ人」論」

「森鷗外『うたかたの記』について」

「曲亭馬琴の初期読本についての研究—中国種素材の利用に着目して—」

「落窪物語の表現—結婚当初の三日間を中心に—」

「蕪村発句における滑稽さと擬人化」

「芥川龍之介作品とテキスト分析—各時期の作品分析から見えてきたもの—」

「蜻蛉日記の結婚と出産」

「『稻亭物怪録』の研究」

「江戸長唄の詞章の研究」

「森鷗外『於母影』研究」

「『源氏物語』における不義の子について」

「藤原秀能の研究」

「太宰治の女語り ～埋もれた〈女〉の〈声〉を汲む～」

「源氏物語 紫の上論」

2019年度

- 「高市黒人 羈旅歌八首論」  
「川端康成「眠れる美女」論」  
「前衛俳句の実像」  
「世阿弥研究」  
「西行の両宮歌合の研究」  
「防人歌に描かれた父母のあり様について」  
「玉鬘十帖論—贈答歌を端緒として—」  
「近松心中物の研究」  
「大江健三郎「芽むしり仔撃ち」論」  
『源氏物語』における花散里の人物造型論  
『こころ』論 「私」と「先生」のこころ  
「神亀二年難波行幸歌にみる笠金村の構成意識」  
『ある崖上の感情』研究—梶井基次郎文学の官能性—  
「合巻における古典文学の翻案についての研究」  
『方丈記』—「元暦の大地震」を中心に—  
「大伴家持 春愁歌成立の背景」  
『雪国』の語りと幻想性—改稿を中心に—  
『南総里見八犬伝』の受容について  
『とりかへばや』考—「とりかへ」の論理  
「家庭の問題から見る『人間失格』」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

- 青木怜依奈「牧野信一研究—〈幻想〉表現をめぐる—」(指導教員) 安藤宏  
今井一貴「永井荷風の〈震災後〉」(指導教員) 安藤宏  
武藤明子「紫上造型論」(指導教員) 高木和子  
阿部哲也「『源氏物語』における「語り」「語彙」「話型」の考察」(指導教員) 高木和子  
尾田匠「万葉集における視覚表現の展開」(指導教員) 鉄野昌弘  
前山優「『源氏物語』における和歌の機能についての研究」(指導教員) 高木和子  
姜庚沃「安岡章太郎作品における戦後—「ガラスの靴」から「海辺の光景」「幕が下りてから」へ—」(指導教員) 安藤宏  
具恵珠「平安朝漢文学の季節意識と表現—三月尽・九月尽を中心に—」(指導教員) 藤原克己

2019年度

- 佐藤花穂「古代文学における天智朝の描出について」(指導教員) 鉄野昌弘  
塚崎夏子「『榮花物語』の研究—儀礼と政治—」(指導教員) 高木和子  
濱田菜摘「『続古今和歌集』構成の研究—羈旅部を中心に—」(指導教員) 渡部泰明  
村田祐菜「折口信夫の創作における古代と近代」(指導教員) 安藤宏

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

- 廖榮発「平安前期日本漢文学の研究—「私」の詠出の軌跡—」  
(主査) 鉄野昌弘 (副査) 高木和子・佐藤至子・齋藤希史・藤原克己  
鈴木崇大「山部赤人論」  
(主査) 鉄野昌弘 (副査) 長島弘明・渡部泰明・高木和子・多田一臣  
梅山聡「泉鏡花研究」  
(主査) 安藤宏 (副査) 長島弘明・高木和子・吉田昌志・鈴木啓子

(乙)

- 藤澤るり「夏目漱石の文学的現場 意識と思考の焦点」  
(主査) 安藤宏 (副査) 渡部泰明・阿部公彦・大野淳一・多田一臣

2019年度

(甲)

板野みずえ「新古今時代の和歌の研究」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉鉄野昌弘・高木和子・佐藤至子・村尾誠一

田中智子 「古今和歌六帖とその時代」

〈主査〉高木和子 〈副査〉渡部泰明・鉄野昌弘・藤原克己・鈴木宏子

(乙)

なし

# 10 日本史学

## 1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近來では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野—考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など—の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授3名、准教授4名、助教1名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として2名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史学コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、急増する研究室事務を処理するため、副手2名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年25名内外で、卒業時には約3分の2が就職し、約3分の1が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994年創刊。6冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1996年創刊。現在24号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年11月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2019年度においては、韓国・中国を中心に、学部1名、大学院に10名、研究生に3名が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

野島（加藤）陽子	教授	日本近代政治史
大津透	教授	日本古代史
鈴木淳	教授	日本近代史
牧原成征	准教授	日本近世史
高橋典幸	准教授	日本中世史
三枝暁子	准教授	日本中世史
村和明	准教授	日本近世史

### (2) 助教の活動

木下 聡

在職期間 2016年4月～2020年3月

研究領域 日本中世史

主要業績

（著書）

単著、木下聡、『室町幕府の外様衆と奉公衆』、同成社、2018.4

単著、木下聡、『戦国史研究会史料集7 足利義視・足利義植文書集』、2019.2

単著、木下聡、『斎藤氏四代』、ミネルヴァ書房、2020.2

（論文）

木下聡、「大和家蔵書」所収「大館伊予守尚氏入道常興筆記」、『東京大学日本史学研究室紀要』、22、329-395頁、2018.3

- 木下聡、「中世における諸階層の官途受容」、中世学研究会編『中世学研究1 幻想の京都モデル』、高志書院、155-173 頁、2018.7
- 木下聡、「長篠合戦における戦死者の推移について」、金子拓編『長篠合戦の史料学 いくさの記憶』、勉誠出版、75-135 頁、2018.10
- 木下聡、「大和家蔵書」所収「大館陸奥守晴光筆記」・「安富勘解由左衛門尉筆記」、『東京大学日本史学研究室紀要』、23、73-98 頁、2019.3
- 木下聡、「室町幕府との交渉の展開」、黒田基樹編著『戦国大名の新研究1 今川義元とその時代』、戎光祥出版、258-272 頁、2019.5
- 木下聡、「中世後期の武士の官途認識と選択」、『年報中世史研究』、44、39-63 頁、2019.5
- 木下聡、「明智光秀と美濃国」、『現代思想』、47-16、78-84 頁、2019.12
- 木下聡、「鎌倉府政所執事・問注所執事奉書の機能と性格」、黒田基樹編著『鎌倉府発給文書の研究』、戎光祥出版、107-130 頁、2020.2
- 木下聡、「相模・武蔵国における遵行」、黒田基樹編著『鎌倉府発給文書の研究』、戎光祥出版、374-410 頁、2020.2

(学会発表)

- 国内、木下聡、「室町幕府の対東国政策における駿河国」、第57回中世史サマーセミナーシンポジウム「富士山南麓から広がる中世一境界としての駿河一」、富士市交流センター、2019.8.21

(他機関での講義等)

- 特別講演、美濃源氏フォーラム名古屋研究部会、「宿敵斎藤義龍と龍興」、2018.1
- 非常勤講師、百合女子大学、「日本中世史、日本中世文化史」、2018.4～2019.3
- 非常勤講師、慶應義塾大学、「日本史演習 I D・日本史演習 II D」、2018.4～2019.3
- 特別講演、美濃源氏フォーラム美濃源氏土岐氏研究講座、「守護土岐氏と守護代斎藤氏一道三・義龍・龍興」、2018.6
- 特別講演、横浜市立博物館さいかち中世史講座、「室町幕府における曾我氏とその動向」、2018.10
- 特別講演、彦部家住宅秋の紅葉狩りウィークオープニングセレモニー、「戦国期室町幕府と彦部晴直」、2018.11
- 特別講演、戎光祥ヒストリカルセミナーvol.4「ここまでわかった！明智光秀の虚像と実像！」、「明智光秀の源流一土岐氏とその一族一」、2018.12
- 特別講演、敬文社「日本歴史講座（ヒスカル）」、「斎藤道三と斎藤義龍」、2019.3
- 非常勤講師、百合女子大学、「日本中世史、日本中世文化史」、2019.4～2020.3
- 非常勤講師、聖心女子大学、「古文入門」、2019.4～2020.3
- 特別講演、横浜市金沢区生涯学習グループ“わ”の会 2019 年度学習会、「永正の乱一両上杉と伊勢宗瑞一」、2019.7
- 特別講演、美濃源氏フォーラム土岐源氏明智光秀シンポジウム、「斎藤氏終焉へ、三代斎藤龍興の実力」、2019.8
- 特別講演、鷺城・祇園城跡の保存を考える会、「小山氏における官途とその意義」、2019.10
- 特別講演、敬文社「日本歴史講座（ヒスカル）」、「六角承禎条書」と美濃斎藤氏」、2019.12
- 特別講演、武蔵野大学連続講座、「斎藤道三の生涯と実像」、2020.1

(行政)

- 自治体、清瀬市企画部市史編さん室、教育政策、中世史部会専門調査委員、2018.4～2020.3

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018 年度

- 「梟首の政治的意義」
- 「中世延暦寺の大衆と武力」
- 「近世川越往還における駄賃稼ぎについて」
- 「南洋群島への再進出活動からみる引揚と引揚者」
- 「摂関期賀茂祭の整備」

「鎌倉幕府の常陸国鹿島社支配—鹿島氏の再研究を通して—」  
「満州国」における首都建設について」  
「大覚寺統と性円法親王—後宇多院の生涯と付法—」  
「神祇官制度の変革の背景」  
「八世紀賑給に関する考察」  
「文化政治」期における朝鮮総督府の「社会主義」認識」  
「宣戦布告なき戦争」における戦時国際法の運用の解釈に関する一考察—日本陸軍にける催涙性ガスの法的位置づけを事例として—」  
「乃木希典の殉死と同時代人の“武士道”観」  
「明治後期における府県レベルの同業組合に対する勸業政策—愛知県の絞産業を事例として—」  
「近世の温泉地における誘客の構造 ～上野国吾妻郡草津村を事例に～」  
「戦国期上杉氏の家臣団構成—御館の乱から考える—」  
「十八世紀後半利根川中流地域の治水対策と地域社会」  
「明治八年の漁業関連法制度改革と海面官有論争」  
「岩崎家と庭園開放—「富豪の庭」から市民の公園へ—」  
「日露戦争期におけるロシア兵捕虜「厚遇」の実態—ポーランド人捕虜に関する事例を中心として—」  
「日清戦争期の「朝敵」と代言人代議士—旧仙台藩陪臣による土地取戻訴訟の分析から—」  
「三河における中世寺院の成立と展開」  
「鎌倉幕府成立期における東西境界地域—東海道を事例として—」  
「京下り官人と鎌倉幕府の成立」  
「田中隆吉の「肅軍」論」  
「精神病者監護法及び精神病院法の成立過程と施行について」  
「小学校同窓会による社会教育体制の形成と展開—神奈川県足柄上郡南足柄村を中心に—」  
「社会民衆党の変容と議会主義」  
「連合国側の天皇「研究」—アメリカを中心に—」

#### 2019年度

「奥州藤原氏と陸奥国司」  
「十五世期における守護土岐氏的美濃支配」  
「日清日露戦争期の軍事鉄道輸送における東京の駅」  
「平民主義の接受と展延—平民社と『週刊平民新聞』—」  
「大正十二年競馬法審議過程における競馬推進派の議論を検証する」  
「初期帝国大学と社会—「国家須要」と予算から—」  
「新聞紙面上に表れる「禁酒」とその変化」  
「昭和初期の陸軍と対連盟外交」  
「中世東寺「院家」の性質と経済基盤」  
「戦前期日本における非軍用自動車普及の遅れに関する考察」  
「寛政三・四年の異国船取扱令と諸藩の反応について」  
「江戸版木屋の業態・仲間と周辺環境」  
「明治初期海軍法制的形成と海軍省—「海上裁判所」構想を中心に—」  
「戦国大名河野氏の分国支配と家中支配」  
「陶磁器出品を通じた内国勸業博覧会の様相」  
「近世の霞ヶ浦四十八津と漁業権」  
「将軍家祈祷寺江戸市ヶ谷薬王寺の寺院経営及び構造的問題」  
「治承・寿永内乱期における頼朝の諸国安定化について」  
「足利義晴政権の京都支配—近江在国期を中心に—」  
「近世前期大名家における政治的意思決定の構造—弘前藩四代藩主津軽信政を事例に—」  
「明治・大正期における東宮武官の役割」  
「日本古代における祥瑞」  
「国民感情」論と沖縄の位置付け—講和条約締結までを中心に—」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

- 坂井武尊 「室町幕府意思決定システムの特質と変遷—義持・義教期を中心に—」(指導教員) 高橋典幸  
菊地智博 「幕末軍制改革期における火薬調達機構と火薬市場」(指導教員) 牧原成征  
桑田翔 「明治前期の農商務省と政策基盤の形成」(指導教員) 鈴木淳  
鷺慶亮 「鎌倉・南北朝期の和与と武家政権」(指導教員) 高橋典幸  
櫻聡太郎 「日本古代における学令の受容と儀礼」(指導教員) 大津透  
杉田建斗 「日本古代の神鏡と天皇制」(指導教員) 大津透  
滝野祐里奈 「戦間期における海外移民政策・事業の成り立ちと展開について—対ブラジル移民を中心に—」(指導教員) 鈴木淳  
林遼 「室町政権の祈祷体制—三宝院・伝奏の介在に注目して—」(指導教員) 三枝暁子  
山本一夫 「近世の地方米市場と金融政策」(指導教員) 牧原成征

2019年度

- 上杉憲 「日明関係の経営および人的基盤の研究」(指導教員) 高橋典幸  
太田知宏 「農業用揚水機と明治・大正の土地改良」(指導教員) 鈴木淳  
大友勝夫 「近世信州の商品流通と運輸—中信地域における駄賃稼ぎを事例に—」(指導教員) 牧原成征  
小林優里 「近世後期知識人における「考証」の受容と活用—江戸および周辺地域の事例から—」(指導教員) 村和明  
夏目宏樹 「近世前期における藩政と軍役について—仙台藩を事例として—」(指導教員) 牧原成征  
吉永光貴 「文禄・慶長の役における日明・日朝交渉—加藤清正の動向を手がかりに—」(指導教員) 三枝暁子

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

- 谷口雄太 「中世足利氏の血統と権威」  
(主査) 高橋典幸 (副査) 三枝暁子・桜井英治・末柄豊・小川剛生  
安原徹也 「近代日本における官吏任用制度成立過程の研究—制度の運用と慣行の形成に着目して—」  
(主査) 鈴木淳 (副査) 野島(加藤)陽子・山口輝臣・清水唯一朗・若月剛史  
朴完 PARK Wan 「第一次世界大戦後における日本陸軍の自己改革に関する研究—国民・皇室・帝国の視点から—」  
(主査) 野島(加藤)陽子 (副査) 鈴木淳・山口輝臣・季武嘉也・山田朗  
吉田ますみ 「戦間期アジアの海運秩序：自由通商と帝国の論理」  
(主査) 野島(加藤)陽子 (副査) 鈴木淳・酒井哲哉・五百旗頭薫・木畑洋一  
曾寶滿 「近代日本における反西洋的言説の研究—「アジア・モンロー主義」と「東亜協同体」論を中心に—」  
(主査) 野島(加藤)陽子 (副査) 鈴木淳・吉澤誠一郎・酒井哲哉・有馬学  
堀川康史 「室町幕府地方支配の研究」  
(主査) 高橋典幸 (副査) 三枝暁子・山家浩樹・家永遵嗣・中島圭一

(乙)

- 荒木裕行 「近世中後期の藩と幕府」  
(主査) 牧原成征 (副査) 村和明・小宮木代良・藤田覚・吉田伸之

2019年度

(甲)

- 曹承美 「近世後期名目金貸付と江戸幕府」  
(主査) 牧原成征 (副査) 村和明・藤田覚・吉田伸之・佐藤雄介  
水上たかね 「幕末維新期の国家体制変革と軍事」  
(主査) 鈴木淳 (副査) 野島(加藤)陽子・牧原成征・保谷徹・三谷博  
飯島直樹 「天皇の「多角的軍事輔弼体制」と明治立憲制—元帥府と「協同一致」をめぐる陸海軍関係を中心に—」  
(主査) 野島(加藤)陽子 (副査) 鈴木淳・村和明・吉田裕・黒沢文貴  
佐々木政文 「近代浄土真宗の社会思想史的研究—1910—30年代における「社会」的領域の創出と宗教意識—」  
(主査) 野島(加藤)陽子 (副査) 鈴木淳・牧原成征・山口輝臣・横山百合子  
長崎健吾 「戦国期京都の都市社会と法華宗」  
(主査) 高橋典幸 (副査) 三枝暁子・桜井英治・高橋慎一郎・杉森哲也

崎島達矢 「明治初期大阪の都市行財政」

〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島（加藤）陽子・中村尚史・保谷徹・横山百合子

(乙)

馬場基 「日本古代木簡論」

〈主査〉大津透 〈副査〉鉄野昌弘・高橋典幸・山口英男・鐘江宏之

山口英男 「日本古代の地域社会と行政機構」

〈主査〉大津透 〈副査〉高橋典幸・佐川英治・田島公・金田章裕



# 1 1 中国語中国文学

## 1. 研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学科の分離、帝国大学文科大学への改組などを経て、1904年哲史文三学科制への移行にともない、漢学科が支那哲学、支那文学に分かれ、学科制度の変更によって支那哲学支那文学科となった時期を挟みつつ、現在まで続いている。中国語中国文学の名称は、1953年新制東京大学大学院人文科学研究科に設けられた専攻に始まる。

研究領域は、中国語学と中国文学の2分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビドラマなどが含まれる。ほぼ3000年の間に作られたすべての言語テキストが研究の対象である。教員数は、教授3名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員2名、大学院総合文化研究科の教員2名が教育に参加している。学生数は、2018年度は学部学生3名、大学院修士課程5名、博士課程12名、研究生2名、大学院研究生1名、交換留学生2名、2019年度は学部学生2名、大学院修士課程4名、博士課程13名、研究生2名、交換留学生2名で、多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陸からの留学生15名、台湾からの留学生1名、合計16名にのぼっている。留学生の増加は授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。また国内における研究発表や交流の機会も豊富である。2017年度からは年に1度、学生の研究発表を中心に、京都大学中国語学中国文学研究室と合同で研究会を開催し、交流を図っている。

国際交流は極めて盛んで、日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。また、国内外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催するほか、学内での公開講演会等でも広く発信を行っている。主要な催しに「梁鴻氏講演会」（2018年12月7日）、「東京大学×武漢大学 交流座談会」（2019年8月6日）、「唐小兵氏講演会」（2019年12月20日）などがある。

中文研究室では、1998年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は2018年度第21号、2019年度第22号をUT Repositoryで公開している。  
(<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/index.php>)

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

大西克也教授（中国古典文法、文字学）

齋藤希史教授（中国古典詩文）

鈴木将久教授（中国近現代文学）

### (2) 助教の活動

白井 澄世

在職期間 2016年度～2020年3月

研究領域 中国現代文学

主要業績

（解説）白井澄世、『藤井省三教授 年譜・中国関係業績目録』の刊行にあたって、『東京大学中国語中国文学研究室』、21、pp.156-158、2018.11

（資料）白井澄世、『藤井省三教授 年譜・中国関係業績目録』、『東京大学中国語中国文学研究室』、21、pp.159-237、2018.11

『藤井省三教授 年譜・中国関係業績目録』補遺、『東京大学中国語中国文学研究室』、22、pp.105-106、2019.11

（論文）白井澄世、「瞿秋白『多余的話』について — 「語り」と「時間」についての試論」、『越境する中国文学』、pp.137-163、2018.2

### (3) 外国人教員の活動

孫 軍悦 (専任講師)

在職期間 2016年度～2020年3月

研究領域 日中比較文学・翻訳研究

主要業績

(学会) 国内、昭和文学会、学術雑誌編集委員、2016.8～2018.8

(学会発表) 国際シンポジウム、孫軍悦、「1953-1956 中国社会主義改造の歴史、社会、文化、生活意涵」、パネルディスカッション発表、中国当代史読書会、亜際書院北京事務所主催、於：北京、2017.4.22～23  
国際シンポジウム、孫軍悦、「1957年の歴史、社会、文化、生活意涵」、コメンテーター、中国当代史読書会、亜際書院北京事務所主催、於：北京、2018.4.28～29

(論文) 孫軍悦、「安放情感的場所 (一) —石母田正『歴史與民族的発見』読書筆記之一」、『人間思想』、8、人間出版社 (台湾)、pp.319-342、2018.3

孫軍悦、「安放情感的場所 (二) —石母田正『歴史與民族的発見』読書筆記之二」、『人間思想』、9、人間出版社 (台湾)、pp.317-399、2018.3

孫軍悦、「安放情感的場所 (三) —石母田正『歴史與民族的発見』読書筆記之三」、『人間思想』、10、人間出版社 (台湾)、pp.349-378、2019.11

孫軍悦、「安放情感的場所 (四) —石母田正『歴史與民族的発見』読書筆記之四」、『人間思想』、11、人間出版社 (台湾)、pp.442-468、2019.11

孫軍悦、「作家的位置：読『柳青随筆録』有感」、『人間思想』、11、人間出版社 (台湾)、pp.189-194、2019.11

(評論) 孫軍悦、「超越時空境界の呼応」、『人間思想』、9、人間出版社 (台湾)、pp.215-218、2018.3

孫軍悦、「国史対話」メルマガ 2019.4.29 配信「国境を超える史学史の対話」、

[http://www.aisf.or.jp/sgra/kokushi/J\\_Kokushi3SunEssay.pdf](http://www.aisf.or.jp/sgra/kokushi/J_Kokushi3SunEssay.pdf)

(新刊紹介) 孫軍悦、「戦時上海のメディア—文化的ポリティクスの視座から」、『昭和文学研究』、75、p167、2017.9

### (4) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

楊海峰: 武漢理工大学・政治行政学院副教授

研究題目—類型論に基づく古代中国語の副詞研究

研究期間—2017年9月15日～2018年9月14日

胡萍: 華僑大学副教授

研究題目—古代中国語教育カリキュラム改革研究

研究期間—2017年9月20日～2018年9月19日

許智香: 学術振興会 外国人特別研究員

研究題目—翻訳と東アジア—近代日本における Philosophy の翻訳と植民地朝鮮への伝播

研究期間—2017年10月1日～2019年9月30日

DEFrance Arthur François, Balthazar, Nicolas: フランス高等研究実習院 (École pratique des hautes études, EPHE) 博士課程生

研究題目—漢詩と和歌文学におけるバイリンガル性

研究期間—2019年2月5日～2019年11月5日

裴亮: 武漢大学文学院准教授

研究題目—日本における中国新詩の翻訳と受容に関する研究—1920年代を中心に

研究期間—2019年3月1日～2020年8月31日

李無未: 厦門大学人文学院教授

研究題目—林泰輔の中国文字学の研究

研究期間—2019年5月26日～2019年8月22日

苗壮: 遼寧大学文学院副教授

研究題目—日本における簡牘学と秦漢期書写体制の研究—出土小学書を中心として—

研究期間—2019年9月1日～2020年10月28日

邵琛欣: 陝西師範大学講師

研究題目—上古中国語における動詞句の意味・構造と具格を表す「以」前置詞句の語順に関する研究

研究期間—2019年9月20日～2020年7月20日

内地研究員

飛田英伸：日本学術振興会 特別研究員(DC2)

研究題目—明治初期訓読体小説における言語世界の形成——主人公としての書生の出現

研究期間—2017年4月1日～2019年3月31日

宮島和也：日本学術振興会 特別研究員(DC2)

研究題目—上古中国語における地域的特徴とその形成に関する研究

研究期間—2018年4月1日～2020年3月31日

田中雄大：日本学術振興会 特別研究員(DC1)

研究題目—中国語文学における「現代主義」的思考様式の形成と変遷——穆時英・戴望舒を起点に

研究期間—2019年4月1日～2022年3月31日

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

『史記』・『漢書』における漢代詩歌について

2019年度

「王漁洋詩に於ける煙についての考察」

「容与堂本『水滸伝』の《詩詞》について」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

片倉峻平 「清華簡を中心とした楚簡の用字避複についての考察」(指導教員) 大西克也

三村一貴 「上古漢語の副詞「蓋」のモダリティ」(指導教員) 大西克也

王柳 「莫言の小説における民間」(指導教員) 鈴木将久

2019年度

趙鈺傑 「頼山陽『日本楽府』研究—創作の方法を中心に」(指導教員) 齋藤希史

#### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

荒木達雄 「百回本『水滸伝』の編纂方針」

〈主査〉大木康 〈副査〉 齋藤希史・田口一郎・鈴木陽一・小松謙

加納留美子「蘇軾詩論——反復される経験と詩語」

〈主査〉 齋藤希史 〈副査〉 大木康・田口一郎・浅見洋二・内山精也

(乙)

なし

2019年度

(甲)

長谷川賢 「中国語の複文研究——構文論の観点から」

〈主査〉 齋藤希史 〈副査〉 大西克也・小野秀樹・佐々木勲人・木村英樹・橋本永貢子

蔡燕梅 「明末清初尺牘集の研究——その生産と流通を中心に——」

〈主査〉 大木康 〈副査〉 齋藤希史・陳捷・田口一郎・上原究一

(乙)

なし

## 1 2 東洋史学

### 1. 研究室活動の概要

1904年に漢学科から独立した支那史学科は中国以外の東洋も研究対象とする実情にあわせて、1910年に「東洋史学科」と改称された。支那史学科の時代から数えれば、本専修課程は100年以上の歴史をもつ。当初は中国およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。2018～2019年度本専修課程の授業を担当したのは、教授2・准教授2・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、大学院のみが地域毎に三コースに分かれ、学部は東洋史学のままとされたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として大学院が再統合された。同大学院では、東洋史学の教員だけではなく、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムが編成されている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるとともに、史学会大会において東洋史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡協議会、東方学会や東洋文庫のような広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわるとともに、また個別적으로는、中国社会文化学会、南アジア学会、社会経済史学会、アジア歴史地理情報学会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係をもちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

教授 佐川 英治 (中国古代史)	(2010年4月～現在)
教授 吉澤 誠一郎 (中国近現代史)	(2001年4月～現在)
准教授 島田 竜登 (東南アジア史)	(2012年4月～現在)
准教授 守川 知子 (西アジア史)	(2016年4月～現在)

#### (2) 助教の活動

助教 海老根 量介

在職期間 2018年4月～現在

専門分野 中国古代史

主要業績

(論文)

海老根量介、「靈王所“遂”者究竟為何国?——《靈王遂申》再考」、田煒主編『文字・文献・文明』、上海古籍出版社、2019.10

(学会発表)

国際、海老根量介、「靈王所“遂”者究竟為何国?——《靈王遂申》再考」、文字・文献与文明——第七届出土文献青年学者論壇暨國際學術研討会、2018.8

国際、海老根量介、「秦漢《日書》和地方官吏」、第一屆出土文献与古代文明青年学者研討会、2018.8

国際、海老根量介、「包山楚簡に見える「県」をめぐる考察」、楚文化与長江流域早期開發國際學術研討会、2018.9

国際、海老根量介、「簡帛時代的“書籍”流传小考——以《日書》为中心」、《文史哲》青年学者工作坊暨第十二届中国中古史青年学者聯誼会、2019.8

国際、海老根量介、「岳麓書院藏秦簡《置吏律》札記」、第九屆“出土文献与法律史研究”學術研討会、2019.10

国際、海老根量介、「日本学界《日書》研究的回顧与今後的課題」、中央研究院歷史語言研究所專題演講、2019.10

(非常勤講師)

学習院大学基礎教養科目、「アジアを学ぶ」、2018.4～9

学習院大学文学部、「思想史講義」、2018.4～9、2019.4～9

立正大学経済学部、「歴史学の世界」、2019.9～2020.3

**(3) 外国人研究員・内地研究員**

呂博 (中国) 2019年4月～2020年6月

**3. 卒業論文等題目**

**(1) 卒業論文題目一覧**

2018年度

「植民地期台湾の映画について」

「1920-30年代のスラバヤ日本人小学校と山下謙秀」

「建国大学の理想と現実—回想録『歎喜嶺遙か』、『回憶偽滿建国大学』を通じてみた—」

「カイロ会談 (1921年) と「イラク・クルディスタン」の成立」

「法廷台帳にみる17世紀の都市ブルサ」

「イル・ハン達と西欧キリスト教諸国」

2019年度

「中華人民共和国における葬儀の変遷」

「19世紀前半ブーシェフルのマズクール家—ファールス地方の在地有力者と諸勢力—」

「『後漢書』「宦者列伝」にみる後漢の宦官の勢力基盤について」

「イスラーム世界の普遍史書にみる中国起源論の変遷」

「北宋末期の官箴書『作邑自箴』に見られる地方官の規範意識—胥吏との関係を中心として—」

「現代韓国における「親日派」の形成と実態—植民地期の朝鮮経済人の経歴と「反民族行為処罰法」・「日帝強占下  
反民族行為真相糾明に関する特別法」の関係—」

「太平洋戦争期における高座海軍工廠と台湾少年工」

「20世紀前半における南方タバコ産業と日本」

「『チャチュナーマ』にみる8世紀初頭ウマイヤ朝のスィンド遠征」

「清末時期における日本への陸軍留学生」

「中華民国時期、『申報』のビール広告にみる健康意識」

「冀東防共自治政府の教育政策」

「エナミアズィンのカトリコスと18世紀の東アルメニア」

「『種蕃譜』に見る朝鮮後期の甘藷の栽培・利用方法」

「19世紀イギリス領インドにおける鉄道の軌間論争」

「唐代後期における科挙の名族に対する影響について 弘農楊氏を例に」

「米芾に見る王羲之書法の継承と発展—米芾の王羲之臨書と創作の分析を通して—」

**(2) 修士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

朴周恩 「9-10世紀における東アジアの交流—唐無染院碑の分析を中心に—」(指導教員) 佐川英治

矢野広樹 「18世紀前半のカスピ海—南下するロシアと北進するペルシア—」(指導教員) 守川知子

2019年度

宮内勇弥 「兩漢魏晋期の諸民族の内遷と官爵授与」(指導教員) 佐川英治

田中雅人 「近代移行期レバノン山地の地域社会とドゥルーズたち」(指導教員) 守川知子

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

(甲)

斎藤照子 「18-19世紀ビルマにおける借金証文の研究—東南アジアの一つの近世—」

〈主査〉島田竜登 〈副査〉黒田明伸・高橋昭雄・水島司・弘末雅士

中川太介 「中華民国期の雲南における塩業改革—北京政府時期を中心に—」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉島田竜登・黒田明伸・城山智子・久保亨

(乙)

なし

2019年度

(甲)

黄イエレム「プロテスタント宣教師による中国関連知識の構築——アヘン戦争以前の時期を中心に——」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉佐川英治・勝田俊輔・井坂理穂・菊池秀明

(乙)

なし

## 1 3 中国思想文化学

### 1. 研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治10年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と2度の名称変更を経て現在に至っている。平成7年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、平成21年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。平成30年度の教員は、教授3名、助教1名で、令和元年度は、教授3名、助教1名であり、他に非常勤講師を4～5名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成4年度より毎年2名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助教1名体制にともない、平成8年度からは嘱託1名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、東アジアを中心に平成30年度は計21名（博士課程11名、修士課程5名、研究生5名）、令和元年度は計24名（博士課程12名、修士課程5名、研究生7名）が在籍、チューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。令和元年度後期には1名が留学中であった。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選ばれる事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年1～3名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会科学学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和48年～）が組織されて月例会を開いており、平成2年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

小島 毅 教授	専門分野	儒教史・東アジア王権論
横手 裕 教授	専門分野	道教史・中国三教交渉史
陳 捷 教授	専門分野	中国書籍史・東アジアの書籍交流史・日中文化交流史

#### (2) 助教の活動

李 龢書 助教 専門分野 道教思想史

在職期間 2016年4月～現在

主要業績

(著書)

李龢書『六朝隋唐期における道教思想の整合化と三教交渉』、東京大学大学院人文社会系研究科博士論文、2018.12

(学会発表)

国際、李龢書「《太上老君説常清静經》所見般若思想之背景試析」、「老子道文化學術研討會」、中国安徽省渦陽開元金桂大酒店、2019.9.7

国際、李龢書「從天帝到天尊——漢唐儒、道二教祀天之法所見之隱性競合關係」、「敬天法祖」國際學術研討會」、台湾台北中央研究院民族學研究所、2019.11.30

(予稿・会議録)

国際会議、李翕書「《太上老君説常清静經》所見般若思想之背景試析」、『老子道文化學術研討會專題手冊』所収、頁 225-239、中国安徽省渦陽開元金桂大酒店、2019.9.7

国際会議、李翕書「從天帝到天尊——漢唐儒、道二教祀天之法所見之隱性競合關係」、「敬天法祖」國際學術研討會、頁 1-14、台湾台北中央研究院民族學研究所、2019.11.30

(翻訳)

池田知久著、李翕書訳「《老子》經文(馬王堆帛書甲本)與白話翻譯」、『問道：《老子》思想細讀』(臺北)、頁 576-654、2019.10

(他機関での講義等)

非常勤講師、武蔵大学 人文学部、「東アジアの宗教(前期・後期)」、2018.4~2019.3

非常勤講師、千葉大学 文学部、「東洋哲学演習 B」、2018.10~2019.3

非常勤講師、学習院大学 外国語教育研究センター、「中国語 C(初級)(前期・後期)」、2019.10~2020.3、  
「中国語 C(中級)(前期・後期)」、2019.10~2020.3

### (3) 外国人研究員・内地研究員

韓睿媛(朝鮮大学校教授)

2017年8月~2018年8月

郭穎(廈門大学校副教授)

2018年9月~2019年3月

趙熠璋(南京理工大学副教授)

2018年11月~2019年11月

張素卿(台湾大学教授)

2019年9月~2019年12月

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「黄遵憲 日本国史食貨志について」

「河井寸翁と中国思想」

「金蘭齋『老子経国字解』の研究」

2019年度

「ケアと東アジア思想」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

亀津鴻 「〈先君〉から〈安民〉、そして〈修徳〉へー華夷観・歴史認識・學術の連動からみた北宋前期の統治論の推移ー」(指導教員)小島毅

竹宮英朗 「先秦兩漢時代の中国医学と諸子思想との関連ー『黄帝内経』成立までの疾病観」(指導教員)横手裕

2019年度

HUANG Kun「明初の国家祭祀」(指導教員)小島毅

廖嘉祈 「江戸末期の宋代名臣像ー「経世」「振気」「献替」の視点ー」(指導教員)小島毅

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

李翕書 「六朝隋唐期における道教思想の整合化と三教交渉」

(主査)横手裕(副査)小島毅・佐川英治・中島隆博・麥谷邦夫

(乙)

なし



2019年度

(甲)

廖娟 「中国と日本における易経学の近代的变化」

〈主査〉石井剛 〈副査〉中島隆博・陳捷・川原秀城・近藤浩之

(乙)

なし

## 1.4 インド語インド文学

### 1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では三千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。他方、平成8（1996）年度より、ドラヴィダ系のタミル語タミル文学の講座も設けられた。タミル語も紀元前に遡る文献をそなえ、その文学は長い歴史と豊かな内容を誇るものである。さらに、プラークリット語各種やヒンディー語を学べる機会も設けている。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、専修課程名の一部ともなるインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術論書、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

なお、本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、学部レベルでは別々の専修課程をなすが、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として単一のコースを形成し、さまざまな行事を共同で行っている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

梶原三恵子（サンスクリット語学文学）

#### 非常勤講師

水野善文、宮本城、宮本久義、藤井正人（2018年度）

#### (2) 助教の活動

河崎 豊

在職期間 2016年4月～2020年3月

研究領域 インド学、プラークリット語学文学、ジャイナ教

主要業績

（論文）

河崎豊、「Materials for the Study on the Characteristics of Mahāvīra's and the Buddha's Physical Body」、『Jaina Studies: Select Papers presented in the 'Jaina Studies' Section at the 16th World Sanskrit Conference, Bangkok, Thailand & the 14th World Sanskrit Conference』、31-44 頁、2018.6

河崎豊、「誰が出家できるのか?」、『ジャイナ教研究』、24、101-128 頁、2018.9

河崎豊、「Bṛhatkalpabhāṣya 6364 の予備的研究」、『印度學佛教學研究』、68-1、21-26 頁、2019.12

（学会発表）

国際、河崎豊、「Haribhadrasūri on Steya-/Caura-sāstra」、17th World Sanskrit Conference、University of British Columbia、2018.7.10

国内、河崎豊、「ジャイナ教におけるクシャトリヤ観の一事例」、ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性第6回シンポジウム、2019.3.24

国内、河崎豊、「ジャイナ教の sthitakalpa という規定をめぐって」、日本印度学仏教学会第70回学術大会、2019.9.8

（翻訳）

共訳、河崎豊・畑昌利 訳『増支部経典第六巻』（中村 元 監修、前田 専學 編集）、春秋社、2019.4

（その他：講演資料等）

河崎豊、「上座部仏教における善巧方便」、『仏教文化』、58、156-182 頁、2019.12

（その他：書評等）

河崎豊、「ジャイナ教関連書籍・論文紹介」、『ジャイナ教研究』、24、105-115 頁、2018.9

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、河崎豊、研究代表者、『『プリハットカルパパーシャ』を中心とするジャイナ教団の運営に関する総合的研究』、2018～

(他機関での講義等)

特別講演、東京大学仏教青年会、「上座部仏教における善巧方便」、2018.10

特別講演、親鸞仏教センター、「ジャイナ教の信仰と生活」、2019.1

特別講演、「科学と仏教思想」研究会、「ジャイナ教はどのような宗教か」、2019.7

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

なし

2019年度

特別演習1名

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

鈴木知子 「Kalhana の Rājatarāṅginī 第7章と第8章を巡る議論の再検証」(指導教員) 梶原三恵子

2019年度

なし

#### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲) (乙)

なし

2019年度

(甲) (乙)

なし

## 15 インド哲学仏教学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1879年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播して、それぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2018年度現在、教員は教授2名（1名は兼任）、准教授2名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に対応し、その一部を構成する。そこでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門と連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年3~4名ほどであり、学士入学者も1~2名ほどいる。学部卒業生の半分近くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学するが、一般企業に就職する者も少なくない。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくる者も稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としており、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通している。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に4回研究例会を開催している。そこでは、大学院の博士課程在学などによる研究発表、国際会議等で最新成果を発表した教員による帰朝報告、海外留学生の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993年以来、年に1回、『インド哲学仏教学研究』を刊行している。

本専修課程に関わるインド哲学ならびに仏教学の研究は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。2018、2019年度には、韓国の全南大学校と大学院生の交流シンポジウムを開催し、2018年度には、台湾の国立台湾大学を会場に、東国大学校（ソウル）、北京大学（北京）、台湾大学（台北）とともに合同でシンポジウムを開催し、教員による発表が行われた。また、数名の留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。また東アジアでインド学仏教学を学ぶ学生の交流シンポジウムに若手の学生を送り出すこともできた。さらに、内外の諸学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中核的役割を担い続けて今日に至っている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

教授	下田 正弘 (兼任)	専門分野	インド・東南アジア仏教	在職期間	1994年10月より現在に至る
教授	養輪 顕量	専門分野	東アジア・日本仏教	在職期間	2010年4月より現在に至る
准教授	高橋 晃一	専門分野	インド・チベット仏教	在職期間	2017年4月より現在に至る
准教授	加藤 隆宏	専門分野	インド哲学	在職期間	2018年4月より現在に至る

#### (2) 助教の活動

青野 道彦 専門分野 初期仏教 (戒律)

在職期間 2016年4月~2020年3月

主要業績

(著書)

青野道彦『パーリ仏教戒律文献における 懲罰儀礼の研究』東京: 山喜房仏書林, 2020

(論文)

青野道彦「諸版対照テキストと註釈対象語句索引の作成をどうすすめるか—Samantapāsādikāの研究基盤を整備する」『デジタル学術空間の作り方』東京: 文学通信, 2019, pp. 199-210

青野道彦「Vinayapīṭakaにおける“ropeti”の意味」『韓国仏教学』(韓国・韓国仏教学会), vol. 87, 2018, pp. 211-243

**(3) 外国人研究員・内地研究員**

2018年度：Ronald Green (Coastal Carolina University 准教授)

**3. 卒業論文等題目**

**(1) 卒業論文題目一覧**

2018年度

「三世実有説に関する一考察」

特別演習2名

2019年度

『モークショーパーヤ』の「離欲の巻」におけるラーマの苦悩：『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ』を手掛かりとして」

特別演習1名

**(2) 修士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

和田賢宗 「ツォンカパにおける存在認識の理論と実践」(指導教員) 高橋晃一

千房りょう輔「上座部における「入出息念」の考察」(指導教員) 下田正弘

2019年度

石坂陵俊 「修験の十界思想の形成に関する研究—日本天台を中心に—」(指導教員) 蓑輪頭量

田中翔悟 「戒蘊にまつわる漢訳經典の基礎研究」(指導教員) 蓑輪頭量

小谷昂久 「『経随釈』(\*Abhidharmakośavṛtti Sūtrānusāriṇī)の著者と思想」(指導教員) 高橋晃一

佐久間祐惟「虎関師鍊における修証論の研究」(指導教員) 蓑輪頭量

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

(甲)

岡田文弘 「鎮源『大日本国法華経験記』の形成と思想に関する研究」

(主査) 蓑輪頭量 (副査) 下田正弘・渡部泰明・高橋晃一・菊地大樹

(乙)

なし

2019年度

(甲)

ジッリオエマヌエーレダヴィデ「最蓮房宛て『諸法実相鈔』の総合的研究」

(主査) 蓑輪頭量 (副査) 下田正弘・高橋晃一・菊地大樹・寺尾英智

(乙)

なし

## 16 イスラム学

### 1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2018年度及び2019年度は教授1名、准教授1名がそれぞれ近代より前の古典期イスラムの法学や伝承や思想文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、オスマン史研究、アフリカ・イスラム史研究、現代アラブ政治、イラン思想、アラビア語の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属するアジア史専門分野と連携しつつ、さらには先端科学技術研究センターならびに大学院総合文化研究科の教員2名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年2～3名前後である。学部及び大学院の在籍数は、2018年度は16名、2019年度は13名である。他大学からの学士入学者もいる。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。本専修課程から大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

2018年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法・預言者伝承  
准教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

2019年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法・預言者伝承  
准教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

#### (2) 助教の活動

井上 貴恵 専門分野 スーフィズム

在職期間 2019年4月～現在

主要業績

(論文)

Kie Inoue, 「The Practice and Principle of Samā' in Rūzbihān's Thought」、『Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies』、Vol. 11、pp. 18-26、2018.3

井上貴恵、「中世スーフィズム思想における、イラン・スーフィズムの影響と波及に関する研究」、『富士ゼロック株式会社小林基金発行小林フェローシップ2016年度研究助成論文』、2018.4

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「ムスリム同胞団保守派：包摂－穏健化仮説の検証」

「現代エジプトの俗人説教師アムル・ハーレドの思想に関する考察－ハーレドの言説を分析しながら－」

「中国ムスリムの「和諧思想」についての研究」

2019年度

- 「聖戦の具体的方法論 ～サイド・クトゥブの思想とその発展～」
- 「トルコの宗教教育における諸問題の検討」
- 「イブン・タイミーヤのシーア派批判：イマーム論の観点から」
- 「アイユーブ朝末期のスルタン・サーリフの事績と制度改革、及びその影響」

**(2) 修士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

- 木村風雅 「アブー・ハーミド・ガザーリーのサラフ論：思弁神学批判とスーフィズム修行論のはざままで」〈指導教員〉菊地達也
- 早矢仕悠太「アブー・ユースフの『地租の書』にみる死地蘇生と土地所有観念」〈指導教員〉柳橋博之
- 宮島舜 「スフラワルディー哲学の認識論的問題構制における自然学の問題」〈指導教員〉菊地達也

2019年度

なし

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

(甲)

- 井上貴恵 「ルーズビハーン・バクリーの神秘思想」
- 〈主査〉菊地達也 〈副査〉柳橋博之・鎌田繁・森本一夫・藤井守男

(乙)

なし

2019年度

(甲)

- 平野貴大 「小幽隠期におけるイマーム派の教義形成に関する文献学的研究：ゴム学派のハディース集とタフスイールの分析を通じて」
- 〈主査〉菊地達也 〈副査〉柳橋博之・鎌田繁・藤井守男・吉田京子
- 相楽悠太 「イブン・アラビー靈魂論の研究」
- 〈主査〉菊地達也 〈副査〉柳橋博之・竹下政孝・鎌田繁・小林春夫

(乙)

なし

## 17 西洋古典学

### 1. 研究室活動の概要

西洋古典学はギリシャ語・ラテン語でしるされた文献全体を対象とする。そして、それを通じて古典古代世界の文化全体の把握をもめざす学問である。西洋社会を理解する上で、この学問の重要性はますます強調するまでもなく、欧米では広範な領域を対象として永い伝統を誇る総合的学問である。本専修課程ではギリシャ語・ラテン語双方の基礎を固め（大学院の入試段階ですでに両古典語を必須とする）、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、徐々に視野を拡大していく方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は助教を除くと1人とあまりに少ない。そこで非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシャ語／ラテン語・韻文／散文いずれをもおおえるように努めている。また全国他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしている。2018～2019年度は、「クラシカル・セミナー」と称する研究会を、修士論文報告会など学生用報告に12回ほど開催した。このほか、世界的研究者の研究の最先端に触れるようにしている。また、4学期制になったのを利用して、1学期（6週間半）、週2コマ、2単位講義を通常の非常勤講師の授業および集中講義とは別に、一種の半集中講義として、外国人の著名教授をお願いすることにした。2018年度はS2学期にブラウン大学アデレ・スカフーロ（Adele Scafuro）教授に「ギリシア悲劇・喜劇と歌舞伎」と題する授業をしていただいた。

研究室紀要（査読つき）を原則として年1回発刊している。2019年8月に第11号を刊行した。

この他、一種の課外活動として、東京大学本部「体験活動」プログラムの資金援助を受け、2018年度、2019年度に、オクスフォード大学クライスト・チャーチを主たる宿泊地として、「古典学とコモンロー」入門と称する、サマープログラムを実施した。参加者は大学院生を含めると、2018年度、2019年度とも、約20名を数える。学生はこのほか、各自のテーマを滞在中に研究し、最終発表会にてプレゼンテーションを行った。この試みの手ごたえは十分大きいので、今後も継続の予定である。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

葛西 康徳 ギリシア・ローマ法とその普及、法廷弁論、ギリシア宗教、西洋古典学継受史  
(教授) 2011年度～

#### (2) 助教の活動

吉田 俊一郎

在職期間 2014年度～2018年度

研究領域 ラテン語散文、修辞学

主要業績

(学会発表)

国内、吉田俊一郎、「文彩を伴った模擬法廷弁論 *controversia figurata* について ——大セネカ、クインティリアヌス、擬クインティリアヌス『小模擬弁論集』に共通するある主題の検討——」、第17回フィロロギカ研究集会、2018.10.13

(他機関での講義等)

非常勤講師、立教大学、「ギリシア語1、ギリシア語2」、2018.4～2019.3

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

なし

2019年度

「叙事詩伝統とホメロス理解について」

「ギリシア音楽理論のアラビア語での継承」

「メガラ禁令」



**(2) 修士論文執筆者・題目一覧**

2018 年度

なし

2019 年度

なし

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018 年度

(甲) (乙)

なし

2019 年度

(甲) (乙)

なし

## 18 フランス語フランス文学

### 1. 研究室活動の概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張にもなっており、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授2名、准教授2名、外国人教師(准教授)1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実践的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2019年度の大学院学生数は、修士課程13名、博士課程14名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格(Master II)を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。もちろん、本研究科に課程博士論文を提出し博士号を取得する学生もコンスタントに存在する。一方で、修士課程修了後に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年5名程度だが、2018年度は15名が進学した。2019年度の学部在学学生は24名。前期課程教育の大綱化にもなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、他専修課程・他学部の学生にも誦経しややすい授業を心がけている。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院2コマ(「アカデミック・ライティング」を含む)、学部2コマが用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じられている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年1~2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリおよびリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール(高等師範学校)との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。また、東京大学の交換留学生制度を使って、学部生、修士学生が、パリ第8大学、ストラスブール大学、ブザンソン大学、ジュネーヴ大学等に留学した。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

- 教授 野崎 欽(ネルヴァル、フランス19世紀文学)
- 教授 塚本 昌則(ヴァレリー、フランス20世紀文学)
- 准教授 塩塚 秀一郎(ベレック、フランス20世紀文学)
- 准教授 王寺 賢太(ディドロ、フランス18世紀文学)

#### (2) 助教の活動

2018-2019年度

前之園 望(マエノソノ ノゾム)

略歴

- 2000年3月 東京大学文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修卒業
- 2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程入学
- 2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程入学
- 2002年10月 フランス国立高等師範学校リヨン校文学人文学科留学 [~2003年9月/交換留学]
- 2002年10月 フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究所  
フランス言語文学文化研究専攻DEA課程入学

2003年9月 フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究所  
フランス言語文学文化研究専攻 DEA 課程修了

2006年10月 フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究所  
文学芸術学専攻博士課程入学

2010年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得満期退学

2016年3月 フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究所  
文学芸術学専攻博士課程修了 (文学芸術学博士)

2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教

2020年3月 退職

研究領域 20世紀フランス文学、シュルレアリスム (特にアンドレ・ブルトン研究)

主要業績

(著書)

共著、野崎歓 [編] 『フランス文学を旅する 60 章』、明石書店、「第 42 章 アポリネールと「ミラボー橋」  
(p.251-254)、「第 45 章 ブルトンとパリ散歩」(p.265-269)、「第 46 章 バタイユと「内的体験」  
(p.270-274)「第 47 章 プレヴェールと「優美な死骸」(p.275-278)、2018.10

(論文)

前之園望「潜在的現実の現働化——アンドレ・ブルトンにおけるポエム = オブジェの詩学」、『フランス  
語フランス文学研究』第 113 号、日本フランス語フランス文学会、2018.8、p.445-459

(学会発表)

国際、Nozomu Maenosono, «La poétique du *mapping vidéo verbal*: le cas d'*Arcane 17* d'André Breton»,  
Département de langue et littérature françaises de l'Université de Tokyo, «Le Cinéma des Poètes», Université de  
Tokyo, 2018.12.15

国内、前之園望「シラサギが飛び立つまで——アンドレ・ブルトンにおける«*aigrette*»」、慶應義塾大学教  
養研究センター後援シンポジウム「鳥たちのフランス文学」、慶應義塾大学、2018.11.25

国内、前之園望「ジャック・エロルドと透明な巨人」、シュルレアリスム美術を考える会、第 2 回ワーク  
ショップ「シュルレアリスム美術を読む」、成城大学、2019.3.6

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、若手研究、研究代表者、「アンドレ・ブルトンにおける「ポエム=オブジ  
ェ」の詩学とその射程」、2018～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、分担研究者、「『作者』の死と再生：フランス・ロマン主  
義文学の現代的意義をめぐる総合的研究」、2017～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、分担研究者、「二十世紀フランス文学における散文の研究  
——経験とその表現」、2019～

(非常勤講師)

明治大学、「フランス語 I」、「フランス語 II」、「フランス語 III」、2018.4～2020.3

(その他)

日本フランス語フランス文学会会計担当常任幹事、2019.5～

### (3) 外国人教員の活動

マリアンヌ・シモン=及川 (Marianne SIMON-OIKAWA)

略歴

1989年9月 国立高等師範学校 (エコール・ノルマル・シュペリユール) およびパリ第7大学入学

1990年9月 同大学にて仏文 (現代文学) 学士号、英文学士号取得

1991年9月 同大学にて修士号取得 (現代文学)

1992年7月 大学教育教授資格 (アグレガシオン) 取得

1993年9月 パリ第7大学にて DEA (PhD) 取得 (現代文学)

1993年9月-1995年8月 東京大学研究生

1995年9月-1998年9月 リール大学講師 (現代文学)

1996年9月 パリ第7大学にて日本語学士号取得

1999年12月 パリ第7大学にて文学博士号取得 (現代文学)

1999年4月-2005年4月 早稲田大学非常勤講師 (フランス文学)

2000年9月－2005年9月 慶應義塾大学訪問講師（フランス文学）  
2000年4月－2008年8月 日仏会館客員研究員  
2006年10月 東京大学准教授（現在に至る）  
2016年6月 パリ第7大学にて教授昇進資格取得（Habilitation à diriger des recherches）  
2016年11月 日仏会館客員研究員（現在に至る）

研究対象 フランス文学と絵画；日仏両文化における視覚詩の伝統

主要業績

（著書）

- 共著、Marianne Simon-Oikawa, Claire-Akiko Brisset, Florence Dumora, 『Rébus d'ici et d'ailleurs : écriture, image, signe』、Éditions Hémisphères / Nouvelles éditions Maisonneuve & Larose、2018.11
- 共著、Cléa Patin et Julien Bouvard, 『Japon pluriel 12 : autour de l'image, arts graphiques et culture visuelle au Japon』、Philippe Picquier、2019
- 単著、Marianne Simon-Oikawa, 『Les poètes spatialistes et le cinéma』、Nouvelles éditions Place、2019.2
- 共著、Christine Dupouy, 『Deux poètes face au monde : Pierre et Ilse Garnier』、Presses universitaires François Rabelais、2019.2
- 共著、Carole Aurouet et Marianne Simon-Oikawa, 『Pierre Albert-Birot (1876-1967) —Un pyrogène des avant-gardes』、Presses universitaires de Rennes、2019.3
- 共著、Carole Aurouet et Marianne Simon-Oikawa, 『Jacques Prévert, détonations poétiques』、Classiques Garnier、2019.5

（論文）

- Marianne Simon-Oikawa, 「Writing and Image in Pre-modern Japan」、『Inmunkwahak —The journal of the Humanities, Institute of the Humanities, Yonsei University, Korea』、13、39-77 頁、2018.8

（学会発表）

- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「Writing and Image in Pre-modern Japan: Santô Kyôden's moji-e」、Writing and Media、Yonsei University, Institute of the Humanities, Seoul, Korea、2018.5.26
- 国際、Marianne Simon-Oikawa et Carole Aurouet, 「Prévert vu par...」、Jacques Prévert, détonations poétiques、Centre culturel international de Cerisy-La-Salle, France、2018.8.11
- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「La poétique du collage chez Prévert: des mots aux images」、Jacques Prévert, détonations poétiques、Centre culturel international de Cerisy-La-Salle、2018.8.12
- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「Tu ne sais pas peindre, mais tu es peintre !」 - L'esthétique du collage chez Prévert」、Jacques Prévert, détonations poétiques、Centre culturel international de Cerisy-La-Salle、2018.8.12
- 国際、Marianne Simon-Oikawa et Carole Aurouet, 「Prévert vu par...」、Jacques Prévert, détonations poétiques、Centre culturel international de Cerisy-La-Salle、2018.8.12
- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「La poétique du collage chez Prévert: des mots aux images」、Jacques Prévert, détonations poétiques、Centre culturel international de Cerisy-La-Salle、2018.8.18
- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「"Tu ne sais pas peindre, mais tu es peintre !" - L'esthétique du collage chez Prévert」、Jacques Prévert, détonations poétiques、Centre culturel international de Cerisy-La-Salle, France、2018.8.18
- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「Espaces du couple: «collaboration idéale» et création personnelle chez Ilse et Pierre Garnier」、Relire les Avant-Gardes: deux two dos zwei due、Université Côte d'Azur、2019.10.11
- 国内、マリアンヌ・シモン＝及川, 「海を越えたビジュアル・ポエトリー——フランスと日本の場合」、異文化を学び、自文化を学ぶ——フランスから世界を考える、東洋大学、2019.12.21
- 国際、Marianne Simon-Oikawa, 「Esthétique de la «poésie habitable». Prototypes/Textes pour une architecture d'Ilse et Pierre Garnier」、Le Temps des cathédrales et ses métamorphoses dans l'œuvre d'Ilse et Pierre Garnier、Maison du théâtre d'Amiens、2020.3.7

（会議主催(チェア他)）

- 国内、「Voix, gestes et musique : la séance cinématographique en France et au Japon (1910-1920)」、主催、Maison franco-japonaise、2018.12.8
- 国内、「Le cinéma des poètes」、主催、Université de Tokyo、2018.12.15
- 国際、「Illustrer ? XIXe-XXe siècles」、主催、Université Paris Diderot et INHA、2019.1.24～2019.1.25

(翻訳)

個人訳、Uhlenbeck and others, "Vaves of renewal - Modern Japanese Prints 1900-1960", traduit par Marianne

#### (4) 受け入れ外国人研究者

2018年度

Anne-Elisabeth Halpem (シャンパーニュ=アルデンヌ大学准教授)  
Clélia Zemik (フランス国立高等美術学校教授)  
Laurent Véray (パリ第3大学教授)  
Béatrice de Pastre (CNC フランス国立映画センター副長)  
Carole Aurouet (パリ東マルヌ・ラ・ヴァレ大学の准教授)  
David Bellos (プリンストン大学教授)  
Benedetta Zaccarello (フランス人文科学研究センター研究員/ブラハ)

2019年度

Fabien Arribert-Narce (エジンバラ大学教授)  
Jean-Louis Jeannelle (ソルボンヌ大学教授)

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「デュラス『太平洋の防波堤』におけるヒロインの脱出」  
「エメ・セゼール『帰郷ノート』について」  
「カミュ『異邦人』の論考」  
「スタンダール『パルムの僧院』—取り木と再演」  
「ラシーヌの亡霊」

2019年度

『危険な関係』における「本当らしさ」とルソー」  
「浜辺を子どもが歩くとき—ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』における海の表象と子どもの関係についての考察—」  
「ミシェル・レリス『成熟の年齢』研究 「聖なるもの」との関係を中心に」  
「劇場としての北京—セガレン『ルネ・レイス』における虚構心の諸様態」  
『聖アレクシス伝』における聖人像形成の手法—語り手と副次的人物の果たす役割—」  
「ジャリの現代性」  
「ペロー論—『物語集』における教訓の意義と傾向について」  
「モーリヤック『愛の砂漠』論」  
「アランの音楽観」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

青山勝俊 「アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言』における表現の戦略」(指導教員) 塚本昌則  
佐野夕香 「ボリス・ヴィアン『うたかたの日々』研究—小説における自由の探求—」(指導教員) 野崎敏  
柏木地平 「『イリュミナシオン』における「断絶」の概念の再検討」(指導教員) 塚本昌則  
春日恵理奈「アナートル・フランスと児童文学」(指導教員) 野崎敏  
小林ゆり子「スワンあるいは文学の臨界点—『失われた時を求めて』における『スワンの恋』の位置付けについて—」(指導教員) 塚本昌則  
SUH Jaemin 「Maupassant ou la cristallisation de l'écriture aquatique (モーパッサン、水のようなエクリチュールの結晶化)」(指導教員) 野崎敏

2019年度

内山奈緒美「ル・クレジオ『隔離の島』における自己探求—個人の物語から集団の記憶へ—」(指導教員) 中地義和  
渡邊昂太 「ジュリアン・グラック『シルトの岸辺』における触覚の詩学」(指導教員) 塚本昌則

中江太一 「パースペクティヴと第二の自然から読む『フライデーあるいは太平洋の冥界』——哲学者から小説家へ——」(指導教員) 塚本昌則

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018 年度

(甲) (乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

鈴木和彦、*Les Classiques et les Romantiques : une histoire des querelles littéraires (1824-1834)* (パリ第10大学)

2019 年度

(甲) (乙) (外国の大学に提出された論文)

なし

## 19 南欧語南欧文学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程は1979年4月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994年4月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も1995年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する研究室所属の専任教員はいないが、94年度から学外非常勤講師等によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業(学部・大学院共通)も年度により開講されてきた。また、2001年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2018～2019年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように3名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行している。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、フィレンツェ大学、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

教授 : 浦 一章 (イタリア13・14世紀文学)

准教授 : Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート) (イタリア15世紀文学)

助教 : 長野 徹 (イタリア近現代文学・イタリア児童文学)

#### (2) 助教の活動

長野 徹

在職期間 1997年10月～現在

研究領域 イタリア近現代文学・イタリア児童文学

主要業績

(論文)

長野徹、「イタリア児童文学の世界—『ピノッキオの冒険』から現代まで—」、『こどもとしゃかん』、162号、pp.2-21、2019.7

(翻訳)

個人訳、ロベルト・ピウミーニ、『ケンタウロスのポロス』、岩波書店、2018.5

個人訳、ディーノ・ブツァーティ、『現代の地獄への旅』、東宣出版、2018.12

個人訳、ディーノ・ブツァーティ、『怪物』、東宣出版、2020.1

(他機関での講義等)

非常勤講師、共立女子大学、「基礎イタリア語(入門)」、2018.4～2020.3

非常勤講師、明治大学、「イタリア語IA、IB」、2018.4～2020.3

特別講演、栃木子どもの本連絡会、「イタリア児童文学の展開／現代イタリアの児童文学」、2018.7

### (3) 外国人教員の活動

Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート)

研究領域 15世紀のフィレンツェの文学、ヨーロッパへの印刷術の導入と文化変容

在職期間 2011年4月～現在

主要業績

(著書)

単著、Lorenzo Amato、『Le rime di Giovan Battista Strozzi il Vecchio: censimento dei testimoni e incipitario delle poesie. Per l'edizione critica』、Polistampa、2019

共著、Lorenzo Amato、『Dalla Romagna all'Europa: l'umanesimo di Faustino da Trezzano』、Patron、2019

(論文)

Lorenzo Amato、『2018 Fra Firenze e Roma: il madrigale di Michelangelo Buonarroti. A proposito di una nuova edizione delle "Rime e lettere" di Michelangelo Buonarroti』、『Roma nel Rinascimento』、pp.85-104、2018

Lorenzo Amato、『Le serie o corone di madrigali a Firenze dopo Giovan Battista Strozzi il Vecchio: primi appunti sulla tradizione di un genere lirico "granducale"』、『Transmission of knowledge in the Late Middle Ages and the Renaissance (Atti del Convegno del Progetto TRALMAR, 26-27 luglio 2017)』、2019

(解説)

Lorenzo Amato、『Strozzi, Giovan Battista il Vecchio』、『Dizionario Biografico degli italiani』、vol.94、2019

(学会発表)

国際、Lorenzo Amato、『First Notes on Giovan Battista Strozzi the Younger's Roman Library』、Fourth NNRS Conference: "Renaissance Libraries and the Organisation of Information" (26-28 settembre 2018)、Helsinki、2018.9.27

国内、Lorenzo Amato、『La macchia e il difetto di Torquato Tasso: una lettura formale e filosofica delle rime dedicate al neo』、Convegno Annuale dell'Associazione di Studi Italici in Giappone、Kyoto、2018.10.20

国際、Lorenzo Amato、『Lumen florentinae gentis: Dante poeta 'sacro e civile' nell'opera di Domenico di Giovanni da Corella OP』、Società Dantesca Italiana、Convegno "Da Boccaccio a Landino. Un secolo di "Lecturae Dantis" (24-26 ottobre)、Firenze、2018.10.25

国内、Lorenzo Amato、『Gemme, perle e pietre dure: la lirica di Torquato Tasso e le poesie 'petrose' del Cinquecento fiorentino』、イタリア学会第67回大会、2019.10.26

### (4) 特任教授の活動

長神 悟

研究領域 イタリア語学、ロマンス語学

在職期間 2018年度

主要業績

(著書)

単著、長神悟、『イタリア語のABC (改訂版)』、白水社、2018

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「ピノッキオの冒険における善と悪の概念」

2019年度

「ディーノ・ブツァーティの作品における動物の役割」

「Giambattista Marino の "La Lira" の 'amore' と 'core' を中心とした考察」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

井上進 「「ピランデッロ演劇の理念とそのドラマトゥルギー」—ウモリズモと劇中劇—」〈指導教員〉浦一章

2019年度

なし



**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018 年度

(甲) (乙)

なし

2019 年度

(甲)

横田太郎 「レオン・バッティスタ・アルベルティ『文芸の利益と不利益』にみられる学問像と文人像——同時代の学問界とのかかわり——」

〈主査〉 浦一章 〈副査〉 池上俊一・村松真理子・日向太郎・長神悟

(乙)

なし

## 20 英語英米文学

### 1. 研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から20世紀末の英語圏作品まで幅広い。2018年4月現在、専任教員は教授4名、准教授1名、外国人客員教授1名、助教2名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含み）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生は、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で30枚程度の卒業論文を執筆する。授業以外に、TAの大学院生、外国人客員教授および英語の非常勤講師の協力を得て、学部3年生を主に対象とした「英語漬け」の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も毎年開催されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向けて日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に1~2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。これらの学術研究誌や各分野の学会誌に発表した研究を基盤として博士論文を人文社会系研究科に提出し、PhDの学位を取得した者はすでに14名輩出されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を35名以上輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもある。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

教授	大橋 洋一	OHASHI, Yoichi	(イギリス文学、2018年度まで)
教授	後藤 和彦	GOTO, Kazuhiko	(アメリカ文学)
教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
教授	新井 潤美	ARAI, Megumi	(イギリス文学、2019年度から)
教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
准教授	諏訪部 浩一	SUWABE, Koichi	(アメリカ文学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学)
助教	中嶋 英樹	NAKAJIMA, Hideki	(イギリス文学、2018年度まで)
助教	木村 明日香	KIMURA, Asuka	(イギリス文学、2018年度まで)
助教	丸谷 徳嗣	MARUTANI, Atsushi	(アメリカ文学、2019年度9月から)

## (2) 助教の活動

中嶋 英樹

在職期間 2016年4月－2019年3月

研究領域 イギリス文学

主要業績

(論文)

Hideki Nakajima, “Telepathy and the Question of Intimacy in Mrs Dalloway” 『英語圏文化研究 UTokyo (東京大学大学院英語圏文化研究会発行)』、12、11-27 頁、2018.8

中嶋英樹、「『テレニー』におけるテレパシー的「流体」と過剰な親密性」日本英文学会発行、『第90回大会 Proceedings』171-172 頁、2018.9

(学会発表)

国内、中嶋英樹、「『船出』におけるさまよう思考とうわの空——ヴァージニア・ウルフの注意の技法」、日本ヴァージニア・ウルフ協会第38回全国大会、神戸大学、2018.11.17

木村 明日香

在職期間 2017年4月－2019年3月

研究領域 イギリス文学

主要業績

(論文)

木村明日香、「『英雄の証明』における『コロレイナス』解釈の新たな可能性」、『英語圏文化研究 UTokyo (東京大学大学院英語圏文化研究会発行)』、12、65-74 頁、2018.8

木村明日香、「初期近代演劇における寡婦表象と喪服の意味の多層性」、『第90回大会 Proceedings (日本英文学会)』、187-88 頁、2018.9

木村明日香、「『モルフィ公爵夫人』における少年俳優の舞台上の効果」、『関東英文学研究』、11、39-50 頁、2019.1

木村明日香、「『アントニオの復讐』と『ハムレット』における夫の亡霊と寡婦の記憶」、*Shakespeare Journal*、5、36-51 頁 2019.3 (日本シェイクスピア協会奨励賞受賞)

丸谷 徳嗣

在職期間 2019年9月－現在

研究領域 アメリカ文学

主要業績

(論文)

“The Aesthetics and Morality of the ‘Natural’ in Eudora Welty’s *Delta Wedding*.” *Mississippi Quarterly* 70/71. 2 (Spring 2017/2018): 205-223. 2019.9

(学会発表)

丸谷徳嗣、「『共通の人間性』について——Mary Noailles Murfree のアパラチアにおける自然と文化」、日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会、駒澤大学、2019.9.14

## (3) 外国人教員の活動

Stephen Clark : 客員教授

(論文)

Steve Clark, “Isabella Bird, Selected Works (1856-1899)” *Handbook of British Travel-Writing*, edited by Barbara Schaff, 397-410, De Gruyter, 2019

Steve Clark, “Arrival” and “Nation” *Keywords for Travel Writing Studies*, eds. By Charles Forsdick, Zoe Kinsley, and Kathryn Walchester, Anthem Press, 16-18 and 166-168, 2019

Steve Clark, “Something’s Lost but Something’s Gained: Joni Mitchell and Postcolonial Lyric.” *Canadian Music and American Culture: Get Away from Me*, edited by Tristanne Connolly and Tomoyuki Iino, 27-46, Routledge, 2017

Steve Clark, “Asian Romanticism: Construction of the Comparable.” *British Romanticism in Asia*, eds by Laurence Williams and Alex Watson, 387-394, Palgrave, 2019

Steve Clark, “ReOrienting Romanticism: the Legacy of Indian Romantic Poetry in English,” *Romantic Regacies: Transnational and Transdisciplinary Contexts*, eds by Shun-Liang Chao and John Michael Corrigan, 251-269, Routledge, 2019

(書評)

Steve Clark, *Romanticism and Caricature* by Ian Haywood 『イギリス・ロマン派研究』42号、63-69 頁、2018

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- Conditions for Identity Crisis of Noa in Min Jin Lee's *Pachinko*  
(ミンジン・リー『パチンコ』におけるノアのアイデンティティクライシスの条件)
- 'It's a definite part of English life': Englishness and Hybridity in *A Handful of Dust*  
(まさしく英国生活の一部なのだ—*A Handful of Dust*におけるイングリッシュネスと混濁性)
- Metaphors and Symbols in *The Crying of Lot 49*  
(『競売ナンバー49の叫び』におけるメタファーとシンボル)
- Austear's Mock-Laughter: The Doubles of Comedy in *Pride and Prejudice*  
(『高慢と偏見』におけるコメディの二面)
- Pastoral and Homosexual Desire in *As you Like It*  
(『お気に召すまま』におけるパストラルと同性愛的欲望)

2019年度

- A Homoerotic Reading of the Turn of the Screw  
(『ねじの回転』における同性愛)
- Representation of Girlhood by Arthur Ransome and Its Influence: A Study of the *Swallows and Amazons* Series  
(アーサー・ランサムによる少女期の表象とその影響—『ツバメ号とアマゾン号』シリーズについての研究)
- Fairy Tale and Reality in *Silas Marner*  
(『サイラス・マーナー』におけるおとぎ話と現実性)
- Labeling and (Im)perfect Lexical Items  
(ラベル付けと(不)完全な語彙項目)
- A Study of Modern Feminism in '*Pride and Prejudice* and *Zombies*'  
(『高慢と偏見とゾンビ』に見る現代のフェミニズム表象)
- Homesociality in *Romeo and Juliet* and *West Side Story*  
(『ロミオとジュリエット』と『ウェストサイドストーリー』におけるホモソーシャル)
- John Berry's Fairy Tale: Fiction and Reality in *The Hotel New Hampshire*  
(John Berryのおとぎ話: *The Hotel New Hampshire*における虚構と現実)

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

- 刑部昂 *Missing Witnesses: The Loss, Identity, and History in Toni Morrison's Sula and Beloved* (「行方不明の目撃者」——トニ・モリソンの『スーラ』と『ベラヴィッド』における喪失、アイデンティティ、歴史) (指導教員) 諏訪部浩一
- 与良美紗子 *Virginia Woolf and Play: Orlando, The Voyage Out and Mrs Dalloway* (ヴァージニア・ウルフと遊び—『オーランド』『船出』『ダロウェイ夫人』) (指導教員) 阿部公彦
- 坂元美樹也 *Ambiguity and Rootlessness in the Early Poems of T. S. Eliot* (T・S・エリオット初期詩篇における曖昧性と根無し草性) (指導教員) 阿部公彦
- 橋本良一 *The Mirror Blue: Tennyson's Poetry of Transference* (青い鏡——テニソンの詩における転移) (指導教員) 阿部公彦
- 宮嶋範 *From Sojourner to Wanderer: The Viewpoints of Outsiders in Delta Wedding and The Golden Apples* (滞在者から放浪者へ—『デルタの結婚式』と『黄金の林檎』におけるよそ者の視点) (指導教員) 諏訪部浩一

2019年度

- 杉浦牧 *Sensory Perception and Representation of the Body in William Faulkner's The Sound and the Fury* (ウィリアム・フォークナー『響きと怒り』における知覚と身体表象) (指導教員) 諏訪部浩一
- 木村真理子 *Byron's Poetry and Carnival* (バイロン詩とカーニバル) (指導教員) 阿部公彦

中越亜理紗 *Imagining the Foreign in Charles Dickens's Condition of England Novels of the 1850s* (1850年代のディケンズ作品における貧困と外国のイメージ) (指導教員) 阿部公彦

原口祐介 *Perspectives of E.M. Forster's Narrator: Cultures and Animals in A Passage to India* (E. M. フォースターの語り手の視点: 『インドへの道』における文化と動物) (指導教員) 阿部公彦

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

(甲) (乙)

なし

2019年度

(甲)

石原由貴 *Syntactic Doubling of Predicates in Japanese* (日本語における述部の統語的反復の研究)

〈主査〉渡邊明 (副査) 今西典子・伊藤たかね・平岩健・千葉修司

(乙)

なし

## 2 1 ドイツ語ドイツ文学

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学（歴史文法と現代言語学）の研究・教育をおこなっている。

#### (2) 専攻としての活動

両年度の大学院兼任・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

[2018 年度]

「近代演劇と人格 Person の概念 (1)、(2)」

「ドイツ語のしくみと教え方」

「ヴァイマル時代のクラカウアーの映画批評」

[2019 年度]

「多様性に関する研究」

「ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの「環世界」概念について」

「ドイツ語の Warum? (なぜ) と Wozu? (なんのために) (1)(2)」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキアムの時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

#### (3) 研究室としての活動

研究論文誌として年2号発行している『詩・言語』は、2018年度に85,86号が、2019年度には87号が発行された。

科学研究費補助金関係では、「抗争」言説の再検討（ドイツ文学の場合）（基盤研究（C）、研究代表者大宮勘一郎）および「作者性の諸相—中世ドイツ英雄叙事詩における歴史性と虚構性の問題」（若手研究（B）研究代表者：山本潤）は2016年度から2018年度まで、「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」（基盤研究（C）、研究代表者大宮勘一郎）は2019年度から、交付された。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わることが通例となっている。宮田眞治は2019年度より学会長をつとめ、山本潤は2019年度より理事職にある。大宮勘一郎が2017年度より準備委員および実行委員をつとめていた日本独文学会主催の「2019年アジアゲルマニスト会議」は2019年8月に開催された。その他の学会活動として、宮田眞治は2008年度より日本シェリング協会理事を、山本潤は2019年度より西洋中世学会常任委員をつとめている。

#### (4) 国際交流の状況

国際交流としては、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2018 年度

Wolfgang Schamoni 教授 (Universität Heidelberg) : 研究員として滞在 (世話教員 : 宮田眞治)、研究題目 : Japanische Lessing-Rezeption der Meiji-Zeit、滞在期間 : 2018 年 4 月 2 日 ~ 4 月 30 日

Jaimey Fisher 教授 (University of California Davis) : 研究員として滞在 (世話教員 : ケプラー田崎シュテファン)、研究題目 : Aftershocks of the Catastrophe: The 1950s Transformation of the West German War Film、滞在期間 : 2019 年 11 月 9 日 ~ 11 月 23 日

〈講演会〉

Steffen Höhne 教授 (Hochschule für Musik Franz List Weimar):

Kulturstädte in Habsburg—Czemowitz, Prag, Triest

Hans-Gerd Koch 教授 (Universität Wuppertal):

Geister und Gespenster in den Texten Franz Kafkas

2018.10.31. 文学部三号館 4F3401 号室

2019 年度

Wolfgang Hottner 博士 (Freie Universität Berlin) : アインシュタイン財団による招聘研究者として滞在 (世話教員 : 大宮勘一郎)、研究題目 : Written Faces – Physiognomy, Readability, and Sripture in European Fictions on Japan (1930-1980)、滞在期間 : 2019 年 2 月 18 日 ~ 3 月 29 日

《講演会》

Kim Ihmku 教授 (ソウル国立大学) :

Seinsbewegung in Literatur und Malerei: Eine vergleichende Betrachtung zu Rilke, Klimt und Yong-un Hann.

2019.1.9. 文学部3号館4F3401号室

《国際コロキウム》

Internationales Kolloquium „Autorschaft und Autorkonzept“

Assoc. Prof. Dr. Jun YAMAMOTO (Universität Tokyo):

Die Wahrheit des Erzählten. Zu Formen der Autorität in der mittelhochdeutschen Epik

PD. Dr. Cordula KROPIK (Universität Leipzig):

Bremberger. Zur Vergesellschaftung eines Autors im Königsteiner Liederbuch

Assoc. Prof. Dr. Daisuke EGUCHI (Waseda Universität):

Jean Pauls Strategie der Vorrede

Assist. Prof. Dr. Keiichi MAEDA (Ochanomizu Universität):

Autorschaft einer jungen Dichterin – Ingeborg Bachmann und die Literaturszene im Wien der Nachkriegszeit

2019.3.15. (ワークショップ) 3.16. (コロキウム) 文学部3号館4F3401号室

また、大学院の学生の多くがドイツ、オーストリアへ留学している。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

教授： 大宮勘一郎 近現代ドイツ文学

教授： 宮田 眞治 近現代ドイツ文学

准教授： 山本 潤 ドイツ中世文学

### (2) 外国人教員の活動

准教授 Kepler-Tasaki Stefan

在職期間 2012年10月1日～現在

主要業績

(著書)

単著、Stefan Kepler-Tasaki, 『Alfred Döblin. Massen, Medien, Metropolen.』、Königshausen & Neumann、2018.10

単著、Stefan Kepler-Tasaki, 『Hans Heinrich Ehrler (1872-1951). Biografie eines Abendländers.』、Böhlau、2018.10

単著、Stefan Kepler-Tasaki, 『Wie Goethe Japaner wurde.』、Iudicium Verlag、2020.3

(論文)

Stefan Kepler-Tasaki, 「Faust im Film bis 1945.」、『Faust-Handbuch. Konstellationen - Diskurse - Medien.』、316-325頁、2018.7

Stefan Kepler-Tasaki, 「Goethe in Japan. Vom Buddhismus zur Populärkultur.」、『Goethe-Jahrbuch.』、134(2017)、125-136頁、2018.7

Stefan Kepler-Tasaki, 「Berliner Heimat. Alfred Döblins proletarischer Kosmopolitismus.」、『Alfred Döblin: Neufassung.』、TEXT + KRITIK 13/14、3-21頁、2018.11

Stefan Kepler-Tasaki, 「Goethe, the Japanese. National Identity through Cultural Exchange, 1889 to 1989.」、『Jahrbuch für internationale Germanistik.』、51-1、57-98頁、2019.6

(学会発表)

国際、Stefan Kepler-Tasaki, 「How Goethe became Japanese」、43rd Annual German Studies Association、Portland, Oregon USA、2019.10.4

(会議主催(チェア他))

国際、「Doris-Doerrie-Tag am Deutschen Kulturzentrum Tokyo」、主催、公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会、2018.11.10

国際、「4. Deutsch-Asiatischer Studientag Literaturwissenschaft」、主催、森鷗外記念館 (ベルリン)、2018.12.7

国際、「5. Deutsch-Asiatischer Studientag Literaturwissenschaft」、主催、森鷗外記念館 (ベルリン)、2019.7.19

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、ケプラータサキ シュテファン、Stefan Keppler-Tasaki、研究代表者、「Villa Aurora as Sanctuary: A History of German Literature in Los Angeles, 1995-2020」、「Villa Aurora as Sanctuary: A History of German Literature in Los Angeles, 1995-2020」、2019～

(他機関での講義等)

特別講演、Pomona College / Scripps College, USA、「Goethe, the Japanese: Zen-Film-Manga.」、2018.4

特別講演、Fudan University, College of Foreign Language and Literature, German Department、「Mit dem Auge des Weltbürgers. Alfred Döblin als Berliner und Weltbürger」、2019.3

特別講演、公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会、「Wie Goethe Japaner wurde. Eine Geschichte internationaler Kontakte und nationaler Zwecke」、2019.3

その他、公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会、Damian Flanagan: 「The Unfolding of Japanese Literature as a Nietzschean Adventure」、2019.6

特別講演、Thomas Mann House, Losangeles (USA)、「Villa Aurora as Sanctuary」、2019.10

特別講演、Pomona College (California, USA)、「Zen in America: Doris Dörrie's Documentary Film How to Cook Your Life (2007)」、2019.11

特別講演、University of Southern California, Max Kade Institute、「Lecture by Stefan Keppler-Tasaki: "With the Eyes of a Global Citizen." Alfred Döblin as "Berliner" and Cosmopolitan」、2019.12

特別講演、University of California, Davis、「Goethe, the Buddha」、2020.2

(マスコミ)

被紹介記事、インターネット、「"Die amerikanische Zukunft ist vermeidbar", Professor Stefan Keppler-Tasaki ist zur Zeit Stipendiat im Thomas-Mann-Haus in Los Angeles. Der Ort gilt als Drehkreuz für internationalen Austausch」、Forschung & Lehre、2019/11/03

被紹介記事、新聞、「Mythos Los Angeles. Der Literaturwissenschaftler Stefan Keppler-Tasaki forscht in Los Angeles zum Einfluss der Stadt und ihrer Geschichte auf die deutsche Gegenwartsliteratur」、Tagesspiegel、2019/12/07

署名記事、インターネット、「Goethe's Homecoming. Die Weimarer Ausgabe im Thomas Mann House Los Angeles / Goethe's Homecoming: The Weimar Edition at the Thomas Mann House in Los Angeles」、2019/10/29

(学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員)

教育機関、Freie Universität Berlin, EXC 2020 Temporal Communities、Steering Committee member、2019.11～

### (3) 内地研修員・外国人研究員

外国人研究員

Wolfgang Schamoni 教授 (Universität Heidelberg) : (世話教員 : 宮田眞治)、研究題目 : Japanische Lessing-Rezeption der Meiji-Zeit、滞在期間 : 2018年4月2日～4月30日

Wolfgang Hottner 博士 (Freie Universität Berlin) : (世話教員 : 大宮勘一郎)、研究題目 : Written Faces – Physiognomy, Readability, and Scripture in European Fictions on Japan (1930-1980)、滞在期間 : 2019年2月18日～3月29日

Jaimey Fisher 教授 (University of California Davis) : (世話教員 : ケプラー田崎シュテファン)、研究題目 : Aftershocks of the Catastrophe: The 1950s Transformation of the West German War Film、滞在期間 : 2019年11月9日～11月23日

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「ヘルマン・ヘッセと『車輪の下』について」

2019年度

「交響詩『タッソー』におけるリストのゲーテ受容に関する一考察」

「"Iwein" における zuht と triuwe」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

伊藤貴康 「フケーにおける〈近代〉について—『ロサウラとその一族』を中心に—」(指導教員) 宮田眞治



- 岡野史 「ブレヒトとギリシャ古典悲劇—『アンティゴネー』改作における脱悲劇の試みについて」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 栗谷拓磨 「ペーペルコルンの人物像と時代性—トーマス・マン『魔の山』におけるペーペルコルン挿話の読解と考察—」〈指導教員〉宮田眞治
- 佐伯佳幸 「ヘルマン・ヘッセ『荒野の狼』における「ツァラトゥストラ」的なもの」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 若山真理子「Musicality and "Communication" in the Poetic Ritual of Stefan George's Early Works (シュテファン・ゲオルゲの初期作品の詩的儀式における音楽性と「コミュニケーション」の関係)」〈指導教員〉大宮勘一郎

2019年度

- 五十嵐遥也「ローベルト・ムージル『合一』における認識論的詩学」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 伊藤望 「ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』におけるヴィルヘルムの修業とフィリーネの関係について」〈指導教員〉宮田眞治
- 堺祐希 「行為するメフィストフェレス—ファウスト本とゲーテの『ファウスト』の比較から—」〈指導教員〉山本潤
- 平野遥海 「フリードリヒ・ヘルダーリン 後期讃歌の叙述の底にあるもの」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 山中慎太郎「ゲーテと植物の詩学」〈指導教員〉宮田眞治

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

(甲)

- 三根靖久 「執筆と流れ—フランツ・カフカの日記に記された執筆に関する形象表現と後期未発表テキストにおける自己言及性について」  
〈主査〉宮田眞治 〈副査〉大宮勘一郎・山本潤・松浦純・尾張充典

(乙)

なし

2019年度

(甲)

- 葛西敬之 「境界の散歩者—ローベルト・ヴァルザーの詩学について」  
〈主査〉大宮勘一郎 〈副査〉宮田眞治・山本潤・前田良三・新本史斉

(乙)

なし

## 2.2 スラヴ語スラヴ文学

### 1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年（昭和47年）、東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが、すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また1995年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。スラヴ圏の言語と文学に関する研究と教育を発展させることを課題とし、日本におけるスラヴ語スラヴ文学の研究と教育の重要な拠点として幅広くスラヴ諸地域の言語文化に関する諸問題を扱っている。

現在の教員数は教授1名、准教授1名である。ほかに他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、スラヴ語学、スラヴ語史、ロシア文学（詩、小説、演劇、批評）、またスラヴ語圏の言語文化に関する研究・教育が行われている。今後、スラヴ諸地域の研究者との交流や学生の留学などを拡充し、国際レベルでのスラヴ語スラヴ文学研究に貢献する人材を育成することをめざす。

現在、学部学生3名、大学院修士課程院生5名、博士課程院生4名が在籍している。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2020年度に第35号を刊行した。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉学成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のスラヴ学、ロシア文学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、セルビアのベオグラード大学、クロアチアのザグレブ大学、国立ロシア人文大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

三谷恵子       スラヴ語学  
楯岡求美       ロシア演劇・芸術

#### (2) 助教の活動

平野恵美子

在職期間 2016年4月1日～2019年3月31日

研究領域 ロシア・欧州芸術学、舞踊研究

主要業績

(論文) 平野恵美子、「ロシア革命と日本におけるバレエの受容 ―亡命ロシア人がもたらしたもの―」『スラヴィスチカ』XXXIII/IV号、2019年、35-50頁

(講演) Emiko Hirano, *Marius Petipa's last choreography, "The Magic Mirror", and its music by Arseniy Koreshchenko*. The A.A. Bakhrushin State Central Theatre Museum. Russia, 8 Oct., 2019

Emiko Hirano, *The dialogue of arts: the perception of Western classical ballet in Japan*. St. Petersburg State Museum of Theatre and Art, Russia, Nov., 2018

越野剛

在職期間 2019年4月1日～現在

研究領域 ロシア・ソ連文学

主要業績

(著書) 共著、武田雅哉編、『ゆるのおっばい、ふくらむおっばい―乳房の図像と記憶』、分担執筆、担当章「乳牛と乳母―ロシアにおける代理のおっばい」、岩波書店、2018年

越野剛・高山陽子編『社会主義文化における紅い戦争のメモリースケープ―旧ソ連・東欧・中国・ベトナム』北海道大学出版会、2019年

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「アンドレイ・プラトノフ『フロー』における女性の表象について」

「トルストイ『戦争と平和』におけるボロジノの戦い」

2019年度

「『チェルカッシ』における海を中心とした自然描写の研究」

「ソ連アニメーションにおける「子ども個性」～『ヴィンニ・プーフ』を中心に～」

「『レモネード・ジョー或いは、ホースオペラ/Limonadouy Joe aneb Kanska opera』の作品分析」

「『罪と罰』のスヴィドリガイロフについて」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

銚川貴久 「現代ポーランド語における所有完了の用法について」(指導教員) 三谷恵子

2019年度

横江智哉 「〈余計者〉のユング心理学的分析の試み：トゥルゲーネフ『ルージン』を中心に」(指導教員) 楢岡求美

#### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲) (乙)

なし

2019年度

(甲)

金沢友緒 「近代ロシアと「啓蒙」の方法：O.П.コゾダヴレフの文筆活動を通して」

〈主査〉楢岡求美 〈副査〉三谷恵子・沼野充義・鳥山祐介・豊川浩一

奈倉有里 「アレクサンドル・ブローク批評と詩学——焼身から世界の火災へ——」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉三谷恵子・楢岡求美・桑野隆・中村唯史

(乙)

なし

## 23 現代文芸論

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励し、実際に2007年からそのような目的を持つ留学生が毎年のように大学院に入学している。また日本研究・比較文学研究に携わる外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア・中東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009年創刊、ほぼ年刊のペースで発行。2019年3月には第9号、2020年3月には第10号を発行した）。

非常勤講師による授業も、表象文化、言語理論、幻想文学、翻訳論など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。またオランダ語、アイマラ語、フィンランド語、イディッシュ語、リトアニア語、バスク語など、他では学ぶことが難しいマイナー言語の授業も積極的に開講していることが、現文の特徴になっている。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に6名程度、博士課程に3~4名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はこれまでの実績を見ると、ロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となって、大学院生相互の国際的な交流はきわめて盛んである。

#### (3) 研究室としての活動・国際交流活動

現代文芸論研究室が中心となってスタートさせた科研費研究「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」（基盤A、平成25年度~29年度）によって、旧ソ連・中東欧地域の文学・文化に新たな現代的視点からアプローチする共同研究プロジェクトに取り組んでいる。

研究室が主催・共催した主な学術・文学イベントを以下に挙げる。

##### 2018年度：

レオナ・トーカー教授特別講義「ソ連とナチスドイツの収容所の文学史に向けて——比較から関係へ」（日時：5月11日、共催：東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室、現代文芸論研究室）、朗読会・シンポジウム「中欧の現代文学」（日時：6月8日、解説：岡本真理、阿部賢一、関口時正、主催：駐日ハンガリー大使館、駐日スロバキア大使館、チェコセンター、ポーランド広報文化センター、現代文芸論研究室）、ハーバード大学世界文学研究所夏期集中セミナー東京大学セッション（会期：7月2日~7月26日、所長：David Damrosch教授、所長補佐：Delia Ungureanu博士（ブカレスト大学助教授）、シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」（日時：10月6日、第1部：阿部賢一・三谷研爾（大阪大学）・コメンテーター：楢岡求美（東京大学）、第2部：藤田恭子（東北大学）・小椋彩（東洋大学）・野町素己（北大スラブ・ユーラシア研究センター）・コメンテーター：三田順（北里大学）、第3部：井上暁子（熊本大学）・越野剛（北大スラブ・ユーラシア研究センター）・加藤有子（名古屋外国語大学）・コメンテーター：安達大輔（北大スラブ・ユーラシア研究センター）、主催：日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤B「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」（H27-H30、代表者：井上暁子）、共催：現代文芸論研究室、第3回現代文芸論研究報告会（日時：10月20日、報告者：山内瑛生、ナブロッカ・モニカ、邢垂南、特別報告：小澤裕之、高橋知之、多和田葉子氏特別講演：「多和田葉子自作を語る—『雪の練習生』から『地球にちりばめら

れて』まで」、主催：現代文芸論研究室）、レイン・ラウド博士（Tallinn University, Estonia）特別講義「行動における意味—統合的文化理論の試み」（日時：11月19日、共催：現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室、総合文化研究科比較文学比較文化研究室）、ユスティナ・ヴェロニカ・カシヤ博士（Nicolaus Copernicus University, Poland）特別講義「遠藤周作のエッセイと評論における悪の解釈学」（日時：12月17日、共催：現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室）、シンポジウム「現代ロシア小説を読む ドヴラートフ『かばん』（成文社）、シーシキン『手紙』（新潮社）、アフチェンコ『右ハンドル』（群像社）—翻訳者を迎えて」（日時：1月25日、パネリスト：ペトロフ=守屋愛（慶應義塾大学他講師）、奈倉有里（早稲田大学講師）、河尾基（JSN『ロシア通信』『ポストーク通信』編集長）、司会：沼野充義、共催：スラヴ語スラヴ文学研究室、現代文芸論研究室）、デンニツァ・ガブラコヴァ博士（Victoria University of Wellington）特別講義「名指し得ぬ列島—戦後日本文学・思想におけるポストコロニアルの傷口」（日時：1月29日、主催：現代文芸論研究室）、国際ワークショップ・講演「表象文化としてのドストエフスキー」（日時：2月16日、第1部国際ワークショップ：ステファノ・アローエ（ヴェローナ大学）、沼野充義、諫早勇一（名古屋外国語大学）、大平陽一（天理大学）、高橋知之、越野剛（北海道大学）、梅垣昌子（名古屋外国語大学）、野谷文昭（名古屋外国語大学）、林良児（名古屋外国語大学）、亀山郁夫（名古屋外国語大学）、第2部記念講演：番場俊（新潟大学）、ステファノ・アローエ、コメンテーター：望月哲男（中央学院大学）、主催：名古屋外国語大学（科研費：「カタストロフィの想像力：ドストエフスキー文学の現代的意味とその世界展開」）、共催：現代文芸論研究室、後援：日本ドストエフスキー協会）、シンポジウム「ポーランド文学の多様性 レム、シュルツ、フォーゲル、工藤幸雄」（日時：3月21日、講演：加藤有子、久山宏一（東京外国語大学）、小川信治（画家）、共催：名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター、現代文芸論研究室、後援：日本スラヴ学研究会、協力：多摩美術大学小泉俊己研究室）、大橋洋一教授東大退職記念特別講義「21世紀批評理論における4つのターン」（日時：3月31日）

#### 2019年度：

小澤裕之氏『理知の向こう—ダニエル・ハルムスの手法と詩学』出版記念特別講義「無軌条列車—ハウル発ハルムス行」（日時：6月14日、主催：現代文芸論研究室）、ミニシンポジウム「世界文学への誘い—若手研究者が語る未踏の沃野」（日時：6月17日、パネリスト：マヌエル・アスアヘアラモ、奥彩子、金子奈美、ベアタ・コヴァルチック、齋藤由美子、司会：沼野充義、主催：現代文芸論研究室）、ノラ・イクステナ氏『ソビエト・ミルク』邦訳刊行記念講演「ラトビア語で書く」（日時：10月4日、共催：現代文芸論研究室、駐日ラトビア共和国大使館）、第4回現代文芸論研究室報告会（日時：10月5日、報告者：土屋優、須藤輝彦、杉浦清人、特別報告：片山耕二郎（共立女子大学非常勤講師）、仁平ふくみ（京都産業大学）、特別講演：町屋良平「小説を書く体/小説を読む体」、主催：現代文芸論研究室）、高橋知之氏出版記念特別講義「永遠と私のあいだ—1840年代のロシアへ」（日時：10月18日、共催：現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室）、パヴェル・コジーネク氏講演会（チェコ科学アカデミー・チェコ文学研究所研究員）「ポップカルチャーのドアを開ける！—ビロード革命とチェコの文学シーンの変容」（日時：11月6日、主催：現代文芸論研究室）、2019年度国際交流基金賞受賞記念講演会エヴァ・パワシュルトコフスカ氏（ワルシャワ大学・東洋学部日本文学教授）「ポーランドと日本—友好関係の100年」（日時：11月8日、コメンテーター：稲葉千晴（名城大学都市情報学部教授）、柴理子（城西国際大学国際人文学部准教授）、原武史（放送大学教授）、司会：沼野充義、共催：国際交流基金、現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室）、尾崎真理子氏（読売新聞調査研究本部客員研究員、文芸評論家）特別講演「大江健三郎全小説を読む—全集解説を書いてみえてきたもの」（日時：12月2日、主催：現代文芸論研究室）、母袋夏生（翻訳家）特別講演「イスラエルとその地の文学のいま」（日時：12月10日、主催：現代文芸論研究室）、今福龍太（文化人類学者、東京外国語大学教授）特別ゲスト講義「『宮澤賢治—デクノボーの叢智』をめぐる（特に第8章「終わらない植民地（コロニー）」を中心に）」（日時：12月16日、主催：現代文芸論研究室）、小椋彩氏（東洋大学文学部助教）特別講義「ノーベル賞作家オルガ・トカルチュクの文学とポーランドの文化をめぐる」（日時：12月23日、コメンテーター：沼野充義、ベアタ・コヴァルチック（アダム・ミツキエヴィチ大学准教授・東京大学外国人特別研究員）、司会：阿部賢一、主催：現代文芸論研究室）、ヤクブ・チェシュカ氏（カレル大学人文学部准教授）特別講演「ミラン・クンデラの詩学の基礎をなすもの」（日時：1月11日、ディスカッサント：須藤輝彦（東京大学院）、司会：阿部賢一、主催：科研費・基盤研究（C）「ボヘミア文学史の記述に関する研究」（研究課題番号：19K00493、研究代表者：阿部賢一）、『ロシア文化事典』出版記念シンポジウム「謎のロシア、魅惑の文化—ロシア文化史への新しいアプローチ」（日時：2月15日、総合司会：沼野恭子（東京外国語大学）、開会の挨拶：池田嘉郎（東京大学）・沼野充義・望月哲男（中央学院大学）・佐藤日登美（丸善出版）、講演：沼野恭子（並びにゼミ生）、竹田円・沼野充義、鴻野わか菜（早稲田大学）、池田嘉郎・村田優樹・松本祐生子（東京大学）、亀山郁夫、望月哲男（中央学院大学）、共催：現代文芸論、スラヴ語スラヴ文学研究室、東京外国語大学沼野恭子研究室、協力：丸善出版（株）、JIC 国際親善交流センター&ジェーアイシー旅行センター（株）

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教授

教授：沼野充義（ロシア東欧文学、世界文学へのアプローチ）

教授：柳原孝敦（ラテンアメリカ文学・芸術、広域スペイン語圏文学）

准教授：阿部賢一（中東欧文学、比較文学）

### (2) 助教の活動

高橋知之

在職期間 2018年4月～2020年3月

研究領域 ロシア文学、比較文学

主要業績

（著書）

単著、高橋知之、『ロシア近代文学の青春——反省と直接性のあいだで』、東京大学出版会、2019.6

（論文）

高橋知之、「隠された偶然——「運命論者」を中心とするレールモントフ『現代の英雄』論、『れにくさ』、9、95-112頁、2019.3

（学会発表）

国内、高橋知之、「「驚くべき十年間」再考——1840年代のロシア文学における「反省」と「直接性」の問題」、日本ロシア文学会関東支部春季発表会、早稲田大学戸山キャンパス、2018.6

国際、高橋知之、「ディケンズの絵画的想像力とドストエフスキー」、国際ワークショップ「表象文化としてのドストエフスキー」、東京大学本郷キャンパス、2019.2

国際、高橋知之、「Преемственность темы «скуки»: сравнительное исследование творчества Лермонтова и Григорьева」（「退屈」の系譜——レールモントフとグリゴリエフの比較研究）、The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies、2019.6.30

国際、高橋知之、「Хидэо Кобаяси и Аполлон Григорьев: рождение «практической критики» в Японии и в России」（小林秀雄とアポロン・グリゴリエフ——日露における「実践的批評」の誕生）、The 17th International Dostoevsky Symposium、Boston University、2019.7.17

### (3) 外国人研究員・内地研究員

#### 外国人研究員

車金善ハルビン師範大学東語学院専任講師、研究題目「日中韓における村上春樹文学の受容についての研究」滞在費用の負担：中国国家留学基金管理委員会、2018年12月～2019年11月

#### 人文社会系研究科研究員

なし

#### 日本学術振興会特別研究員

高木佳奈（PD）、研究課題「ラテンアメリカ文学・美術における酒井和也の役割と日本文化紹介に関する研究」2018年4月～2021年3月

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「目取真俊「群蝶の木」論—語り得ぬ者の記憶と向き合う—」

「『幸福な王子』と『星の王子さま』の王子についての考察」

「文学における大地と自然—エドゥアール・グリッサン『レザルド川』と中上健次の諸作の比較研究」

「プロッポ『夢遊の人々』における象徴」

「文学における白痴」

「ミヒヤエル・ハネケ「ワノフラグメンツ」に関する考察」

「カレル・チャペックの思想と"R.U.R"論」

「ヴィルテールにおける「金儲け礼賛」と「ユダヤ批判」の存在について—なぜカンディードはユダヤ人を殺したのか—」

「マリオ・バルガス＝リョサ『マイタの物語』における語りの技術分析と〈語り手〉」

「村上春樹から見たフィッツジェラルド—なぜ村上が愛したのはヘミングウェイでなかったか」  
「江戸川乱歩論—「探偵」と「空想家」の狭間で—」

2019年度

「水村美苗『私小説 from left to right』における「私小説」の意義」  
『ペンギンの憂鬱』における動物・病・犯罪への表象」  
「リチャード・ブローティガン『西瓜糖の日々』における死とアレゴリー」  
「川端康成とヘミングウェイ—老いと性の問題」  
『「バートルビーとジーモン 拒否の戦略」"Bartolby and Simon The Strategy of Refusal"』  
「安部公房『砂の女』における性的問題について」  
「カズオ・イシグロ『日の名残り』論—ジョークに見る物語の二重性」  
「詩人と探偵 "Death of a Red Heroine"における Chen Cao の人物像について」  
「ジャン＝ジャック・ルソーの『ピグマリオン』とジョージ・バーナード・ショアの『ピグマリオン』におけるピグマリオン表象」  
「世界文学としてのカート・ヴォネガット 『猫のゆりかご』を例に」  
「忘れられた子ども時代—『小公女』における翻訳の変容と受容—」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

齋藤翔 「チェーホフ作品における動物—ダーウィニズムからディスコミュニケーションへ—」(指導教員) 沼野充義  
鈴木愛美 「クレオールの空間としての家—Absalom, Absalom! におけるカリブの流入と女性—」(指導教員) 柳原孝敦  
土屋優 「ミラン・クンデラと世界文学—チェコの作家ヴラヂスラフ・ヴァンチュラを通して—」(指導教員) 阿部賢一  
真島亮吉 「B.フラバル『あまりにも騒がしい孤独』とポストモダン」(指導教員) 阿部賢一  
崔笑容 「村上春樹文学における「自己治療」の物語—初期の短編作品を中心に—」(指導教員) 柳原孝敦

2019年度

佐山基己 「エドガー・アラン・ポー作品における数学的発想」(指導教員) 柳原孝敦  
藤井健太郎「カルロス・フエンテス初期作品における「コスモポリタンな欲望」」(指導教員) 柳原孝敦  
池島香輝 「「風景」の詩人—石牟礼道子と宮沢賢治—」(指導教員) 沼野充義  
安原瑛治 「アゴニズムのその先で—ニカノール・パラ中後期作品における作風の変化」(指導教員) 柳原孝敦  
HABJAN Nina「フランツ・カフカと安部公房の作品における「行為」」(指導教員) 阿部賢一

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

片山耕二郎「芸術家小説『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』の成立と性質」  
(主査) 沼野充義 (副査) 柳原孝敦・小田部胤久・大宮勘一郎・阿部賢一  
井上正子 「The Harlem Renaissance and the Circum-Caribbean World (ハーレム・ルネサンスと環カリブ世界)」  
(主査) 柳原孝敦 (副査) 沼野充義・大橋洋一・柴田元幸・新田啓子

(乙)

なし

2019年度

(甲)

今井亮一 「路地と世界—世界文学論から読む中上健次作品研究」  
(主査) 沼野充義 (副査) 柳原孝敦・阿部賢一・柴田元幸・中川成美  
仁平ふくみ「場所を書く実在する場所—記録された出来事とフアン・ルルフォの創作との関係の諸相」  
(主査) 柳原孝敦 (副査) 沼野充義・阿部賢一・野谷文昭・斎藤文子  
邵丹 「現代日本における外国文学の受容と機能 1970年代のアメリカ文学の翻訳に即して」  
(主査) 沼野充義 (副査) 柳原孝敦・阿部賢一・柴田元幸・野崎徹

(乙)

なし

## 2 4 西洋史学

### 1. 研究室活動の概要

西洋史学研究室は1887年に発足した史学科を母体とし、1919年に西洋史学科として独立、大学・大学院・学部の制度の改変を経て、現在の西洋史学専修課程・専門分野に至っている（両方をあわせて研究室と呼ぶ）。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2018年度には教授3名、准教授2名、助教1名、2019年度には教授3名、准教授2名、講師1名、助教1名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教員2名から、また学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2018年度、2019年度ともに4名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ定数25名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2018年度51名、2019年度49名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程3名程度、修士課程5名程度の入学者を迎えており、在籍者は2018年度43名、2019年度40名である。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、宗教史、さらに異文化交流やジェンダーの問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備を行う（海外の大学で学位を取得する場合も多い）。

学会活動への参加においても精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集に研究室として協力している。さらに各教員は、自ら国内外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、さまざまな研究者と連携して、国際会議や講演会を定期的に開催し、その成果を公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

高山 博	教授	西洋中世史
橋場 弦	教授	古代ギリシア史
勝田俊輔	教授	近代アイルランド史・近代ブリテン世界史
長井伸仁	准教授	フランス近現代史
池田嘉郎	准教授	近現代ロシア史

#### (2) 講師の活動

芦部 彰

在職期間 2019年4月1日～現在

研究領域 ドイツ近現代史

主要業績

(論文)

芦部彰、「戦後西ドイツにおけるエルンスト・マイの住宅建設」、『ゲシヒテ』、12号、71-87頁、2019.4

(解説)

芦部彰、〈新刊紹介〉高橋秀寿著『時間／空間の戦後ドイツ史—いかに「ひとつの国民」は形成されたのか』、『史学雑誌』、第128編第12号、1861-1862頁、2019.12



(学会発表)

国内、芦部彰、「1950年代東西ドイツにおける住宅団地構想—東ベルリン、フエンブール・コンペに注目して(パネル:冷戦期の住宅建設・都市開発—西ドイツとチェコスロヴァキア)」、社会経済史学会(第88回全国大会)、青山学院大学、2019.5.18

(他機関での講義等)

非常勤講師、埼玉大学、「史料学実習」、2019.10~2020.3

### (3) 助教の活動

芦部 彰

在職期間 2016年4月1日~2019年3月

研究領域 ドイツ近現代史

主要業績

(論文)

芦部彰、「現代ドイツ・スイス・ネーデルラント(2017年の歴史学界—回顧と展望—)」、『史学雑誌』、127編5号、380-387頁、2018.5

(学会発表)

国内、芦部彰、「戦後西ドイツにおけるエルンスト・マイの住宅建設」、第41回ドイツ現代史学会、大阪市立大学、2018.9.23

(総説・総合報告)

芦部彰、「ボン=クロイツベルク」、『ECHO』、34、28-31頁、2018.11

(他機関での講義等)

非常勤講師、立教大学、「世界史」、2018.4~2018.9

非常勤講師、立正大学、「西洋史特講」、2018.4~2018.9

非常勤講師、国際基督教大学、「20世紀世界史」、2018.9~2018.11

非常勤講師、横浜市立大学大学院、「欧米社会論特講」、2018.10~2019.3

八谷 舞

在職期間 2019年4月1日~2020年3月

研究領域 アイルランド近現代史

主要業績

(学会報告)

国外 “‘To us, books were the great joy in life’: Emotional expressions in female reading records at the turn-of-the-twentieth-century Ireland” at the conference “Carving out a Space for the History of Emotions” held at Belfield, University College of Dublin, 2020.1.18

### (4) 外国人研究員・内地研究員

森本 光(特任研究員、2019年度~)

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「ハプスブルク帝国のイスラーム教徒及び対イスラーム政策—20世紀初頭ウィーンにおけるモスク建設計画を中心に—」

「ルイ=ナポレオン(ナポレオン3世)と労働者住宅—『貧困の絶滅』と1867年パリ万国博覧会—」

「19世紀中葉の連合王国農業におけるハイ・ファームと「黄金時代」についての一考案—小麦の農業経済統計に注目して—」

「ジョージ六世即位前後における新聞の国王報道の変化について」

「20世紀オーストラリアにおけるアンザック神話を用いた「国民」の形成について」

「第二次大戦期のバビ・ヤールにおけるユダヤ人大量虐殺とその記憶について」

「近世神聖ローマ帝国における帝国クライス制度の運用—グルンバッハ事件への対応を例として—」

「20世紀初頭のイギリス自由党政権下における社会保障制度改革の意義—「救いがたい状況」への国家の対応」

「ヴィルマイ共和国とドイツ国家国民党—「共和化」論再考」

「トレードガード体制の歴史的意義—第一次世界大戦期イギリス—」  
「南アフリカ戦争の原因に関する一考察」  
「両大戦期イギリスにおける兵役拒否」  
「ヴィルヘルム2世期における中央党とカトリック—バイエルンの事例を中心に—」  
「ローマ帝国の皇帝礼拝—皇帝アウグストゥスと、平民の関係—」  
「『魔女への鉄槌』成立の背景に関する一考察」  
「海域世界としての環バルト海世界—デンマーク・スウェーデン・ロシアのバルト海政策の比較を中心に—」  
「スポーツ研究に関する歴史学と社会学の融合—ウィンチェスター校のパブリックスクール・マッチ脱退問題の位置付けの試み—」  
「明治維新期の工部省官備外国人においてスコットランド人技術士を重用した明治政府の思惑」

## 2019年度

「ジョン・ウェスレー 18世紀イングランド国教会における説教者としての特殊性」  
「19世紀イギリス海軍の技術転換—主に艦船に着目して—」  
「福祉国家と「怒れる若者たち」—オズボーンから見る福祉国家への「怒り」—」  
「ポーランド＝リトアニア共和国における立法制度改革 五月三日憲法を中心に」  
「エサレン研究所がなぜ「コーチング」の発展に寄与したか？」  
「第二帝政期におけるフランス銀行の独立性」  
「第三帝国兵士研究において社会心理学的知見がもたらす意義—『兵士というもの—ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理』を巡って—」  
「ポーア戦争期のイギリスの対ドイツ外交政策に関する一考察」  
「イングランドにおける協同組合設立にオウエン主義は不可欠であったか」  
「第2次世界大戦後の英国における南アジア系移民の政治参加」  
「アテナイにおける戦車競走が衰退した時期とオリュンピア祭の権威に関する考察」  
「ナチス・ドイツと1938/39年「難民危機」」  
「北アイルランド紛争と和解の考察—サンギンデール合意からベルファスト合意へ—」  
「17世紀末のイギリスに立ち現れた「プロジェクトの時代」とそれに連なる産業革命期の起業家の心性」  
「1890年独露再保障条約不更新にみるドイツ外交の変容と継承—ビスマルクから「新航路」へ—」  
「乾燥為替の「無因的金融資産」的側面」  
「多民族秩序としての「中欧」構想—ナショナリズムと反ナショナリズムの狭間で—」  
「18世紀フランスにおける同性愛概念—呼称とその変化を手掛かりに—」  
「コンスタンティノープルにおけるヴェネツィア人居留地—ラテン帝国下における統治と教会」  
「ヘファイステイア祭におけるメトイコイについて」  
「バレエ・リュスとロシアの関係に関する一考察—『眠れぬ森の美女』上演分析を中心に—」  
「1930年代ソ連におけるコムソモールの転換」  
「ロマノフ朝初期における正統性の演出と僭称者」  
「解放期から第四共和政初期にかけてのフランスにおける官僚の粛清について」  
「アメリカ建国期の工業化に関する一考察—アレクサンダー・ハミルトンによる the "S.U.M."計画とジョン・ニコルソンによる工場経営を中心に—」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

### 2018年度

勝又勇登 「第一次ロシア革命期フィンランドにおける「老フィン人党」〈指導教員〉池田嘉郎  
沼大地 「10～12世紀ビザンツ帝国の歴史記述におけるロマノス1世の位置づけ—皇帝序列を中心に—」〈指導教員〉高山博  
小川潤 「田園地帯からみる帝政前期ローマの属州ガリア統治—ローヌ＝アルプ地域のウィクス・バグスの検討—」〈指導教員〉橋場弦  
加藤聡一郎「アギスとクレオメネスの改革—スパルタ社会の実像と改革の本質—」〈指導教員〉橋場弦  
望月滯 「近世ドイツ都市における法学識者の役割—16世紀ケルン市を事例に—」〈指導教員〉勝田俊輔

### 2019年度

上遠野翔 「教会の問題としての「清貧」—教皇ヨハネス22世の決定をめぐる（1322/23年）—」〈指導教員〉高山博

久保田俊樹「シェレスト期ウクライナ政治の再評価 経済的側面からの検討」(指導教員)池田嘉郎  
小林拓実「第三共和政初期マルセイユにおける警察と都市秩序:1881年6月の「マルセイユの晩禱」事件を中心に」(指導教員)長井伸仁  
千原大輝「20世紀初頭のロシアにおけるマスメディアと社会 『ジャーナル・コペイカ』を中心に」(指導教員)池田嘉郎  
須田智大「復古王政期フランスにおける反教権主義の様相—1825年の瀆聖法と聖別式に対する反応を中心に—」(指導教員)長井伸仁  
山口陽子「フランスのツーリズム団体とドイツ第二帝政期のアルザス:1890年~1914年を中心に」(指導教員)長井伸仁

**(3) 博士論文執筆者・題目一覧**

2018年度

(甲)

藤澤潤 「ソ連のコメコン政策と冷戦—資源・エネルギー問題を中心に」  
(主査)池田嘉郎(副査)勝田俊輔・長井伸仁・吉澤誠一郎・守川知子

(乙)

なし

2019年度

(甲)

内田康太「共和政末期ローマにおける立法過程の研究—法案の帰趨と元老院の意向をめぐって—」  
(主査)橋場弦(副査)高山博・勝田俊輔・葛西康徳・田中創

(乙)

なし

## 25 社会学

### 1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は、社会学が「世態学」という名で初めて講じられた1878（明治11）年に遡る。そして、1886（明治19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、1893（明治26）年帝国大学に講座制が導入されたとき、文科大学に社会学講座が設置され、外山正一や建部逯吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正8）年には社会学科となり、翌1920（大正9）年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

戦後の日本の社会学を牽引したのは尾高邦雄や福武直らで、1961（昭和36）年には3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に心理学とともに協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1984年には4講座となった。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成した。その後、社会情報学は情報学環として独立し、社会学研究室は学部では行動文化学科の社会学専修課程、大学院では社会文化研究専攻の社会学専門分野を担当して今日に至っている。

2019年度の教員数は、教授4名、准教授3名、助教1名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、都市、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、階層、社会意識、文化、計画、福祉、科学、技術、環境などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は約50名。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的な基礎訓練とともに領域横断的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していたが、最近では金融やメーカーに就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約1割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。修士課程入学者はこれまでほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員になったり研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者も定着してきた。院生総数は40名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては、日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行に大きく貢献している。また、ソウル大学社会学部と2年に1回国際ワークショップを重ねてきており、その都度英文の会議録を発行している。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。大学院生も、若手社会学者向けの雑誌『ソニオロゴス』を毎年編集・発行している。

ポスドクや外国人研究員として、フルブライト財団や日本学術振興会の選考をへて本研究室で一定期間を研究滞在する場合も増えてきている（これまで、アメリカからの来訪者が比較的多い）。本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは韓国からの留学生であり、研究生として1～2年過ごしたあと大学院にはいり、社会学の博士号をとって本国に戻って活躍している人がすでに数名でてきている。ついで多いのは中国からの留学生である。このほか、他のアジア諸国や欧米からの留学生も在籍している。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

武川正吾

専門分野 社会政策

在職期間 1993年4月～2019年3月

佐藤健二

専門分野 歴史社会学

在職期間 1994年10月～現在

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学

在職期間 2006年4月～現在

赤川学

専門分野 社会問題の社会学

在職期間 2006年4月～現在

出口剛司

専門分野 理論社会学・社会学史研究

在職期間 2011年4月～現在

祐成保志

専門分野 コミュニティの社会学

在職期間 2012年4月～現在

井口高志

専門分野 医療社会学 ケアの社会学 認知症研究

在職期間 2018年10月～現在

### (2) 助教の活動

武岡暢

在職期間 2017年4月～2019年3月

研究領域 都市社会学、職業

主要業績

(受賞)

国内、武岡暢、日本都市社会学会若手奨励賞（著書の部）、日本都市社会学会、2019.9.1

井口尚樹

在職期間 2019年4月～現在

研究領域 労働社会学、評価の社会学

主要業績

(論文)

井口尚樹、「顔の見える関係」づくりの難しさ—地域包括ケア開始時の課題—、『RISTEX「都市型コミュニティ（川崎市）における援助希求の多様性に対応した介入・支援に関する調査」Working Paper』、2018.11

井口尚樹、「個人的ネットワークをきっかけとした官民連携—川崎市の2事例の検討—」、『RISTEX「都市型コミュニティ（川崎市）における援助希求の多様性に対応した介入・支援に関する調査」Working Paper』、2018.11

井口尚樹、「否定的評価と自己認識——アメリカ社会学における研究と課題」、『社会学史研究』、41、23-39頁、2019.6

(学会発表)

国内、井口尚樹、「否定的評価と自己に関する研究のこれまでと今後——内面化から抵抗へ、そして抵抗の困難へ」、2018年度日本社会学史学会大会、山梨大学、2018.6.24

国際、Naoki Iguchi、「Evaluation as a Two-Way Process」、XIX World Congress of Sociology, International Sociological Association、Toronto、2018.7

(他機関での講義等)

非常勤講師、茨城大学、「データ分析法」、2018.4～

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

- 「保育の規制緩和と質について」
- 「転居を伴う転勤がライフイベントに与える影響」
- 「日本の労働市場における外国人留学生の位置づけ」
- 「ある起業家の肖像 江副浩正と戦後日本」
- 「インターネットの「炎上」現象から見る現代の日本社会」
- 「女性の性意識の変化について」
- 「教養の歴史的変遷からみる現代の教養のあり方」
- 「リスク社会と東日本大震災」
- 「VR がもたらす社会的現実の可能性」
- 「現代日本における地方移住の研究—「ライフスタイル移住」の批判的検討」
- 「在外日本人学校の国際性 在日外国人学校との比較を通じて」
- 「"都市型"道の駅への考察」
- 「ソーシャルメディアの発達による観光経験の変容」
- 「日本社会におけるスクールカーストの認識と捉え方」
- 「現代社会における人生経験の流動性」
- 「U ターン就職の実態とその問題—岡山県出身者に着目して—」
- 「国民の移民政策」
- 「ソーシャルメディアと熟議民主主義」
- 「セカイ系作家と東日本大震災後の思想 ～2016年の大ヒット映画を巡って～」
- 「「見世物小屋」を求める時代」
- 「労働における男女平等と母性保護—マタニティ・ハラスメントに着目して—」
- 「東京の地下街における「都市コモンズ」とその可能性」
- 「高学歴女性のキャリア形成に関する研究」
- 「なぜ「ネットの墓」は受け入れられたのか—墓の機能に着目して—」
- 「幸福の社会学的考察」
- 「自動車にまつわるコストおよびリスクは今後いかに軽減されるか」
- 「観光産業を通じた海外からの評価による日本文化の再発見」
- 「相互扶助を通じた農山村での地域作り」
- 「現代における自己の形成—シンボリック相互作用論による考察」
- 「日本における「反知性主義」論争の考察」
- 「不平等説の機能」
- 「日本の薬物施策の策定・維持に関する言説分析—国会議事録、マスメディア、教科書を手掛かりに—」
- 「軽度な交通犯罪の要因・要因間の作用—自転車の「危険行為」に着目した場合—」
- 「アメリカ映画の社会学—ハリウッドにおける多様性の現状と課題」
- 「ゲーム依存症に関する医療社会的考察」
- 「在日中国人女性のキャリア形成に関する研究」
- 「東大地方出身女子の成功志向についての研究」
- 「日本におけるオリエンテーリングの成立—体力つくりとスポーツの狭間で—」
- 「「立ちすくみ」からはじまる選択—ギデンス理論の解釈を通じて—」
- 「市民が求める公立美術館を実現するための計画・運営の在り方—市民参加の観点から—」
- 「バブル期以降の下町における再開発の実態とそのコミュニティへの影響—白金一丁目東地区市街地再開発事業を事例として—」
- 「作品とキャラクターが形成するコミュニケーション—銀魂コスプレイヤーへのインタビュー事例から—」
- 「戦後日本型福祉国家資本主義の限界と再編の方向性—「貯蓄から投資へ」言説分析を通じて—」

「羞恥感情のポリティクス ギデンス現代社会論の転回」

2019 年度

- 「現代ポピュリズムの二様相—「N 国」の躍進を事例に—
- 「アルコール依存症からの回復—断酒会の研究を通じて—
- 「セクシュアリティをめぐる自己の受容・承認・構築—バイセクシュアル／パンセクシュアルの語りから—
- 「日本における女性起業家の現状」
- 「高学歴同類婚に至るメカニズムに関する実証研究」
- 「大学生の経験とそれを能力主義で語ることにに関する研究」
- 「声優のアイドル化に見る他者像 ～雨宮天はアイドルか声優か～
- 「大学・大学院留学生の生活環境の確立」
- 「生まれ満たされるナルチシズム—ジャーニーズというシステムに組み込まれるファンたち—
- 「SNS 世代の承認行動 ～Twitter の利用形態を手がかりに～
- 「セクシュアルマイノリティの「都市コミュニティ」の形成過程」
- 「育児政策の二面性」
- 「コスモポリタン化するアニメ—放送枠「+Ultra」という転換点—
- 「情報化社会における下位文化コミュニティの形成」
- 「孤食の社会学」
- 「平成の労働政策に見る転職の位置付けの変容」
- 「教育問題に関する学校と警察力に対する認識の変容」
- 「いじめの精神分析的アプローチ」
- 「コミュニケーションから見る華僑若年世代のパーソナル民族関係—在日中国人大学生・大学院生へのインタビュー事例を通じて—
- 「日本における SNS による対人関係の変化について」
- 「「やらせ」とは何か」
- 「複合メディア環境における匿名掲示板の立ち位置と世論形成の可能性」
- 「「フル・インクルージョン」に一致した教育実践と教育的かわり」
- 「人口減少時代の「公」
- 「「地方版総合戦略」にみる地方創生政策の実情」
- 「「広場」という都市空間をめぐるイデオロギーとテクノロジー」
- 「男性稼ぎ主モデルが日本のフェミニズムに及ぼした影響について」
- 「コミュニティとしてのオンラインサロン」
- 「岡崎京子と 1980 年代の東京」
- 「シェアリングエコノミーにおける相互評価システムがもたらす新たな「信頼」に関する検討」
- 「J-POP 衰退論と社会的役割」
- 「現代日本社会における大学進学費用負担のレトリック」
- 「アベノミクス下における政府の発表と国民の実感と差異」
- 「デュルケムにおける社会的認識の問題」
- 「社会関係資本としての祭礼—中央区佃・住吉講を例に—
- 「宮城県大崎市池月地区における旧小学校を基盤とする地域づくりの可能性と課題について」
- 「埼玉県の観光業の現状とその課題」
- 「大学進学の地域間格差に関する研究—東京都への大学進学者に着目して—
- 「モテる男女—テレビドラマから読み解く理想の異性像—
- 「「母になる」という言説実践が個人から離脱する時 ～子ども食堂の実態と現場の声から～
- 「地域の特徴としての「多様性」概念を再定義する—新宿区・大久保地区の空間と集団における境界の発見—
- 「「オペラの未来」のための日本における中小規模オペラ上演団体の可能性と実態」
- 「不登校支援の現状と課題—フリースクール支援に着目して—
- 「キャリア教育からみる若者の職業観・勤労観の希薄化に関する再検討」
- 「都市伝説の多様な広がりとその背景」
- 「京都の置石と「語り」による実践—「いけず石」になるまで—
- 「重度障害者介助におけるパターンリズムの解消しづらさ」

「消費社会と広告——ポードリヤールとリッツアの理論から見た現代消費文化の変遷」

「電子書籍の時代における読書実践」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

青井優佳 「ブライアン・ターナーの「傷つきやすさ」の社会学——身体をエンボディメントとして捉えることについて」〈指導教員〉出口剛司

服部恵典 「日本の女性向けアダルトビデオを視聴するファン研究——性的主体化とジェンダー化の観点から——」〈指導教員〉赤川学

佐藤剛生 「システムとしての社会か、言語としての社会か——ハーバーマース＝ルーマン論争における「社会Gesellschaft」の記述問題をめぐって」〈指導教員〉出口剛司

武内今日子 「カテゴリーが担う性別違和経験の理解可能性——「X ジェンダー」をめぐる語りから——」〈指導教員〉赤川学

中野航綺 「社会福祉教育における〈政策過程への参加〉の位置付け」〈指導教員〉武川正吾

前田一步 「明治後期・東京の都市公園—管理と抵抗のあわい」〈指導教員〉赤川学

尹博文 「日本における中国人エスニック集団の形成——埼玉県・西川口ニューチャイナタウンと川口芝園団地に焦点を当てて——」〈指導教員〉出口剛司

金兌恩 「高齢期の家事分担からみるジェンダー格差の実証研究」〈指導教員〉白波瀬佐和子

FREEMAN James Franciscus 「ローカルとグローバルの交錯——津波被災地域における支援組織とガバナンスの多様性——陸前高田市の市行政と市民社会組織および「TOMODACHI イニシアチブ」を事例に——」〈指導教員〉赤川学

2019年度

市川結城 「前期ホルクハイマーにおける実践の問題——批判理論の源流を求めて」〈指導教員〉出口剛司

呉先珍 「Z. バウマンにおけるレヴィナス倫理の社会的変奏——個人と社会の間隔を空ける道徳的空間の発見——」〈指導教員〉出口剛司

金希相 「ソーシャル・キャピタルとアーバンイズムが異質性の受容に及ぼす影響に関する研究——川崎市を事例に——」〈指導教員〉祐成保志

玉城南 「〈クリスマス〉の誕生——「12月25日」の文化社会学」〈指導教員〉赤川学

渡辺泰正 「サーチ理論からみる結婚の成功に関する実証研究」〈指導教員〉白波瀬佐和子

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

是川夕 「現代日本における移民の階層的地位に関する研究」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉赤川学・祐成保志・盛山和夫・竹ノ下弘久

井口尚樹 「大卒就職における応募者側の選択——企業との相互行為に着目して」

〈主査〉出口剛司 〈副査〉武川正吾・赤川学・祐成保志・佐藤恵

河村賢 「「対テロ戦争」に関する社会学的研究——脅威認識・対テロ政策・国際法の相互反応性——」

〈主査〉松本三和夫 〈副査〉石田淳・赤川学・出口剛司・祐成保志

麦山亮太 「職業経歴からみる階層生成過程に関する実証研究——転職経験に着目して——」

〈主査〉白波瀬佐和子 〈副査〉出口剛司・石田浩・藤原翔・渡邊勉

(乙)

遠藤知巳 「情念・感情・顔：「コミュニケーション」のメタヒストリー」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・祐成保志・内田隆三・佐藤俊樹

佐野嘉秀 「人事管理の日英比較：百貨店の事例研究」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・出口剛司・稲上毅・佐藤博樹

2019年度

(甲)

嶋田吉朗 「結社を通じた経営者層の市民的参加に関する実証研究」

〈主査〉白波瀬佐和子 〈副査〉赤川学・井口高志・町村敬志・玉野和志

高舂賢 「アルフレート・シュッツの科学論——社会科学認識論における生と認識の問題——」

〈主査〉出口剛司 〈副査〉浜日出夫・榊原哲也・赤川学・井口高志



清水亮 「戦争をめぐる記憶の「場」の社会学的研究——戦後日本社会における「予科練」に焦点を当てて」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉赤川学・祐成保志・西村明・野上元

渡邊隼 「戦後日本における共同体の構想と現実——「コミュニティ」をめぐる言説の形成と展開」

〈主査〉赤川学 〈副査〉佐藤健二・祐成保志・玉野和志・武川正吾

李彩雲 「韓国における社会的経済の受容と展開——経済的連帯の実践と社会変革——」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・祐成保志・金成垣・大沢真理

(乙)

なし

## 26 社会心理学

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の規定因を実証的に研究する経験科学であり、社会的状況における個人の行動や認知、集団・組織行動、文化と心理の関係など、幅広い研究テーマを扱う。

当社会心理学研究室は、1974年4月に創設（同年に文学部の専修課程、1976年4月に大学院社会科学専攻の専攻として設置）された比較的新しい研究室である。現在は、社会文化研究専攻の社会心理学専門分野として、教授3名、専任講師1名、助教1名、特任助教1名で運営されている。それぞれの教員が個別にラボを運営しつつ、協力しあつて学部生・大学院生の教育に従事している。

各々のラボでは、一方で人の神経・生理基盤にまで分け入り、他方で社会構造や文化へと視野を広げて、旧来の社会心理学を超えた人間知の構築を目指している。いずれのラボにおいても、各教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションによる国際的・学際的研究が多数行われていることが特徴的である。教員は共同研究者とともに、さまざまな学問領域の学会においてシンポジウムやワークショップを主催している。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究に関する詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ (<http://www.utokyo-socpsy.com/>) およびリンク先の各教員ラボのホームページに公開されている。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

所属の大学院生は、指導教員主体の研究に参加するだけでなく、自らを主研究者とする研究活動を積極的に行っており、教員はそれをさまざまな形で支援している。大学院生の研究成果は、指導教員ごとのリサーチ・ミーティングのみならず、定期的で開催される社会心理学研究室全体のリサーチ・ミーティングでも議論され、さらに、国内外の学会の年次大会での発表や、専門学術誌や学術書等への掲載というかたちで公表されている。大学院生の多くは国際的に活動しており、海外の学会において英語で口頭発表を行ったり、国際学術誌に英語論文を投稿したりしている。

#### (3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

当研究室が組織として学会運営や研究誌発行の母体となることはないが、各教員は国内外の学会活動を盛んに行っている。具体的には、国内外の学術雑誌の編集長・編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、心理学、社会心理学および関連する諸領域の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミクス学会、科学哲学会、科学基礎論学会、応用哲学会、人間行動進化学会などの役職者（会長・常任理事・理事等）として、学会運営にも大きな貢献をしている。また教授2名は、日本学術会議（第一部）の会員、連携会員を務めている。

#### (4) 国際交流の状況

上述の通り、各教員が種々の国際共同研究プロジェクトに参加しており、複数の学問領域にまたがる国際交流も盛んである。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

亀田達也 教授

在職期間 2014年10月～現在

専門分野 社会心理学、実験社会科学

唐沢かおり 教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

村本由紀子 教授

在職期間 2011年10月～現在

専門分野 社会心理学

#### (2) 講師の活動

白岩祐子

在職期間 2016年4月～現在

専門分野 社会心理学

主要業績

(著書)

共著、白岩祐子、『公認心理師の基礎と実践 (第11巻) 社会・集団・家族心理学』、2018.11

単著、白岩祐子、『「理性」への希求：裁判員としての市民の実像』、2019.2

(論文)

白岩祐子・唐沢かおり、「死因究明における死亡時画像診断(Ai)の意義—司法解剖を経験した交通死遺族との面接にもとづく検討」、『人間環境学研究』、2018.7

白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり、「犯罪被害者遺族による制度評価—被害者参加制度・意見陳述制度に着目して」、『犯罪心理学研究』、2018.9

齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり、「大学生における司法参加意欲の規定因—要因関連モデルを用いた検討」、『実験社会心理学研究』、2018.9

白岩祐子・齋藤真由・唐沢かおり、「司法解剖の告知による死者の非人間化：心の知覚理論にもとづく検討」、『死生学・応用倫理研究』、2019.3

白岩祐子、「関係性がない／ある事件の遺族はどんな処遇を受けるのか—面識と罪種(殺人・致死／交通)が警察官の遺族対応におよぼす効果の検討」、『被害者学研究』、2019.7

白岩祐子・堀江宗正、「日本人の死後観：その類型と性差・年代差の検討」、『死生学・応用倫理研究』、2020.3

西菜々子・白岩祐子、「死者は美化されるのか：親密な他者の死の想像が性格評価に及ぼす影響」、『死生学・応用倫理研究』、2020.3

(書評)

ハロルド・ウィンター、『やりすぎの経済学：中毒・不摂生と社会政策』、『週間書評誌図書新聞』、2020

(学会発表)

国内、白岩祐子、「被害者・加害者の関係性が刑事司法におよぼす影響—遺族調査にもとづいて」、日本被害者学会第29回大会シンポジウム、2018.6

国内、森芳竜太・白岩祐子・唐沢かおり、「炎上加担者の属性の検討—“広めること”に着目して」、日本社会心理学会第59回大会、2018.8

国内、荒川歩・白岩祐子、「裁判を起こす人は攻撃的な変人？—裁判に関わる人に対するステレオタイプの検討」、日本パーソナリティ心理学会第27回大会、2018.8

国内、白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり、「形見における両個性—死別の受容との関係から」、日本グループ・ダイナミクス学会第65回大会、2018.9

国内、白岩祐子・松島公望、「日本人が有する素朴な宗教性を考える」、日本心理学会第82回大会、2018.9

国内、荒川歩・白岩祐子、「有罪・取調べへの言及が犯罪を否認している人物の印象に与える影響」、法と心理学会第19回大会、2018.10

国内、白岩祐子・唐沢かおり、「司法解剖という二次被害—遺族からみた死亡時画像診断(Ai)の意義」、日本犯罪心理学会第56回大会、2018.12

国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., 「Who "volunteers"? The effect of justice sensitivity in a volunteer's dilemma at a university dorm」、The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Science、2019.3

国内、白岩祐子、「日本における犯罪被害者法制の策定経緯と意義」、第143回関西公共政策研究会、京都大学、2019.3

国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., 「"Take one for the team!" The positive and negative effects of justice sensitivity in a volunteer's dilemma in workplace scenarios」、The Asian Association of Social Psychology、2019.7

国内、白岩祐子・唐沢かおり、「加害者は“反省”しているのか、どう“反省”しているのか」、日本犯罪心理学会第57回大会、2019.8

国内、白岩祐子・堀江宗正・唐沢かおり、「日本人の死後観：死後生はどのように信じられているか」、日本社会心理学会第60回大会、2019.11

(研究報告書)

警察庁犯罪被害者等施策担当参事官室、「平成29年度犯罪被害類型別調査 調査結果報告書」、2018.3

(会議主催 (チェア他))

国内、「行動政策学研究会」、主催、2018.12~2020.2

(総説・総合報告)

白岩祐子、「犯罪被害者遺族と死因究明——なぜ Ai が必要なのか」、『Rad Fan』、2019.2

(マスコミ)

「原著論文のご紹介」、2018.9

「性犯罪被害者 増える裁判参加 「知りたい」 思い満たされる」、2019.1.13

「考える広場：「裁判員」 制度 10 年」、2019.5.11

(受賞)

国内、白岩祐子、日本社会心理学会・出版特別賞、『「理性」への希求：裁判員としての市民の実像』、日本社会心理学会、2019.11.9

(翻訳)

監訳・共訳、E. Shafir (Ed.)、"The Behavioral Foundations of Public Policy"、白岩祐子・荒川歩 (監訳)、『行動政策学ハンドブック：応用行動科学による公共政策のデザイン』、2019.9

(共同研究・受託研究)

共同研究、白岩祐子・唐沢かおり、大阪矯正管区 (加古川刑務所)、「刑務所職員の職務意識調査」、2020~ (研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、研究成果公開促進費、白岩祐子、研究代表者、「「理性」への希求」、2018~2019

(他機関での講義等)

非常勤講師、早稲田大学理工学術院、「変革期の社会と心理」、2018~

東京大学駒場・学術フロンティア講義、「心に挑む：東大の心理学」、2018

非常勤講師、武蔵野大学、「人間の心理を探る」、2019~

非常勤講師、武蔵野美術大学造形学部、「社会心理学の理論と実践」、2019~

非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「司法と犯罪政策の心理学」、2020~

非常勤講師、武蔵野美術大学造形学部、「応用心理学」、2020~

(学会)

国内、東京大学死生学・応用倫理センター、運営委員、2019.4~

国内、日本心理学会、認定心理士資格認定委員会 委員、2019.11~

## (2) 助教の活動

橋本剛明

在職期間 2017年4月~現在

専門分野 社会心理学

主要業績

(著書)

共著、S. Stich, M. Mizumoto, & E. McCready (Eds.), 『Epistemology for the Rest of the World』、Oxford University Press、2018.7

共著、戸田山和久・唐沢かおり (編)、『〈概念工学〉宣言！—哲学×心理学による知のエンジニアリング—』、名古屋大学出版会、2019.3

(論文)

Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Impact of consumer power on consumers' reactions to corporate transgression」、『PLoS ONE』、13(5)、e0196819 頁、2018.5

Cova, F., Machery, E., Stich, S., Rose, D., Olivola, C. Y., Alai, M., Angelucci, A., Berniūnas, R., Buchtel, E. E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I.-R., Cohnitz, D., Dranseika, V., Lagos, Á. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Ormelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas Lopez, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Vázquez del Mercado, A., Volpe, G., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., & Zhu, J., 「De Pulchritudine non est Disputandum? A cross-cultural investigation of the alleged intersubjective validity of aesthetic judgment」、『Mind & Language』、1-22 頁、2018.8

- Hashimoto, T., Karasawa, K., Hirayama, K., Wada, M., & Hosaka, H., 「Community Proactivity in Disaster Preparation: Research Based on Two Communities in Japan」、『Journal of Disaster Research』、13(4)、755-766 頁、2018.8
- Tanibe, T., Hashimoto, T., Tomabechi, T., Masamoto, T., & Karasawa, K., 「Attributing mind to groups and their members on two dimensions」、『Frontiers in Psychology』、10、840 頁、2019.4
- Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「The positive and negative effects of justice sensitivity and justice-related emotions in the volunteer's dilemma」、『Personality and Individual Differences』、151、109501 頁、2019.7
- 福本都・橋本剛明・唐沢かおり、「争いの被害者のパーソナリティと赦し—視点取得の効果に着目して—」、『人間環境学研究』、17(1)、17-24 頁、2019.8
- Hannikainen, I. R., Machery, E., Rose, D., Stich, S., Olivola, C. Y., Sousa, P., Cova, F., Buchtel, E. E., Alai, M., Angelucci, A., Berniūnas, R., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I.-R., Cohnitz, D., Dranseika, V., Efraña Lagos, Á., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Omelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas López, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Vázquez del Mercado, A., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., & Zhu, J., 「For whom does determinism undermine moral responsibility? Surveying the conditions for free will across cultures」、『Frontiers in Psychology』、10、2428 頁、2019.11
- (学会発表)
- 国内、福本都・橋本剛明・唐沢かおり、「争いの被害者のパーソナリティと赦し：視点取得の効果に着目して」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.28
- 国内、橋本剛明、「心」の概念工学」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.28
- 国内、森芳竜太・橋本剛明・唐沢かおり、「『制裁への不十分感』が第三者の制裁行動に及ぼす影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第 65 回大会、神戸大学、2018.9.9
- 国内、谷辺哲史・橋本剛明・苫米地飛・正本拓・唐沢かおり、「集団の実体性が集団への心の帰属に与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第 65 回大会、神戸大学、2018.9.9
- 国際、Tham, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Egoistic motives of concerning injustice for others: Justice sensitivity and self-consciousness」、2019 Society for Personality and Social Psychology Convention、ポートランド、2019.2.7
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Effects of agency on morally instrumental harm: A mouse-tracking investigation」、2019 Society for Personality and Social Psychology Convention、ポートランド、2019.2.9
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「General/personal Just World beliefs as determinants of attitudes toward victim of perpetration」、International Convention of Psychological Science 2019、パリ、2019.3.7
- 国内、沼田崇志・朝康博・北垣友博・橋本剛明・唐沢かおり、「ユーザの感情の種類と原因を考慮した対話エージェント応答モデルの開発」、インタラクション 2019、一橋大学、2019.3.8
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「ボランティアのジレンマにおける公正感受性の正の影響と負の影響—「誰かがやらなければいけない」状況での行動意思の個人差—」、日本社会心理学会第 60 回大会、立正大学、2019.11.10
- 国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「How people evaluate volunteers and shirkers in the volunteer's dilemma? The effect of perceived cost of volunteering」、2020 Society for Personality and Social Psychology Convention、2020.2.28
- (翻訳)
- 個人訳、Shafir, E. (Ed.), "The Behavioral Foundations of Public Policy"、橋本剛明、『行動政策学ハンドブック：応用行動科学による公共政策のデザイン』、2019.9
- (研究テーマ)
- 文部科学省科学研究費補助金、若手研究、橋本剛明、研究代表者、「被害者のエージェンシー認知に基づく被害者理解フレームの検討」、2018～
- (他機関での講義等)
- 非常勤講師、法政大学 グローバル教養学部、「Social Psychology I, Social Psychology II」、2018.4～2019.3
- 非常勤講師、国際基督教大学、「Psychological Measurement and Evaluation」、2018.9～2019.11
- 非常勤講師、東京未来大学 こども心理学部、「心理統計法 II」、2018.11
- (学会)
- 国内、日本心理学会、認定心理士資格認定委員会 委員、2016.11～2019.10

国内、日本グループ・ダイナミックス、理事（関東区）、2019.4～

小倉有紀子

在職期間 2018年4月～2020年3月

専門分野 神経行動学

主要業績

(論文)

Ogura, Y., Amita, H., & Matsushima, T.、「Ecological validity of impulsive choice: Consequences of profitability-based short-sighted evaluation in the producer-scrounger resource competition」、『Frontiers in Applied Mathematics and Statistics』、4(49)、1-11頁、2018.10

Matsushima, T., Amita, H., & Ogura, Y.、「Complex social ecology needs complex machineries of foraging」、『Behavioral and Brain Sciences』、42:、e45頁、2019.4

Ogura, Y., Masamoto, T., & Kameda, T.、「Mere presence of co-eater automatically shifts foraging tactics toward “Fast and Easy” food in humans」、『Royal Society Open Science』、7、2020.3

(学会発表)

国内、Yukiko Ogura, Hidetoshi Amita and Toshiya Matsushima. When the impulsive choice is adaptive: analytical and computational investigation of the effect of profitability-based short-sighted evaluation and resource competition. 第40回日本比較生理生化学会、P1-46、神戸、2018.11.23

国内、Yukiko Ogura, Hidetoshi Amita and Toshiya Matsushima. When impulsive choice is adaptive: analytical and computational investigation of competitive foraging. 脳と心のメカニズム 第19回冬のワークショップ、No.2、ルスツ、2019.1.9

国際、Yukiko Ogura, Taku Masamoto and Tatsuya Kameda. Mere presence of co-forager automatically shifts human foraging tactics toward “fast and easy” food. 49th Annual Meeting of Society for Neuroscience, シカゴ、2019.10

国内、Yukiko Ogura, Taku Masamoto and Tatsuya Kameda. Mere presence of co-forager automatically shifts human foraging tactics toward “smaller foods more frequently”. 第41回日本比較生理生化学会、P2-23、東京、2019.11.30

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、若手研究、小倉有紀子、研究代表者、「『ただ乗り』の神経行動学的検討」、2018.4～

金恵璘

在職期間 2019年8月～現在

専門分野 社会心理学、実験社会科学

主要業績

(論文)

Kim, H., Toyokawa, W., & Kameda, T.、「How do we decide when (not) to free-ride? Risk tolerance predicts behavioral plasticity in cooperation」、『Evolution and Human Behavior』、40(1)、55-64頁、2019.1

(学会発表)

国内、金恵璘・亀田達也、「罰則システムは協力行動の Crowding-out 現象をもたらす」、日本社会心理学会第60回大会、立教大学、2019.11.10

国内、金恵璘・亀田達也、「罰システムは協力行動の Crowding-out 現象をもたらす：公共財供給実験による検討」、日本人間行動進化学会第12回大会、明治学院大学、2019.12.7

国際、Kim, H., Inukai, K., Naito, A.,「Panchanathan, K., & Kameda, T. Monetary Punishment Undermines Intrinsic Motivation for Cooperation: Crowding Out in Public Goods Game Experiment」、NTU-UT Joint Research Workshop : Experimental Social Sciences, The University of Tokyo (Japan)、2019.12.22

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2018年度

「無党派に対する集団性の認知の検討」

「自由意思信念とその関連信念が自己コントロールに与える影響」  
「実験室での不遇な他者への利他分配課題における Motivation Crowding Out の再現と追加的検討」  
「放射線災害地域の食品生産者に対する応援意図の規定因」  
「熟議の規範的理論とその反照的均衡の可能性」  
「周辺の状況とリーダーの表出する感情の違いによる、フォロワーのリーダーシップに対する評価の検討」  
「アドバイスの提示方法によるアルゴリズム回避への影響の検討」  
「複数課題場面においてフィードバックが受け手のモチベーションに与える影響：暗黙理論に着目して」  
「公共財ゲームにおけるスパイト行動の要因の検討」  
「集団規範からの逸脱者に対する非難が生じる条件：多元的無知状態の規範に着目して」  
「第一印象はどう変わるか？：情報処理様式が反証事例の解釈に及ぼす影響」  
「居住地流動性が社会的援助行動に与える影響」  
「介護労働者の就業継続意向—規定因の検討—」  
「犯罪被害者への非人間化が同情と援助意図に与える影響：被害者はどうして救われないのか」  
「情報の伝達場面で生じる透明性の錯覚の原因の検討：情報の送り手以外に着目して」  
「社会的ジレンマ状況における格差の協力情報への影響の検討」  
「死者は美化されるのか：親密な他者の死の想像が人物評価に及ぼす影響」  
「少年マンガのキャラクターに同一化する要因と同一化の影響について」  
「関係流動性・集団サイズと規範遵守行動との関係性」  
「男性による子育て休暇取得の規定因：職場・家族・個人の観点から」  
「拒絶経験や知覚と回避行動、心の知覚の関係について」  
「集団規範に基づく自己評価と他者評価予測に関する検討—他者の「目」に着目して」  
「代理出産と体外受精に対する人々の態度：パターン別検討」  
「暗黙理論が課題対処場面の想定と感情に与える影響—困難課題場目に注目して—」  
「情動性の喚起が事後情報効果に与える影響：事故現場の悲鳴は目撃者の記憶を変容させるのか」

他特別演習 3 名

2019 年度

「文化的思考様式と思考表現スタイルの探索的検討」  
「非合理的な規範に従い続ける心的メカニズムの検討」  
「パチンコ産業の衰退—原因と今後—」  
「集団討議のスタンスが成員の思考に及ぼす影響」  
「パフォーマンスと周囲からの評価が規範遵守行動に与える影響について」  
「社会的交換場面における裏切りを促す二要因と個人特性との関連」  
「文化的自己観と「甘え」への意識が組織市民行動に及ぼす影響に関する研究」  
「否定的な出来事による自尊感情の低下を緩衝する個人差要因の検討—自己知識の複雑性に着目して—」  
「絵画評価における Death Positivity Bias の検討」  
「コミュニケーションのツールとしての VR が対話に与える影響—場の共有制に着目した検討—」  
「集団の流動性の維持の検討—一般的信頼・暗黙理論に着目して—」  
「友情におけるサンクコスト効果についての研究」  
「ミーティングにおける表情の可視性の機能—VR 通話を用いた検討—」  
「「恋愛不要群」再検討—なぜ恋人をつくらうとしないのか—」  
「部活動における不合理な上下関係の維持メカニズム—多元的無知に着目して—」  
「運動部における年功序列規範の新たな展開：最上級生が雑用する文化とその意味」

他特別演習 5 名

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2018 年度

河田淳 「Arginine Vasopressin enhances human defensive aggression. (ヴァソプレシンによるヒト防衛的攻撃行動の促進)」(指導教員) 亀田達也  
森芳竜太 「多数派のふるまいが第三者の制裁行動に及ぼす影響：応報的動機に着目して」(指導教員) 唐沢かおり

2019 年度

片山拓海 「個人の社会的価値志向性と商品特性に関する社会的評価が購買行動に及ぼす影響」〈指導教員〉亀田達也

小泉喜之介「集団の創造性を導く討議プロセスの検討」〈指導教員〉村本由紀子

ターン有加里ジェシカ「Individual differences in prosocial and proself behavior in the volunteer's dilemma (ボランティアのジレンマにおける利他的行動および利己的行動の個人差)」〈指導教員〉唐沢かおり

内藤碧 「Social network and collective intelligence under non-stationary uncertain environment: A group experiment and computer simulations (変動環境における社会ネットワークと集合知: 集団実験とシミュレーションによる検討)」〈指導教員〉亀田達也

福本都 「親密な個人間の争い後の加害者の関係破壊的な反応に影響する要因: 被害者の不満の伝え方と加害者のセルフアフメーション」〈指導教員〉唐沢かおり

正本拓 「ヒト摂食行動の社会的促進における共食者の脅威レベルの影響の検討」〈指導教員〉亀田達也

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2018 年度

(甲)

尹月 「How Chinese People Understand Democracy: A Political Psychology Perspective (中国人の民主主義観に関する政治心理学的研究)」

〈主査〉村本由紀子 〈副査〉亀田達也・唐沢かおり・前田幸男・池田謙一

岩谷舟真 「集団規範維持におけるマイクロ＝マクロ・ダイナミクス: 多元的無知現象のメカニズム解明を目指して」

〈主査〉村本由紀子 〈副査〉亀田達也・唐沢かおり・山口裕幸・北村英哉

(乙)

なし

2019 年度

(甲)

齋藤美松 「「今ここ」を超える向社会行動の可能性を探る」

〈主査〉亀田達也 〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・白岩祐子・清成透子

(乙)

なし



## 27 文化資源学

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

2000年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の2つのコースから成る。

2コースに再編されたのは2015年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学(文書学・文献学)で構成されていた。後2者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文系・社会学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達で「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、おそらくそこからは無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。文化資源学では、さらに「おと」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」(身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど)をともなって生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

「文化資源学 Cultural Resources Studies」(resourceは泉に臨むという意味)とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

担当教員(文化資源学=木下直之教授、渡辺裕教授(美学芸術学と兼任)、佐藤健二教授(社会学と兼任)、大西克也教授(中国語中国文学と兼任)、高岸輝准教授(美術史学と兼任)、西村明准教授(宗教学宗教史学と兼任))、文化経営学=中村雄祐教授、小林真理准教授、松田陽准教授(さらに、ライアン・ホームバーグ客員准教授、助教=野村悠里、鄭仁善)の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美学芸術学、美術史学、博物館学、音楽学、演劇学、芸能史学、社会学、フランス語・フランス文学、中国語・中国文学、政策科学、法学、歴史学、国際協力論、開発研究、考古学、文書学などと多彩である。さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から併任教授を招いている。

#### (2) 大学院専攻・コースとしての活動

2018年度の修士課程入学者は9人(うち社会人学生が4人)、博士課程入学者が1人(うち社会人学生が0人)、2019年度の修士課程入学者は8人(うち社会人学生が4人)、博士課程入学者が1人(うち社会人学生が1人)であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあっては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

##### ・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いかけるフォーラムを、毎年開催してきた。2018年度のテーマは「コレクションを手放すー譲渡・売却・廃棄」、2019年度は「富士と旅ー旅メディアのこれまでこれから～」であった。これらを含め、すべての回の開催記録が研究室ホームページに掲載されている。

#### (3) 学会運営、研究誌の発行など

2002年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2018年6月に第16号、2019年6月に第17号を刊行した。2019年度の会員数は336人である。

#### (4) 国際交流の状況

2019年度修士課程に1名(シンガポール人)の外国人留学生を受け入れた。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

木下 直之(文化資源学)(~2018年度)

渡辺 裕(文化資源学)(~2018年度)

佐藤 健二(文化資源学)

大西 克也(文化資源学)

高岸 輝(文化資源学)

西村 明(文化資源学)(2019年度~)

中村 雄祐(文化経営学)

小林 真理(文化経営学)

松田 陽(文化経営学)

### (2) 助教の活動

野村 悠里

在職期間 2015年4月~2019年3月

研究領域 装幀美術史、修復保存

鄭 仁善

在職期間 2019年4月~現在

研究領域 文化政策、映画産業、映画政策

主要業績

(論文) 鄭仁善・チョンジウン、「지역 문화공간으로서의 작은영화관의 현황 및 발전 방향에 관한 연구: 영국 농촌영화관 지원 사례 비교를 중심으로 [地域の文化空間としての小さい映画館の現況及び発展方向: イギリスにおける農村映画館の支援事例との比較を中心とし]」、『商品学研究』、Vol36, Issue6, 119-127頁、2018.12

(学会発表) 国際、Chung Insun、「Documentary Film Tokyo Olympiad and the Postwar Operation of 'General Mobilization」、International Conference of Cultural Policy Research, Tallin, Estonia, 2018.8.23

国際、鄭仁善、「스튜디오 시스템 해체 전후의 일본의 예술영화관: ATG 와 이와나미홀을 중심으로 [スタジオシステム解体前後の日本の芸術映画専門館: ATG と岩波ホールを中心に]」、부산 및 동아시아의 독립영화와 극장가 풍경 [釜山および東アジアのインディペンデント映画と劇場街の風景]シンポジウム、韓国釜山、2018.10.25

(研究報告書) 鄭仁善他、「지역 영상문화 진흥 방안 연구 [地域における映像文化の振興法案に関する研究]」、1-235頁、2018.6

鄭仁善他、「2017년도 한국영화산업 창작부문 공정환경모니터링 보고서 [2017年度韓国映画産業において創作部門の産業公正性に関するモニタリング調査]」、1-82頁、2018.12

鄭仁善他、「2017년 한국영화 공정환경 모니터링 보고서 [2017年度韓国映画産業における産業公正性に関するモニタリング調査]」、1-151頁、2018.12

(マスコミ) NHK ラジオ Nらじ特集「歴史を変えた韓国映画 日本映画の課題は」2020.2.19

### (3) 外国人教員の活動

ライアン・ホームバーク: 2017年10月~2019年9月

研究領域: 戦後日本視覚文化、マンガ研究、美術評論

(担当講義)

国境を超えた原子力の視覚文化

文化資源としての在日米軍基地

Short-Form Art Writing: Reviews, Labels, Manifestos

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

文化資源学専門分野

日高万里「日本における女性の体毛処理と身体規範」(指導教員)木下直之

石橋幹己「騒音の発見—1930年前後の東京における社会問題化をめぐる言説を中心に—」(指導教員)渡辺裕

市太佐知「展示される地域の言葉—津軽方言詩の展示を中心に—」(指導教員)松田陽

門脇愛「占領期における高校新聞の成立に関する研究」(指導教員)木下直之

高橋舞「『ピアノによるバッハ像』の生成と展開—「実用版楽譜」における演奏表現の分析—」(指導教員)渡辺裕

文化経営学専門分野

小倉由佳子「日本におけるコンテンポラリーダンスの発展：公共劇場・ホールが果たした役割と課題」(指導教員)小林真理

青野友香「夢小説における「夢」の意識」(指導教員)中村雄祐

阿部廉「貨幣(古銭)の文化資源学—明治・大正・昭和戦前期における古銭収集ブームに関する考察」(指導教員)佐藤健二

川嶋六「企業による文化関与の合理性に関する考察」(指導教員)小林真理

田中淳士「松下圭一の文化行政論の特質—1970～80年代の社会資本整備の議論からの検討—」(指導教員)小林真理

林茉莉奈「ICTがもたらす芸術への影響—「技術」と「芸術」の関係史という観点から—」(指導教員)中村雄祐

2019年度

文化資源学専門分野

大橋利光「植民地期朝鮮における化学調味料「味の素」の宣伝・販売と解放後韓国への影響」(指導教員)松田陽

井上仁美「ウィリアム・スタージス・ビゲローの仏教思想とボストン美術館」(指導教員)木下直之

河崎柚衣「カナダの国立ミュージアムにおける先住民美術展示—カナダ国立美術館常設展の変遷からみるカナダ美術史でのイヌイット・アートの位置づけ」(指導教員)松田陽

藤本貴子「日本の文化財保護政策における近現代建築資料とアーカイブズ」(指導教員)中村雄祐

庄司沙絵「他者とつながる読書会—「くにたちブッククラブ」にみる開かれた読みの場と個人の体験」(指導教員)中村雄祐

文化経営学専門分野

鈴木健吾「歴史科学運動としての埋蔵文化財保存運動」(指導教員)中村雄祐

風間勇助「矯正施設における芸術活動に関する研究」(指導教員)松田陽

佐々木啓介「トルコ共和国による対外文化財政策—TIKA(トルコ国際協力調整庁)を事例として—」(指導教員)松田陽

佐野智彦「第二次世界大戦後初期オーストリアにおける国民形成と文化政策」(指導教員)小林真理

豊田佳子「芸術文化活動と企業の持続可能性についての考察—資生堂の活動を中心に—」(指導教員)小林真理

平田陽子「現代美術の形態多様化がもたらす美術館の変容パフォーマンス的転回に着目して」(指導教員)小林真理

#### (2) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲)

文化経営学専門分野

廬ユニア「韓国における工芸の成り立ち—朝鮮総督府の文化政策との関係を中心に—」

(主査)木下直之(副査)本田洋・松田陽・高岸輝・李美那

形態資料学専門分野

川瀬さゆり「19世紀の大聖堂修復と鉄—フランスにおける材料保存思想の成立・展開とヴィオレ＝ル＝デュク」

(主査)渡辺裕(副査)松田陽・高岸輝・月村辰雄・加藤耕一

(乙)

なし

2019年度

(甲)

文化経営学専門分野

柴田葵 「日本における彫刻シンポジウム：芸術家の共同体と彫刻の社会化の観点から」

〈主査〉木下直之 〈副査〉渡辺裕・松田陽・加治屋健司・小泉晋弥

文化資源学専門分野

藏田愛子「明治期の画工研究—植物学・動物学・人類学における図示」

〈主査〉中村雄祐 〈副査〉木下直之・高岸輝・佐藤道信・児島薫

文書学専門分野

寺尾美保「大名華族としての島津家の誕生—明治前中期における華族の生成と展開—」

〈主査〉中村雄祐 〈副査〉鈴木淳・山口輝臣・中村尚史・木下直之

(乙)

なし

## 28 韓国朝鮮文化

### 1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本で初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

#### (1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、言語学1名、文化人類学1名、社会学1名の合計4名の教員で構成される。また、外国人客員教員（特任准教授）1名が在籍している（2018～19年度。2018年4月から社会学1名就任、2019年3月に思想史1名退職）。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行っている。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程（定員12名）が開設され、2004年度から博士課程（定員6名）が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い東洋史学、言語学、社会学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

#### (3) 研究室としての活動

##### 1. 東京大学コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2018年度は5回、2019年度は3回開催した。

##### 2. 講演記録の刊行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録（2018年度）』（2019年3月）、『同（2019年度）』（2020年3月）を刊行した。

##### 3. 紀要の刊行

研究室の紀要『韓国朝鮮文化研究』第18号（2019年3月）、第19号（2019年9月）を刊行した。

#### (4) 国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学（米国）と交流協定を締結している。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

韓国朝鮮歴史文化コース

教授 六反田豊 韓国朝鮮中世近世史

教授 Albert Charles Muller 韓国仏教・人文情報学（～2019年3月31日）

韓国朝鮮言語社会コース

教授 福井玲 韓国朝鮮語学・言語学

教授 本田洋 社会人類学・韓国朝鮮文化研究

准教授 金成垣 社会学・社会政策論（2018年4月1日～）

特任准教授 李暁源 韓国古典文学・韓国漢文学（2018年4月1日～）

### (2) 助教の活動

岩井亮雄（2018年4月1日～）

研究領域：韓国朝鮮語学

主要業績：

- (論文) 岩井亮雄、「山・墓」、「外」、「蕎麥」、「黄瓜」、「尖れるさま」、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』、第2集、5-8頁、9-12頁、49-52頁、53-56頁、115-118頁、2018.3  
 岩井亮雄、「言語地図に依る現代韓国語/ㅍ/音小考—小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料を中心に—」、  
 『韓国朝鮮文化研究』、第18号、91-111頁、2019.3  
 岩井亮雄、「方言資料を通して見たㅍとㅍの発音の変化」、『朝鮮語研究8』、7-35頁、2019.9  
 (学会発表) 国際、岩井亮雄、「言語地図を通してみた母音 ㅓ の音変化経路について—小倉進平の方言調査を活用して—(韓国語文)」、韓国文化教育センター第1回次世代韓国学研究者国際学術大会、台湾・国立政治大学、2018.6.2  
 (他機関での講義等) 非常勤講師、神田外語大学、「韓国語Ⅱ」、「韓国語講義Ⅰ・Ⅱ」、2018.4~2019.3  
 非常勤講師、神田外語大学、「韓国語Ⅰ」、2019.4~  
 非常勤講師、国際医療福祉大学、「日本語」、2019.4~

### (3) 外国人教員の活動

特任准教授：李曉源

在任期間：2018年4月1日~

研究領域：韓国漢文学

担当講義：韓国朝鮮文学研究、韓国朝鮮文化交流演習、韓国朝鮮語運用法2

主要業績：

(受賞) 国際、李曉源、韓国漢文学会学術論文賞、韓国漢文学会、2018.6.16

国際、李曉源、新進学術賞、韓国東アジア古代学会、2019.12.14

(論文) 「通信使行列図鑑、『參韓帖』について」、『東洋漢文学研究』 vol.51、東洋漢文学会、2018.10、183-208頁

「16世紀末朝日外交に対する二の視角—松浦霞沼の『朝鮮通交大紀』と金誠一の『海槎録』の関連性を中心に—」、『列上古典研究』 vol.66、列上古典研究会、2018.12、187-214頁

「意圖された『誤讀』—荻生徂徠의「水足氏父子詩卷序」の矛盾、そして朝鮮、『國際日本文學研究集會會議録』 vol.42、國文學研究資料館、2019.3

「癸未通信使行筆談唱和集 <縞紵集>と徂徠學派の通信使認識と華夷觀の推移」、『東アジア古代学』 vol.53、東アジア古代学会、2019.3、89-111頁

「18世紀韓日交流と雨森芳洲の役割」、『語文研究』 vol.101、語文研究学会、2019.9、199-229頁

「夫馬進著『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』に対する批判的検討」、『韓国漢文学研究』 vol.75、韓国漢文学会、2019.9、387-424頁

「辛卯年筆談唱和集『支機閒談』に対する考察」、『東アジア古代学』 vol.56、東アジア古代学会、2019.12、261-285頁

(学会発表) Brush Talks between Ambivalent Friends: The Representation of Chosŏn Korea in the School of Ogyū Sorai in Tokugawa Japan, Panel: Literary Conversations across State Borders in Premodern East Asia, The AAS-in-Asia 2019 Conference(Bangkok, Thai), 2019.7.2-4

「華夷與禮樂—18世紀東亞の衣冠談論及文明意識」、明清研究國際學術研討會、臺灣中央研究院、2019.8.28-30

「文明と武威—18世紀韓日文化交流と他者表象」、全南大学校国語国文学科、BK21+事業団國際学術大会、2020.1.16-17

(講演) 国内、李曉源、華夷と礼樂—18世紀東アジアの衣冠談論と文明意識、東京大学コリア・コロキウム (2019年度第3回)、2020.2.18

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 修士論文執筆者・題目一覧

2018年度

韓国朝鮮言語社会コース

林静 「韓国語と中国朝鮮族の朝鮮語における同形漢字語」(指導教員) 福井玲

國分翼 「長白朝鮮語の用言活用における音韻論的研究—世代差・男女差・地域差を考慮して—」(指導教員) 福井玲

重岡こなつ「韓国系巫者の日本における宗教実践とその諸相」〈指導教員〉本田洋

2019年度

韓国朝鮮歴史文化コース

小菅麻衣子「新羅の「質」派遣とその背景」〈指導教員〉六反田豊

韓国朝鮮言語社会コース

朴美花 「朝鮮語延辺方言における親族呼称語の使用様相と意味研究—延吉地域を中心に—」〈指導教員〉福井玲

立川真理恵「日朝両言語における〈誇り〉の概念化—概念メタファー理論に基づいた分析—」〈指導教員〉福井玲

許秦 「中国延辺朝鮮語における単母音の実験音声学的研究」〈指導教員〉福井玲

崔成浚 「李明博政権における社会政策—社会的リスクにどう対応したか—」〈指導教員〉金成垣

劉叙利 「国際結婚移住女性らによる自己認識の再形成—中国漢族女性と韓国人男性の結婚生活を中心に—」  
〈指導教員〉本田洋

## (2) 博士論文執筆者・題目一覧

2018年度

(甲) (乙)

なし

2019年度

(甲)

韓国朝鮮言語社会コース

林茶英 「東国正韻漢字音研究—中声の修正を中心に—」

〈主査〉福井玲 〈副査〉六反田豊・大西克也・生越直樹・伊藤智ゆき

(乙)

なし

## 29 次世代人文学開発センター

### 1. センター活動の概要

昭和41年に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附設施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組により平成17年から現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。センター主任は平成17年から小佐野重利教授、平成25年度から小島教授、令和元年度から芳賀京子准教授が務めている。平成30年度に以下の3部門に再編成された。

#### a. 文化交流学部門（〈東アジア海域思想文化〉〈地中海形象文化〉）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、平成30年度より現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。本部門には、小島教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成17年度から平成21年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」の拠点が置かれていた。教育面では、学部の「文化交流演習」「文化交流特殊講義」（非常勤講師によるものを含む）を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信してきた。文化交流研究施設の頃から継続している文化交流研究懇談会は、平成30年度、令和元年度には第237回から第248回までを開催し、年度末に退職する教員が講演した。平成18年度より開催している文化交流茶話会も継続し、第45回から第55回までを実施し、新任教員が各自の研究について紹介した。これは研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）も兼ねている。その内容も含め、センター紀要として『文化交流研究』第31号（平成30年度）、第32号（令和元年度）を刊行した。そのほか、本部門には多分野交流演習プロジェクトの事務局も置かれており、多分野交流演習ニューズレターを定期的に発行している。

#### b. 国際人文学部門

人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。人文社会系研究科・文学部には、諸外国から多数の留学生が来て勉学に励んでいる。人文社会系研究科・文学部では原則として日本語により教育・研究が行われているため、留学生には高度な日本語運用能力が求められている。人文社会系研究科・文学部の国際交流室では、留学生を対象とする日本語教育の授業を開講して彼らの日本語学習を支援している。本部門にはその担当教員が所属し、日本語教育の方法について実践に基づく研究を行っている。

平成27年度から後期教養教育が開始された。人文社会系研究科・文学部は、本郷キャンパスに所在する人文学教育部局としてこれに積極的に協力し、多くの授業を提供している。あわせて、外国の大学と提携してサマースクールなどのかたちで学生の国際交流を企画・実施している。これらの事業の円滑な遂行のために特任助教を置き、教養教育のあり方について研究を進めている。

また、平成29年7月から、東京大学総合図書館内に、学内8部局による連携研究機構として、ヒューマニティーズセンター（Humanities Center: HMC）が設置されている。HMCは、思想・歴史・言語・文学・教育・芸術・建築・生活等にもわたる人文学及び隣接諸分野における卓越した研究者による部局横断的な新たな研究創削のプラットフォームである。その運営を人文社会系研究科・文学部として支援するため、特任助教を置いて国際的な連携協力などを担当している。それとともに、鈴木淳本研究科教授が推進する企画研究「学術資産としての東京大学」の補助業務を行っている。

#### c. 人文情報学部門

デジタル化技術の革新とインターネットの急速な発展は、人文社会学における知の保存形態と発信の方法とを大きく変革し、大学・図書館・博物館等に個別に所蔵される知を、広大な一つの地平へと開き出しつつある。過去から継承される多様で膨大な文化資源に立脚する人文社会学の領域にとって、この変化にいかに対応しうるかは、学問の将来を決定しかねない重要な課題である。本部門は、この課題に対応し次世代人文社会学に備えるべく、平成20年に設置された萌芽部門「データベース拠点・大蔵経」の5年間の活動を踏まえつつ、拡充改組を進め、現在に至った。前身の「データベース拠点・大蔵経」は、平成19年に設置され、萌芽部門に置かれて下田正弘教授が兼担してチャールズ・ミュラー特任教授（当時）とともに事業を推進し、平成24年から拡大改組して「人文情報学拠点」として創成部門に移った。この時点で、イント哲学・仏教学から下田正弘教授が本センターに配置換えとなったほか、チャールズ・ミュラー特任



教授（平成25年11月から平成30年3月まで教授）も創成部門に移った。その後、平成30年、人文情報学部門として独立し、ミューラー教授退職後、国立情報学研究所から大向一輝准教授をに迎え、情報学に本格的に対応できる体制を整えた。教育面では「人文情報学概論」「人文情報学特殊研究（学部は特殊講義）」を過去10年にわたって開講するとともに、大学院部局横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を全学に提供した。受講生は、本研究科のあらゆる専門分野のみならず、法学、経済学、教育学、学際情報学府、工学、情報理工、医学等、全学におよぶ点に特色がある。学外に対しても、日本における人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に重要な役割を果たしている。研究面では、大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ、フランス等の諸大学研究所で構築された諸知識基盤と構造内在的に連携し、文字、および画像資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本部門の兼担教員としては、武川正吾教授（社会学）、鉄野昌弘教授（日本文学）、小林正人准教授（言語学）、高岸輝准教授（美術史学）、高橋典幸准教授（日本史学）、中村雄祐教授（文化資源学）がおり、下田教授、大向准教授と協働して上述の事業を推進している。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 教員（専任、兼担および特任教員）

- 文化交流学部門
  - 小島毅教授（東アジア海域交流）
  - 芳賀京子准教授（地中海形象文化）
- 国際人文学部門
  - 向井留実子教授（日本語教育）
- 人文情報学部門
  - 下田正弘教授
  - Albert Charles Muller 教授
  - 大向一輝准教授
  - 鉄野昌弘教授
  - 武川正吾教授
  - 中村雄祐教授
  - 小林正人准教授
  - 高橋典幸准教授
  - 高岸輝准教授

### (2) 助教の活動

國木田 大

在職期間 2015年4月～2020年3月

研究領域 北東アジア考古学

主要業績

(著書)

共著、國木田大、『日本考古学・最前線』、雄山閣、2018.10

共著、國木田大、『土器のはじまり』、同成社、2019.6

(論文)

Masami Izuhō, Dai Kunikita, Yuichi Nakazawa, Noriyoshi Oda, Koichi Hiromatsu, Osamu Takahashi, “New AMS dates from the Shukubai-Kaso site (Loc.Sankakuyama), Hokkaido (Japan): Refining the chronology of small flake-based assemblages during the Early Upper Paleolithic in the Paleo-Sakhalin-Hokkaido-Kurile Peninsula,” *PareoAmerica*, 4-2, pp. 134-150, 2018.4

根岸洋・國木田大、「上新城中学校遺跡 2018 年度発掘調査の概要報告」、『秋田考古学』、62、1-11 頁、2018.12

國木田大・松崎浩之、「オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡（2015 年度）出土試料の放射性炭素年代測定」、『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動』、Vol.4、119-120 頁、2019.3

- 國木田大、「ゴンチャルカ 1 遺跡 (2001 年度) 出土試料の放射性炭素年代測定」、『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動』、Vol.4、121-124 頁、2019.3
- 國木田大、「中国北部における土器出現期の年代測定」、『東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究—河南靈井遺跡出土品の徹底分析—』、42-47 頁、2019.3
- 福田正宏・國木田大・遠藤英子・ゴルシュコフ、M・那須浩郎・北野博司、「ポリツェ文化の穀物利用と食生活」、『農耕文化複合形成の考古学①—農耕のはじまり—』、71-90 頁、2019.5
- 國木田大、「東北部地域における弥生時代の食性分析」、『農耕文化複合形成の考古学①—農耕がもたらしたもので—』、231-244 頁、2019.10
- Kazuki Morisaki, Noriyoshi Oda, Dai Kunikita, Yuka Sasaki, Yasuko Kuronuma, Akira Iwase, Takeshi Yamasaki, Naiochiro Ichida, Hiroyuki Sato, "Sedentism, pottery and inland fishing in Late Glacial Japan: a reassessment of the Maedakochi site," *Antiquity*, Vol.93, pp. 1442-1459, 2019.12
- Dmytro Haskevych, Eiko Endo, Dai Kunikita, Olexandr Yanevich, "New AMS dates from the Sub-Neolithic sites in the Southern Buh area (Ukraine) and problems in the Buh-Dnister Culture chronology," *Documenta Praehistorica*, Vol.46, pp. 216-245, 2019.12
- 國木田大、「自然科学」、『季刊考古学』、第 150 号、138-141 頁、2020.2
- (解説)
- 國木田大、「土器付着物を用いた続縄文・擦文・オホーツク文化の食性復元」、『SEEDS CONTACT』、5、23-26 頁、2018.6
- 國木田大・百瀬長秀・米田穰・設楽博己、「土器付着物を用いた縄文時代晩期～弥生時代の食性分析—長野県松本市における事例—」、『SEEDS CONTACT』、6、37-42 頁、2019.5
- (学会発表)
- 国内、山崎真治・横尾昌樹・國木田大、「沖縄先史土器の起源をめぐる近年の動向と作業仮説」、日本考古学協会第 84 回総会、東京、2018.5.27
- 国内、森先一貴・内田和典・國木田大、「アムール川中流域における新石器時代開始期の石器群」、日本考古学協会第 84 回総会、東京、2018.5.27
- 国内、橋詰潤・I.Shevkomud・内田和典・長沼正樹・國木田大・M.Gorshkov、「ゴンチャルカ 1 遺跡 (2001 年) 発掘調査の成果と課題」、日本考古学協会第 84 回総会、東京、2018.5.27
- 国際、Dai Kunikita, Masahiro Fukuda, Maksim Gorshkov, Mikhail Gablirchuk, Eiko Endo, Hiroyuki Matsuzaki, "Dating charred remains on pottery and analyzing food habits in the Paleometal period in Lower Amur Basin, Russia," 23rd International Radiocarbon Conference, Trondheim, Norway、2018.6.18
- 国内、國木田大・高瀬克範・熊木俊朗・松崎浩之、「土器付着物を用いた北海道における続縄文時代以降の食性分析」、日本文化財科学会第 35 回大会、奈良、2018.7.7
- 国内、國木田大・百瀬長秀・米田穰・設楽博己、「長野県松本市弥生時代遺跡の土器付着物にみられる C4 植物の影響」、日本文化財科学会第 35 回大会、奈良、2018.7.8
- 国内、國木田大・百瀬長秀・米田穰・設楽博己、「土器付着物を用いた長野県松本市縄文時代晩期～弥生時代中期の食性分析」、『東日本における農耕文化の展開』シンポジウム、青森、2018.11.24
- 国内、國木田大・高瀬克範・熊木俊朗・松崎浩之、「土器付着物を用いた続縄文～擦文文化の食性分析」、『東日本における農耕文化の展開』シンポジウム、青森、2018.11.24
- 国内、佐々木由香・國木田大・設楽博己、「炭化種実からみた本州東半部における弥生時代の穀類利用」、『東日本における農耕文化の展開』シンポジウム、青森、2018.11.24
- 国内、福田正宏・M.Gablirchuk・國木田大・M.Gorshkov・田尻義了・江田真毅・木山克彦・張恩恵・A.Malyavin・夏木大吾・足立達朗・太田圭・田邊えり・熊木俊朗、「ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査 (2017・2018 年度)」、第 20 回北アジア調査研究報告会、愛媛、2019.2.23
- 国内、國木田大、「北東アジアにおける土器出現期の年代と食性分析」、日本考古学協会第 85 回総会、東京、2019.5.19
- 国内、國木田大・佐々木由香・設楽博己、「東北部における弥生時代の穀類利用の年代研究」、日本文化財科学会第 36 回大会、東京、2019.6.1
- 国内、國木田大・井上雅孝・千葉啓蔵・設楽博己、「土器付着物を用いた古代東北部の食性分析」、日本文化財科学会第 36 回大会、東京、2019.6.1

国際、Natalia Tsydenova, Dai Kunikita, Hiroyuki Sato, Shizuo Onuki, Daigo Natsuki, “Environmental conditions of early ceramics appearance in the Late Pleistocene - Early Holocene (the Transbaikal region, South Siberia)”, 20th Congress of the International Union for Quaternary Research (INQUA), Dublin, Ireland, 2019.7.30

国内、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・萩野はな・國木田大・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点 2019 年度調査」、第 33 回東北日本の旧石器文化を語る会、秋田、2019.12.21

一色 大悟

在職期間 2018 年 1 月～2020 年 3 月

研究領域 仏教学

主要業績

(著書)

Akira Saito (in chief), Daigo Isshiki, Koichi Takahashi, Toshio Horiuchi, Hisataka Ishida, Kuninori Matsuda and Shiori Ijuin, *The Seventy-five Elements (dharma) of Sarvāstivāda in the Abhidharmakośabhāṣya and Related Works: Baudhdhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences. Volume VI*, The International Institute for Buddhist Studies, 2018

一色大悟、『順正理論における法の認識—有部存在論の宗教的基盤に関する一研究—』、山喜房佛書林、2020.3 (論文)

一色大悟、「近代日本における縁起説論争にみる人間観—説一切有部の三世両重解釈をめぐる—」、『日本佛教学会年報』、83、173-195 頁、2018.8 (『人間とは何か II』(日本仏教学会叢書)、173-195 頁、2019.3 に再録)

一色大悟、「仏教と仏教学のボーダー：東京大学草創期における仏教研究法をめぐる言説」、『東京大学草創期とその周辺—2014-2018 年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』、1-15 頁、2019.3

一色大悟、「有部アビダルマ論書に対する発達史観」、『対法雑誌』、1、7-24 頁、2020.3

(学会発表)

国内、一色大悟、「組織仏教学が遺したもの」、東京大学ヒューマニティーズセンター企画研究「学術資産としての東京大学」ワークショップ「東大仏教学への新たな視座」、東京大学本郷キャンパス、2018.7.20

国内、一色大悟、「縁起説論争縁起」、東京大学文学部印度哲学講座 101 周年記念シンポジウム「日本近現代仏教学—論争から見る仏教研究」、東京大学本郷キャンパス、2018.10.6

国内、一色大悟、「仏教と仏教学のボーダー：東京大学における仏教研究法をめぐる言説」、東京大学大学院人文社会系研究科多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」、東京大学本郷キャンパス、2018.11.22

国内、一色大悟、「仏教の実在論思想における認識と瞑想：三種の直接知を中心に」、科学研究費補助金(18H05302)「仏教学・心理学・脳科学の協同による止観とマインドフルネスに関する実証的研究」研究会、東京大学、2019.7.31

国内、一色大悟、「有部アビダルマ文献に対する発達史観」、日本印度学仏教学会第 70 回学術大会パネル「説一切有部研究の可能性を考える」、佛教大学、2019.9.8

国内、一色大悟、「東京大学における仏教基礎学研究的の伝統と近代」、「東京学派」研究会「東アジアの伝統仏教学と近代仏教学」、東京大学、2019.11.5

国内、一色大悟、「『哲学雑誌』にみる仏教近代化の転換点：仏教善悪因果応報論争を中心として」、多分野交流演習「戦前の『哲学雑誌』を読む」、東京大学、2019.11.28

(講演録)

鈴木淳、一色大悟、下田正弘、荻部直、山口輝臣、「ワークショップ「東大仏教学への新たな視座」講演録」、*Humanities Center Booklet*、1、3-54 頁、2019.8

(他機関での講義等)

一般向け講座、東京大学仏教青年会、「アビダルマ入門」、2018.1～

非常勤講師、鶴見大学短期大学部、「宗教学」、2018.4～2018.9、2019.4～2019.9

講演、真言宗智山派智心会、「俱舎概説—その内容と歴史—」、2018.7

非常勤講師、筑波大学、「比較思想論-b」、2019.10～2019.12

(学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員)

対法雑誌刊行会、事務局長、2020.2～

## 30 死生学・応用倫理センター

### 1. センター活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として2011年4月に設けられた。それに伴い「上廣死生学・応用倫理講座」（旧称「上廣死生学講座」）は死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会（会田特任教授、井口准教授（2019年度）、池澤教授、大西教授（2018年度）、小島教授、小松教授、榊原教授、下田教授、白石講師（2019年度）、早川特任准教授、堀江准教授、横手教授（2019年度））により行われる。所属教員は会田特任教授、小松教授（2018年5月着任）、早川特任准教授、堀江准教授（以上専任）、池澤教授、榊原教授（以上兼任）である。

死生学・応用倫理センターの活動は、以下の四つを柱とする。

- ① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育：これは当初、グローバルCOEの活動として行われてきたが、それを更に継承、拡充していく。それはアカデミズムを市民に開いていく死生学の社会還元モデルケースとなるであろう。
- ② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理教育」の開設：2002年以来、文学部は「応用倫理教育プログラム」を展開してきたが、それを死生学と結合して、学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムに拡充し、展開していく。
- ③ 国際シンポジウム・研究集会：21世紀COE、グローバルCOEを通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができてつつあり、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。
- ④ 次世代を担う若手研究者の育成：COEプログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。そのためにグローバルCOEの機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づける。

以下、この四つについて活動報告を行う。

#### ① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育

これは「上廣死生学・応用倫理講座」の担当であり、2018年度には8月に《医療・介護従事者のための死生学》セミナーを東京大学において開催したほか、7月に初級セミナーを、12月に関西臨床倫理セミナーを開講した。「臨床倫理セミナー」は5月（札幌）、7月（仙台、盛岡）、8月（旭川）、9月（諏訪、金沢、松山）、1月（大阪）3月（久留米）において計9回開催した。また、臨床死生学・倫理学研究会を計10回開催した。

2019年度には《医療・介護従事者のための死生学》セミナーを8月に夏期セミナーを東京大学において開講したほか、7月に初級セミナーを、2月に関西臨床倫理セミナーを開講した。「臨床倫理セミナー」は5月（札幌）、7月（仙台、盛岡、旭川）、8月（秋田）、9月（金沢）、10月（諏訪）において計7回行った。年度末に予定されていたセミナーは新型コロナウイルス感染症のために中止となった。また、「臨床死生学・倫理学研究会」を計9回開催した。

なお、リカレント教育は上廣死生学・応用倫理講座が担当であるので、詳細はそちらの頁を参照されたい。

#### ② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」

「死生学・応用倫理教育プログラム」は2012年4月に新たに開設したもので、東京大学の部局横断型教育プログラムの一つであるだけでなく、後期教養科目にも指定されている。2012年度の開設科目は28科目（うち死生学・応用倫理センターで直接開講するのは19、以下同じ）、2013年度には33（21）、2014年度には28（21）、2015年度には31（22）、2016年度28（21）、2017年度28（22）2018年度26（20）、2019年度33（26）であった。なお、これらの科目はいずれも2単位、学部・大学院共通科目である。2018、2019年度に開設した「死生学・応用倫理教育プログラム」授業科目は以下の通りである。

##### 2018年度

- |        |                       |
|--------|-----------------------|
| 清水哲郎ほか | 「死生学概論」（死生学の射程）       |
| 池澤優ほか  | 「応用倫理概論」（応用倫理入門）      |
| 早川正祐   | 「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理） |
| 堀江宗正   | 「死生学演習Ⅱ」（スピリチュアリティ研究） |
| 池澤優    | 「死生学演習Ⅲ」（死生学基礎文献講読）   |

小松美彦 「応用倫理演習Ⅰ」(科学的生命観と人生論的生命観Ⅲ)  
池澤優 「応用倫理演習Ⅱ」(環境倫理文献講読)  
堀江宗正 「応用倫理演習Ⅲ」(環境思想研究)  
会田薫子 「応用倫理演習Ⅳ」(生命倫理と臨床倫理の現在)  
澤井敦 「死生学特殊講義Ⅰ」(死と不安の社会学)  
会田薫子・早川正祐 「死生学特殊講義Ⅱ」(臨床死生学・倫理学の諸問題)  
会田薫子 「死生学特殊講義Ⅲ」(臨床老年死生学入門)  
早川正祐 「死生学特殊講義Ⅳ」(共感とケアの哲学)  
早川正祐 「死生学特殊講義Ⅴ」(自律についての関係的なアプローチの展開)  
榊原哲也 「死生学特殊講義Ⅵ」(死生のケアの現象学)  
大塚類 「死生学特殊講義Ⅶ」(事例から読み解く生きづらさ)  
会田薫子 「応用倫理特殊講義Ⅰ」(質的研究法)  
福永真弓 「応用倫理特殊講義Ⅱ」(生と場所の環境倫理)  
関礼子 「応用倫理特殊講義Ⅲ」((環境—社会)への語りと倫理)  
村上靖彦 「応用倫理特殊講義Ⅳ」(現象学的な質的研究)  
赤林朗・瀧本禎之・中澤栄輔・山本圭一郎 「生命・医療倫理Ⅰ」【医学部】  
上別府圭子・佐藤伊織 「家族と健康」【医学部】  
関崎勉 「生命倫理」【農学部】  
根本圭介 「技術倫理」【農学部】  
廣野喜幸 「応用倫理学概論」【教養学部】  
松本真由美 「科学技術リテラシー論Ⅱ」【教養学部】

#### 2019年度

堀江宗正ほか 「死生学概論」(死生学の射程)  
池澤優ほか 「応用倫理概論」(応用倫理入門)  
小松美彦 「死生学演習Ⅰ」(生権力・生政治論の新展開)  
堀江宗正 「死生学演習Ⅱ」(批判的死生学)  
池澤優 「死生学演習Ⅲ」(死生学基礎文献講読)  
早川正祐 「死生学演習Ⅳ」(病いの語りをめぐる倫理)  
小松美彦 「応用倫理演習Ⅰ」(科学的生命観と人生論的生命観Ⅳ)  
池澤優 「応用倫理演習Ⅱ」(環境倫理文献講読)  
堀江宗正 「応用倫理演習Ⅲ」(未来倫理の探究)  
会田薫子 「応用倫理演習Ⅳ」(質的研究法入門)  
堀江宗正 「死生学特殊講義Ⅰ」(日本人の死生観)  
榊原哲也 「死生学特殊講義Ⅱ」(死生のケアの現象学)  
澤井敦 「死生学特殊講義Ⅲ」(死と不安の社会学)  
会田薫子 「死生学特殊講義Ⅳ」(臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅰ)  
会田薫子 「死生学特殊講義Ⅴ」(臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ)  
会田薫子 「死生学特殊講義Ⅵ」(臨床老年死生学入門)  
早川正祐 「死生学特殊講義Ⅶ」(共感とケアの哲学)  
早川正祐 「死生学特殊講義Ⅷ」(認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開)  
早川正祐 「死生学特殊講義Ⅸ」(自律についての関係的なアプローチ)  
乗立雄輝 「死生学特殊講義Ⅹ」(死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察)  
小松美彦 「応用倫理特殊講義Ⅰ」(先端医療と死生観)  
田中智彦 「応用倫理特殊講義Ⅱ」(現代の「野蛮」に抗うために)  
関礼子 「応用倫理特殊講義Ⅲ」(環境と災害を「物語る」)  
村上靖彦 「応用倫理特殊講義Ⅳ」(現象学的な質的研究)  
堀江宗正 「応用倫理特殊講義Ⅴ」(環境思想)  
大塚類 「臨床現象学概論」【教育学部】  
赤林朗・瀧本禎之、中澤栄輔、山本圭一郎 「生命・医療倫理Ⅰ」【医学部】  
上別府圭子、佐藤伊織、キタ幸子、副島堯史 「家族と健康」【医学部】

根本圭介ほか 「技術倫理」【農学部】  
関崎勉ほか 「生命倫理」【農学部】  
鈴木貴之 「応用倫理学概論」【教養学部】  
松本真由美 「科学技術リテラシー論II」【教養学部】

### ③ 国際シンポジウム・研究集会

死生学・応用倫理センターでは2014年度から連続して韓国の代表的死生学研究機関である翰林大学校死生学研究所との共催で国際シンポジウムを開催してきた。2018年11月24日（土）に東京大学本郷キャンパス文学部三番大教室で以下の会議を開催した。

東京大学文学部死生学・応用倫理センター主催、翰林大学生死学研究所後援

国際シンポジウム「東アジアの死生学—超高齢化と死にゆくこと」（“Death and Life Studies in East Asia: Hyper-aging and Dying”）

開会の辞および趣旨説明 池澤優（東京大学死生学・応用倫理センター長）

#### 1部

発表「韓国の春川地域における高齢者の自殺とその影響要因に関する調査」 パク・ジュンシク（韓国翰林大学社会科学教授、生死学研究所長）、キム・ヨンボム（韓国翰林大学高齢社会研究所准教授）

発表「ソーシャル・キャピタルは川崎地域包括ケアシステムの構築に役立つか？」 赤川学（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

コメント 澤井敦（慶應義塾大学法学部教授）

#### 2部

発表「台湾における終末期医療の法と倫理—『患者自主権利法』の成立と『善終』概念の変遷」 鍾宜錚（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）

発表「『死にゆくこと』への介入—日韓のホスピス・緩和ケア政策から考える」 株本千鶴（相山女学園大学人間関係学部教授）

発表「死を超越する愛と想像力」（Love and imagination that transcends death） Jason Danely（オクスフォード・ブルックス大学人類学部准教授）

コメント 会田薫子（東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座特任教授）

総合討論および質疑応答

その他、上廣死生学・応用倫理講座の主催で、2019年3月24日にシンポジウム「非がん疾患の緩和ケアとACPの役割—よりよい高齢者医療とケアを目指して」を開催した。2020年3月に予定されていたシンポジウムは新型コロナウイルス感染症のために中止となった。

### ④ 次世代を担う若手研究者の育成

死生学・応用倫理の未来を担う若手研究者を育成するために、2018～9年度は特任研究員5名（うち2人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇用した。

特任研究員はセンターの諸活動の中核を担うだけでなく、センター機関誌である『死生学・応用倫理研究』に研究成果を積極的に発表することが期待されている。『死生学・応用倫理研究』は、グローバルCOE「死生学」の機関誌として発行してきた『死生学研究』を改名して継続刊行しているものであり、2017年度に24号を、2018年度には25号を刊行した。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 所属教員

会田薫子、池澤優（センター長）、小松美彦、柳原哲也、早川正祐、堀江宗正

### (2) 特任研究員

田村未希、陳健成（2019年10月～）、丁ユリ（～2019年9月）、林悠子、丸山文隆、山本栄美子

### (3) 事務補佐員

安野裕美

## 3 1 北海文化研究常呂実習施設

### 1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約 2 万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連続と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カシワヤナラの林の中に 2,500 を超える竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は 1955 年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957 年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967 年からは助手 1 名が文学部考古学研究室から派遣され、1973 年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舍、資料保存センターが存在し、教授・助教各 1 名、有期雇用職員（管理人等）2 名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004 年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。ほかに、2014 年度からは文学部夏期特別プログラムの後半部分が常呂実習施設で開講され、東大の学部学生と海外の学生が遺跡発掘体験などのプログラムを通して交流している。資料陳列館では常設展や企画展等の博物館活動もおこなっており、2013 年度には資料陳列館を含む常呂実習施設全体が、博物館法の規定する博物館相当施設に指定されている。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は 14 冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、ロシア連邦の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら調査を実施している。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した 17 冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたのものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元竪穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。さらに 2000 年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2019 年度までに 23 回を数えている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 北東アジア考古学

#### (2) 助教の活動

夏木 大吾

在職期間 2015 年 4 月～2020 年 3 月

研究領域 先史考古学

主要業績

(論文)

和文論文誌、夏木大吾、「枝幸町内採集の旧石器・縄文時代石器」『枝幸研究』11、12-23 頁、2020.3

和文論文誌、夏木大吾、「東北日本の稜柱系細石刃石器群」『福岡大学考古学論集』3、3-16 頁、2020.3

和文論文誌、夏木大吾、「遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の調査概要」『北海道考古学』56、21-33 頁、2020.3

和文論文誌、岩瀬彬・夏木大吾・出穂雅実、「美幌町豊岡 7 遺跡の忍路子型細石刃核を伴う石器群の使用痕分析」『論集忍路子』5、35-57 頁、2018.5

和文論文誌、夏木大吾、「北海道における縄文時代草創期文化」『論集忍路子』5、59-77 頁、2018.5

(予稿・会議録)

- 国内会議、熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀、「2019年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告」、第21回北アジア調査研究報告会、九州大学伊都キャンパス、2020.2.16
- 『第21回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、90-93頁、2020.2
- 国内会議、萩野はな・福田正宏・熊木俊朗・斉藤謙一・夏木大吾・張恩恵・西村広経・太田圭・國木田大・佐藤宏之、「北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査(2019年)」、第21回北アジア調査研究報告会、九州大学伊都キャンパス、2020.2.16
- 『第21回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、13-16頁、2020.2
- 国内会議、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・萩野はな・國木田大・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点 2019年度調査」、第33回東北日本の旧石器文化を語る会、秋田市中心市民サービスセンター(秋田県秋田市)、2019.12.22
- 『第33回東北日本の旧石器文化を語る会 発表要旨集』、53-58頁、2019.12
- 国内会議、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・萩野はな・國木田大・佐藤宏之・熊木俊朗、「遠軽町タチカルシュナイ M-I 地点」、2019年度北海道考古学会遺跡調査報告会、北海道大学、2019.12.14
- 『2019年度北海道考古学会遺跡調査報告会 資料集』、25-28頁、2019.12
- 国内会議、夏木大吾、「北海道における縄文時代のはじまり」、第27回環オホーツク文化のつどい、紋別市文化会館(北海道紋別市)、2019.8.17
- 国内会議、夏木大吾、「タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点における縄文時代草創期文化の石器製作技術」、日本旧石器学会第17回研究発表・シンポジウム、大正大学巣鴨キャンパス、2019.6.30
- 『日本旧石器学会第17回研究発表・シンポジウム 予稿集』、45頁、2019.6
- 国内会議、夏木大吾、「北海道における土器出現期の文化現象」、日本考古学協会第85回総会研究発表、駒澤大学、2019.5.19
- 『日本考古学協会第85回総会研究発表 要旨』、100-101頁、2019.5
- 国内会議、福田正宏・M.Gablirchuk・國木田大・田尻義了・M.Gorshkov・江田真毅・木山克彦・A.Malyavin・夏木大吾・足立達朗・張恩恵・太田圭・田邊えり・熊木俊朗、「ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査(2017・2018年度)」、第20回北アジア調査研究報告会、愛媛大学、2019.2.23
- 『第20回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、9-14頁、2019.2
- 国内会議、夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果(第12次)」、第20回北アジア調査研究報告会、愛媛大学、2019.2.23
- 『第18回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、17-20頁、2019.2
- 国内会議、熊木俊朗・夏木大吾・市川岳朗、「2018年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告」、第20回北アジア調査研究報告会、愛媛大学、2019.2.23
- 『第20回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、21-24頁、2019.2
- 国内会議、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・佐藤宏之・熊木俊朗、「遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点」、2018年度北海道考古学会遺跡調査報告会、北海道大学、2018.12.8
- 『2018年度北海道考古学会遺跡調査報告会 資料集』、37-40頁、2018.12
- 国内会議、夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗、「北見市吉井沢遺跡」、2018年度北海道考古学会遺跡調査報告会、北海道大学、2018.12.8
- 『2018年度北海道考古学会遺跡調査報告会 資料集』、41-44頁、2018.12
- 国際会議、Daigo Natsuki・Hiroyuki Sato、「Different spatial activities in the Late Glacial microblade site: A case study based on the Yoshiizawa site of northern Japan」、The 23<sup>rd</sup> Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae & Lenggon: Prehistory Adaptation”、University of Science Malaysia(Malaysia)、2018.7.2
- 『The 23<sup>rd</sup> Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae & Lenggon: Prehistory Adaptation” Proceeding』、47頁、2018.7
- 国内会議、夏木大吾、「北海道における縄文時代草創期文化の石器群」、日本旧石器学会第16回研究発表・シンポジウム、早稲田大学戸山キャンパス、2018.6.23
- 『日本旧石器学会第16回研究発表・シンポジウム 予稿集』、11-14頁、2018.6
- (報告書)
- 夏木大吾(編)『日本列島北部における新石器型狩猟採集社会の形成過程—タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の研究—』東京大学常呂実習施設研究報告第16集、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設、全189頁、2020.3



## 3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

### 1. 寄付講座活動の概要

本講座は、公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体とする寄付講座「上廣死生学講座」として平成19年度から第1期5年間の活動を行ったのち、平成24年度から「上廣死生学・応用倫理講座」として寄付講座第2期の活動を行い、平成29年度からの5年間は寄付講座第3期の活動を行っている。第1期は、次世代人文学開発センターに属し、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の活動を行ったが第2期は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の活動を継いで平成23年度に発足した「死生学・応用倫理センター」に属して、死生学の臨床にかかわる面および応用倫理の領域である臨床倫理を中心に活動を進め、第3期においても継承・発展的に活動している。本講座は特任教授1名、特任准教授1名に加えて、平成30・令和元年度は引き続き上廣倫理財団からの追加寄付により2名の特任研究員を継続雇用することができた。

本講座の統括責任者は榑原哲也教授（哲学）であり、また本講座の上部組織である死生学・応用倫理センターのセンター長は池澤優教授（宗教学）である。この2名に加えて、同センターの小松美彦教授および堀江宗正准教授に、リカレント教育等について協力していただき、活動を進めている。本講座第3期5年間の目的については次のように規定している。

本講座は、東京大学死生学・応用倫理センターの中において、

- (a) 医療・介護の臨床現場を中心とする人間の生活の場において、人生の物語りを生きつつある人々の生活に即した臨床死生学と現実の諸問題を即した倫理的あり方を実践的に研究し、研究成果の社会への還元が現実の人々の人生をより豊かにすることに貢献し、またその還元する活動が同時に研究活動でもあるような実践的学問を展開し、かつ、
- (b) 研究成果を社会に還元する活動として社会人対象の「リカレント教育」を行い、また、学生・院生を対象として、研究を背景とした部局横断型「死生学・応用倫理プログラム」の一翼を担うことを目的とする。

この目的に応じて、本講座の活動は、1)実践的研究活動、2)学部・大学院教育、および3)社会貢献（リカレント教育その他、実践的研究と連動するもの）から成っている。これらに関する平成30・令和元年度の実績概要は次のとおりである。

#### 1) 実践的研究活動

臨床倫理プロジェクト（臨床死生学の研究知見の社会還元を含む）として、臨床現場における実践的研究を推進し、臨床倫理検討システムの明確化と研修用カリキュラム化をすすめた（科研費基盤（A）を平成30～令和元年度得て実施）。研修会用テキストとして長年、改定を繰り返しつつ使用してきた『臨床倫理エッセンシャルズ』を元に、多忙な現場で活用しやすい形を求めて、簡易版臨床倫理検討シートを開発し、それを基礎に臨床倫理検討シートの改訂版セットを開発し、全国各地で実施している、医療・介護従事者のための「臨床倫理セミナー」にて紹介し、臨床現場への浸透を図った。臨床倫理セミナーの実施実績と参加者数は下記を参照されたい。平成30年度には全国で延べ約2,350名、令和元年度には延べ約2,550名の参加者を得た。このうち7か所（札幌、仙台、諏訪、金沢、大阪、愛媛、久留米）は回を重ねており、入門編の講義と並行してリピーター向けのアドバンス・コースの講義も提供するようになった。このようにして、ともに学んだ医療・介護従事者が医療現場で臨床倫理の営みを実践することによって日本の医療・介護の質が向上するという見込みが、次第に現実的になってきている。加えて、医療現場で臨床倫理の営みを活性化する役割を担うファシリテーター養成研修会も毎年、札幌と大阪で実施した。

高齢者ケアの分野では、人工的水分・栄養補給法に関する本人・家族の意思決定を支援する『意思決定プロセスノート』が版を重ね、また、これを先行書として刊行した『高齢者ケアと人工透析を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』を用いて、透析医療に関わる看護師ら医療者を対象として日本腎不全看護学会学術集会上において交流集会在この2年間にわたって実施された。

超高齢社会における透析医療に時代の変化が訪れるなか、同書は日本においては前例がない、保存的腎臓療法（conservative kidney management）を含めた新時代の啓発書となったという評価を読者から得ている。CKMは今後、高齢患者に対する医学的に適切な透析療法の意思決定支援において必須の選択肢となるとみられている。

さらに、以上の高齢者医療およびケアに関する活動の共通の基礎として、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の理解についての研究と発信を進めた。ACPは人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援に関わる、臨床死生学的にも重要な概念であるが、英語圏から輸入された概念と方法論を翻訳しただけでは日本社会では運用が困難であるため、日本の社会的文化的特徴を踏まえた形に解釈した。それは日本老年医学会「ACP推進に関する提言」（令和元年度）につながった。同提言はACPに関して日本の医学会から発表された最初の臨床倫理ガイドラインとなった。

☆臨床倫理セミナー開催実績 ( )内は参加者数

平成30年度

札幌	5月27日 (180)	北海道臨床倫理研究会主催と共催
仙台	7月8日 (110)	東北大学大学院医学系研究科 緩和ケア看護学研究室と共催
盛岡	7月14日 (100)	岩手臨床倫理研究会主催と共催
大阪	7月21日 (335)	関西臨床倫理研究会主催に協力
旭川	8月12日 (165)	北・北海道臨床倫理検討会に協力
諏訪 (長野)	9月1日 (100)	諏訪中央病院に協賛
金沢	9月8日 (350)	北陸地区臨床倫理事例研究会主催に協力
松山	9月29日 (200)	愛媛地区臨床倫理事例研究会主催に協力
大阪	10月6日 (235)	関西臨床倫理研究会に協力
佐久 (長野)	11月3日 (56)	佐久医療センター看護部主催に協力
大阪	12月16日 (120)	関西臨床倫理セミナー実行委員会と共催
大阪	1月12日 (270)	関西臨床倫理研究会主催に協力
久留米 (福岡)	3月16日 (130)	ちくご緩和研究会主催に協力

令和元年度

札幌	5月19日 (220)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
大阪	7月5日 (320)	関西臨床倫理事例研究会主催に協力
仙台	7月6日 (100)	仙台臨床倫理セミナーと共催
盛岡	7月7日 (110)	岩手臨床倫理研究会主催に共催
旭川	7月21日 (120)	北・北海道臨床倫理検討会に協力
秋田	8月18日 (100)	秋田臨床倫理セミナーに共催
金沢	9月14日 (410)	北陸地区臨床倫理事例研究会主催に協力
諏訪 (長野)	10月5日 (105)	諏訪赤十字病院に協賛
大阪	10月26日 (145)	関西臨床倫理研究会主催に協力
松山	11月16日 (170)	愛媛地区臨床倫理事例研究会主催に協力
佐久 (長野)	11月23日 (65)	佐久医療センター看護部主催に協力
大阪	12月15日 (125)	関西臨床倫理セミナー実行委員会と共催
大阪	1月11日 (335)	関西臨床倫理事例研究会主催に協力
名古屋	2月15日 (90)	愛知県看護管理研究会主催に協力
東京	2月16日 (130)	聖路加国際病院と共催

2) 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」への参加

引き続き学部横断型の教育プログラムに貢献する授業を担当し、また、コア授業の一つである「死生学概論」と「応用倫理概論」については本講座スタッフが参画した。

平成30年度

堀江他	死生学概論 [死生学の射程] (会田・早川各1回担当)	Sセメスター	木曜2限
池澤他	応用倫理概論 [応用倫理入門] (会田は1回担当)	Sセメスター	金曜3限
会田	応用倫理演習 [生命倫理学と臨床倫理学の現在]	Aセメスター	火曜5限
会田	死生学特殊講義 [臨床老年死生学入門]	Aセメスター	木曜3限
会田	死生学演習 [質的研究法]	Sセメスター	火曜5限
会田・早川	死生学講義 [臨床死生学・倫理学の諸問題]	通年	水曜6限
早川	死生学特殊講義 [共感とケアの哲学]	Sセメスター	木曜3限
早川	死生学特殊講義 [自律について関係的アプローチの展開]	Aセメスター	木曜4限
早川	死生学演習 [病いの語りをめぐる倫理]	Aセメスター	金曜5限

令和元年度

堀江他	死生学概論 [死生学の射程] (会田・早川各1回担当)	Sセメスター	木曜2限
池澤他	応用倫理概論 [応用倫理入門] (会田は1回担当)	Sセメスター	金曜3限
会田	死生学特殊講義 [臨床老年死生学入門]	Aセメスター	木曜3限

会田	死生学演習〔質的研究法入門〕	S セメスター	火曜 5 限
会田	死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅰ〕	S セメスター	水曜 6 限
会田	死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ〕	A セメスター	水曜 6 限
早川	死生学演習〔病いの語りをめぐる倫理〕	S セメスター	水曜 2 限
早川	死生学特殊講義〔共感とケアの哲学〕	S セメスター	木曜 3 限
早川	死生学特殊講義〔認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開〕	A セメスター	水曜 2 限
早川	死生学特殊講義〔自律について関係的アプローチの展開〕	A セメスター	木曜 4 限

### 3) 社会貢献

リカレント教育「医療・介護従事者のための死生学」基礎コースとして行うセミナーや、本講座が主催ないし協力する特別開催の行事（海外の研究者等講演会含む）、エンドオブライフ・ケアに関するシンポジウム、各地で行う臨床倫理セミナーとファシリテーター養成研修（上述）、「臨床死生学・倫理学研究会」等の研究会を催して、研究成果の社会還元を努めた。さらに、特任教授の会田は招待講演等の依頼を多数こなした。また、特任准教授の早川も、医学・看護学系団体からの招聘にて講演を行う機会が増えてきた。講演のテーマはいずれにおいても研究成果を核とするものに他ならない。

上記の行事のうち、平成 30 年度末に開催したシンポジウムでは、「「非がん疾患の緩和ケアと ACP の役割—よりよい高齢者医療とケアを目指して」をテーマとし、心不全、呼吸不全、老年症候群に対する緩和ケアの臨床の実際を先駆者から学び、汎用への課題を検討した。同時に、医療とケアの最適化のための ACP はどうあるべきかを合わせて考えた。

このシンポジウムの参加者募集は 1 月中旬に開始されたが、開始から 1 週間で満席となり、当日の参加者は医療・介護の専門職を中心に約 500 名と盛況であった。臨床現場の要請が大きいことを実感したため、令和元年度は安田講堂を予約し準備に当たった。しかしながら、令和元年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防のため、シンポジウム開催まで 2 週間と迫った 2 月中旬の時点で、開催を次年度に延期せざるを得なかった。その日までに参加登録を済ませた約 850 名の医療・介護関係者から、緩和ケアと ACP をめぐる現場での困難感などが寄せられたため、令和 2 年度のシンポジウムでは研究知見と実践知の一層の社会還元を図るべく、準備をすすめたい。

### ☆リカレント教育セミナー☆

#### ◇ 夏季セミナー

- 平成 30 年 8 月 19 日（日） 午前・午後 東京大学本郷キャンパス法文 2 号館 1 番大教室・2 番大教室
1. 死生学コア 池澤優「死生学とは何か——フランクフルトとベッカーを軸にサナトロジーを再考する」（入門）
  2. 臨床死生学コア 会田薫子「臨床現場で生きる死生学」（入門）
  3. 臨床死生学トピック 早川正祐「脆弱性をめぐる倫理」（アドバンスト）
  4. 死生学トピック 堀江宗正「ケアの提供者の死生観・人生観・スピリチャリティ」（アドバンスト）
  5. 死生学／臨床死生学トピック 柳原哲也「現象学的視点から『ベナー看護論』を読み解く」（入門・アドバンスト共通）

#### ◇ 冬季セミナー 第 3 回関西臨床倫理セミナー

平成 30 年 12 月 16 日（日） 午前・午後 大阪市立総合医療センター さくらホール

1. 講義 早川正祐「ケアの倫理」
2. 講義 清水哲郎（岩手保健医療大学学長）「臨床倫理 基礎編」
3. 講義 会田薫子「臨床倫理 事例検討の進め方」
4. 事例検討（事例紹介・質疑／グループワーク・全体会）
5. 講演 清水哲郎「臨床倫理 総まとめ」

・大阪在住の医師たちがリードするグループのセミナー企画に応じて、臨床倫理プロジェクト主催で開催

#### ◇ 夏季セミナー

令和元年 8 月 4 日（日） 午前・午後 東京大学本郷キャンパス 法文 2 号館 1 番大教室・2 番大教室

1. 死生学コア 池澤優「死生学とは何か——日本の死生学」（入門）
2. 臨床死生学コア 会田薫子「臨床現場で生きる死生学」（入門）
3. 臨床死生学トピック 早川正祐「病いにおける語り」（アドバンスト）
4. 死生学トピック 堀江宗正「死のタブー「良い死」について考える——死生観調査」（アドバンスト）

5. 死生学/臨床死生学トピック 榊原哲也「向き合うことと寄り添うこと——現象学的考察の試み」(入門・アドバンスト共通)

◇ 冬季セミナー 第2回関西臨床倫理セミナー

令和元年12月15日(日) 午前・午後 大阪市立総合医療センター さくらホール

1. 講義 井原歳夫(大正病院 副院長)「臨床倫理の基礎」(ベーシック)
2. 講義 会田薫子「事例検討の進め方」(ベーシック)
3. 講義 多田羅竜平(大阪市総合医療センター 緩和ケアセンター長)「なぜ一度始めた人工呼吸管理はやめられないのか」(アドバンスト)
4. 講義 早川正祐「脆弱性をめぐる倫理」(アドバンスト)
5. 事例検討(事例紹介・質疑/グループワーク・全体会)
6. 講演 清水哲郎(岩手保健医療大学学長)「死の文法・文化・臨床」

◇ 「医療・介護従事者のための死生学」基礎コース修了のためのレポート書き方セミナー(初級)

平成30年7月15日(日) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス 法文2号館2番大教室

講師: 早川正祐

令和元年7月14日(日) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス 法文2号館2番大教室

講師: 早川正祐

★シンポジウム★

◇ シンポジウム「非がん疾患の緩和ケアとACPの役割——よりよい高齢者医療とケアを目指して」

- ・日時: 令和元年3月24日(日) 13時~17時
- ・会場: 東京大学本郷キャンパス 伊藤国際学術センター 伊藤謝恩ホール
- ・開会の辞

葛谷雅文(名古屋大学大学院医学系研究科 発育・加齢医学講座 教授)

・シンポジスト

- 弓野大(医療法人社団ゆみの 理事長)
- 千田一嘉(国立長寿医療研究センター 呼吸内科部・在宅連携医療部 医師)
- 桑田美代子(青梅慶友病院 看護介護開発室長 老人看護専門看護師)
- 片山陽子(香川県立保健医療大学 保健医療学部看護学科 教授)

・特別発言:

- 森田達也(聖隷三方原病院 副院長・緩和と支持治療科 部長)
- 清水哲郎(岩手保健医療大学 学長)
- 座長: 三浦久幸(国立長寿医療研究センター 在宅連携医療部 部長)
- 会田薫子

★公開ワークショップ・講演会★

◇ 国際ワークショップ “Epistemic Injustice and Virtue Epistemology”

1. Seisuke Hayakawa “Rethinking empathy as shared epistemic responsibility in the context of illness”
  2. Kunimasa Sato (Keiai University) “Epistemic injustice: the past and recent debates”
  3. Keynote speaker: Heather Battaly (University of Connecticut) “Closed-mindedness and arrogance”
- ・日時: 令和元年11月27日(水) 16:45 - 20:10
  - ・会場: 本郷キャンパス 法文2号館2番大教室
  - ・本講座と敬愛大学プロジェクト研究助成「多様な生き方を認める社会における徳とその教育——大学教育に焦点を当てて」との共催

◇ オックスフォード大学上廣応用倫理センター ジュリアン・サヴァレスキュ教授公開講演会

- ・講演テーマ: “Rational evolution and the ethics of gene editing and genetic selection”
- ・日時: 令和2年1月21日(火) 14:00 - 16:00
- ・会場: 本郷キャンパス 山上会館 大会議室(2階)
- ・主催は日本学術会議哲学委員会24期「いのちと心を考える分科会」 科研費 基盤(B)「ゲノム編集をめぐる倫理規範の構築を目指して——科学技術イノベーションと人間の尊厳」、本講座は共催

★臨床死生学・倫理学研究会★

平成30年度

1. 4月18日(水) 「ケアの倫理学」早川正祐

2. 5月9日(水) 「臨床倫理コンサルテーションの活動と役割」長尾式子(北里大学 看護学部 准教授)
3. 5月30日(水) 「認知症高齢者におけるフレイルの評価と意義」杉本大貴(国立長寿医療研究センター もの忘れセンター 研究員)
4. 6月20日(水) 「医療崩壊の夕張から学ぶ、市民の意識改革」森田洋之(南日本ヘルスリサーチラボ 代表)
5. 7月11日(水) 「治癒に寄与する「倫理」——オープンダイアログの可能性」斎藤環(筑波大学 社会精神保健学 教授)
6. 9月26日(水) 「痛みをどう表現するか：身体・比喩・造形」池田喬(明治大学 文学部哲学専攻 准教授)
7. 10月17日(水) 「精神科臨床におけるニューロエンハンスメント」榎原英輔(東京大学医学部附属病院 精神神経科 助教)
8. 11月14日(水) 「認知症高齢者と看護職者のケアリングについて」小松美砂(三重県立看護大学 看護学部 教授)
9. 12月5日(水) 「臨床宗教師の人材育成とその活動」大下大圓(飛騨千光寺 住職)
10. 1月16日(水) 「『ケア』をやまと言葉で考える」竹内整一(鎌倉女子大学 教授)

#### 令和元年度

1. 4月24日(水) 「高齢社会における自己決定権」加藤尚武(京都大学名誉教授)
2. 5月15日(水) 「医療と生活をつなぐ歯科医療——“自分らしく生きている”を亡くなる瞬間まで感じられる生活支援を目指して」遠藤眞美(日本大学 松戸歯学部 専任講師)
3. 6月12日(水) 「法律実務で臨床倫理が交錯する場面での法律・司法の限界と役割」木下正一郎(きのした法律事務所 弁護士)
4. 7月3日(水) 「救命集中治療終末期医療における日米の違い」伊藤香(帝京大学 救急医学講座 講師)
5. 7月17日(水) 「死別の悲しみは癒やすものではなく一生の宝物」中野貞彦(がん遺族会 青空の会 共同代表)
6. 10月9日(水) 「その人らしい意思決定を支えるケア——患者が希望する場所で療養するための支援」松本幸絵(栃木県立がんセンター がん看護専門看護師) 寺脇立子(栃木県立がんセンター 医療ソーシャルワーカー)
7. 10月30日(水) 「臓器移植をめぐる医療倫理とリエゾン精神医学」西村勝治(東京女子医科大学 精神医学講座 教授)
8. 11月20日(水) 「インフォームド・コンセントの過去・現在・未来」鈴木利廣(明治大学 名誉教授・学長特任補佐/弁護士)
9. 12月18日(水) 「心臓移植はいかに受け入れられたか」小久保亜早子(練馬光が丘病院 整形外科 医師)
10. 1月8日(水) 「カントに基づく人間の尊厳概念とその現代的意義」平出喜代恵(京都大学 日本学術振興会特別研究員)

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 所属教員

会田 薫子	特任教授	臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学
早川 正祐	特任准教授	行為論、倫理学、臨床死生学

### (2) 特任研究員

山本 栄美子	特任研究員	宗教学、倫理思想
田村 未希	特任研究員	哲学(現象学)

### (3) 事務補佐員

安野 裕美

### 3 3 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしなが、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

このプロジェクトは、平成7年4月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成5年度より部分的に試行されてはきたが、平成7年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15名の客員教員（併任教授5名、連携教授・助教授10名）の参加を得て、本格的にスタートした。発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という4つの大テーマが立てられ、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1プロジェクト平均3～4名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められた。なお平成12年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考えから、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

平成11年度からは、発足当初の4つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた〈情報と文化：文化資源と人文社会学〉は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほか、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成14年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、「生命をめぐる科学と倫理」において主題的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトは学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになった。3.11に関する議論は、平成24年、25年と、継続的に行われ、多分野交流の特質が大いに発揮される内容となった。

平成25～29年度には身体論、平成26～30年には日本の近代学術受容の問題を扱うプロジェクトが継続開講された。その成果を引き継ぎつつ、令和元年度からは戦前の『哲学雑誌』にかかわるプロジェクトが、また総長裁量経費プロジェクト「Sustainabilityと人文知」の定例研究会と同時開催の形でもうひとつのプロジェクトが始まることとなった。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、年に数回ニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

平成30年度（2018年度）・令和元年度（2019年度）に開講されたプロジェクトは以下の通り。

#### 平成30年度（2018年度）

東京大学草創期の授業再現5（葛西康徳）

#### 令和元年度（2019年度）

戦前の『哲学雑誌』を読む1（鈴木泉）

サステイナビリティと人文知1（堀江宗正）

## 34 朝日講座

朝日講座は、朝日新聞社の寄付によって2011年度から文学部において開講されている学部横断型の授業である。2011年度からの5年間は「知の冒険——もっともっと考えたい、世界は謎に満ちている」をタイトルとして、全学部共通科目のさががけとしての機能を果たしてきた。そして2016年度からはタイトルを「知の調和——世界をみつめる 未来を創る」に改め、朝日講座第Ⅱ期としてさらに5年間延長された。

朝日講座では、文学部教員が授業内容の企画構想とコーディネートを行い、文学部教務係が履修登録などの事務を取り扱う。また、東京大学大学総合教育研究センター（以下大総センター）に朝日新聞社寄付研究部門が設置され、講座運営を担当する専任の教員がおかれている。歴任者はいずれも人文社会系研究科の出身で、2011年度～2013年度は冨澤かな特任助教（宗教学）、2014年度～2015年度は白岩祐子特任助教（社会心理学）、2016年度～2019年度は開田奈徳美特任助教（社会学）が務めている。毎回の授業では、多様な学問分野からの講師を招き、学生が主体的に議論に取り組むという新しい試みを取り入れてきた。2013年度からは、履修者が担当の回に分かれて事前に予習をしたうえで授業に臨み、グループワークのリーダーを務めるアクティブラーニングの形式を採用している。専門分野を異にする学生間での議論や学びが実現されていることに加えて、TAが予習や議論の補助に入るなど、大きな役割を果たしていることも、この朝日講座の特長といえる。

このように朝日講座は文学部科目でありながら、全学部後期課程の履修と、大学院生の振替履修を対象とし、文理の枠組みを超えた広い視点を養うことをめざしてきた。

2018年度は、祐成保志准教授が担当し、「居場所」の未来」というテーマを設けた。現代における居場所のあり方や居場所が欠如しているという感覚がもたらす影響について様々な分野から議論した。

2019年度は、六反田豊教授が担当し、テーマを「つながり」から読み解く人と世界」とした。「つながり」という観点から人や世界をめぐる様々な問題について、各分野の講師を招いて議論した（各年度の講義情報は文末を参照）。

このように、全学的な教育改革に資する新たな授業の形を提示することが朝日講座の最大の目的であるが、同時にその教育成果を広く社会に還元、共有することも重視している。Webサイト（<https://www.u-tokyo-asahikouza.jp/>）及びツイッター（東京大学朝日講座 @Asahi\_Koza）を活用して講義情報を発信し、また毎年多数の講義を公開講義として一般からの聴講者を受け入れている。さらに、2012年度からは試行的に希望する高等学校にリアルタイム配信を行うなど、開かれた形態の授業を模索している。高校への配信にあたっては、YouTube Live を利用することで、高校側はリアルタイムでの参加だけでなく、期間限定のアーカイブ視聴も可能となっている。担当者間で把握している限りでは、単位を認定する通常講義の学外への同時配信は本学初の試みである。正規履修者の学びを阻害することのないよう配慮しつつ、2018年度は6校、2019年度は11校への配信を行った。また、授業の内容については映像記録を残し、著作権処理と編集を加えた講義資料と映像をUTokyo OCW（<http://ocw.u-tokyo.ac.jp/>）上で順次インターネット公開している。撮影・配信業務は、大総センターの特任助教および技術専門職員が担当し、TAが補助を行っている。

以上のように、朝日講座は、実験的・試行的な要素を多く含む新しい授業である。学部三年生以上の学生にとって意義のある教養教育として、一定の役割を果たすように努力してきたと同時に、東京大学の教育を世間一般に開く公開するための窓口としての役割を担っている。学生に質の良い授業と学びの機会を提供すると同時に、その内容を一般聴講者や高校生にも公開していくために、いっそうの工夫と模索を行っている。

各年度の講義（2018年度～2019年度）

2018年度 テーマ：「居場所」の未来」

- 第1回 9月26日 祐成保志（人文社会系研究科 社会学）【公開講義】  
「退却の作法」
- 第2回 10月3日 大月敏雄（工学系研究科 建築学）【公開講義】  
「超高齢社会の居場所づくり」
- 第3回 10月17日 岡部明子（新領域創成科学研究科 環境学・建築）【公開講義】  
「都市への権利」

- 第4回 10月24日 山崎亮 (studio-L 代表 コミュニティデザイナー) 【公開講義】  
「つながりづくりから考える居場所づくり」  
西村明 (人文社会系研究科 宗教学)  
「余は如何にしてO ターン大学教員となりし乎」
- 第5回 10月31日 守川知子 (人文社会系研究科 西アジア史) 【公開講義】  
「異邦人・異教徒として生きる：近世世界を旅したアルメニア人改宗ムスリム」
- 第6回 11月7日 金井利之 (法学政治学研究科 行政学) 【公開講義】  
「地域／住所／自治体という居場所」
- 第7回 11月16日 水町勇一郎 (社会科学研究所 労働法) 【公開講義】  
「職場という居場所」
- 第8回 11月21日 芳村圭 (生産技術研究所 同位体気象学) 【公開講義】  
「水と人類の居場所」
- 第9回 11月28日 田近英一 (理学系研究科 地球惑星システム進化学) 【公開講義】  
「地球惑星環境と生命」
- 第10回 12月5日 牧野篤 (教育学研究科 生涯学習論) 【公開講義】  
「『農的な生活』と歴史的・社会的な居場所—「学び」と「恩送り」がもたらす自分の存在—」
- 第11回 12月12日 辻外記子 (朝日新聞社 科学医療部次長) 【公開講義】  
「最期まで自分らしく生きるには～記者がみた終末期」  
会田薫子 (人文社会系研究科 死生学)  
「臨床現場の未来：人生の物語りに沿ったエンドオブライフ・ケアの意思決定」

2019年度 テーマ：「「つながり」から読み解く人と世界」

- 第1回 9月25日 六反田豊 (人文社会系研究科 朝鮮中世近世史) 【公開講義】  
「血縁と姓氏—近世朝鮮の家族制度」
- 第2回 10月2日 長谷川まゆ帆 (総合文化研究科 フランス近世史) 【公開講義】  
「近世フランスの女と社会」
- 第3回 10月16日 下山晴彦 (教育学研究科 臨床心理学) 【公開講義】  
「苦悩の「つながり」から自由になる」  
山下知子 (朝日新聞社 記者)  
「子どもの現実とつながる」
- 第4回 10月23日 池澤優 (人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター) 【公開講義】  
「未来を拓く死者の「記憶」—生死のつながりの視点から—」
- 第5回 10月30日 真鍋祐子 (東洋文化研究所 宗教社会学) 【公開講義】  
「つながりからみる韓国民主化運動」
- 第6回 11月6日 村山洋史 (高齢社会総合研究機構 公衆衛生学・老年学) 【公開講義】  
「つながりと健康格差」
- 第7回 11月20日 一ノ瀬正樹 (武蔵野大学教授・東京大学名誉教授 哲学) 【公開講義】  
「人と動物のつながり？—ハチ公、けれど鳥獣害—」
- 第8回 11月27日 坂田一郎 (工学系研究科 ネットワーク科学)  
「企業同士のつながりとイノベーション活動 —数十万件のつながりの分析から—」
- 第9回 12月4日 岡良隆 (理学系研究科 生物科学専攻) 【公開講義】  
「動物のオスとメスのつながりを生む脳のしくみ」
- 第10回 12月11日 田中淳 (情報学環・学際情報学府 災害情報) 【公開講義】  
「災害とつながり—社会関係の中で生きる人間像—」
- 第11回 12月18日 川幡徳高 (大気海洋研究所 気候学・環境学・資源学) 【公開講義】  
「地球と人間のつながり—環境と資源と社会—」